

川柳塔

平成十一年六月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻八六五号



日川協加盟

No. 865

六月号

第五回 川柳塔まつり

とき 10月9日(土)

役員会 午後1時—2時半

同人総会 午後3時—4時半

10月10日(日)

記念句会 開場10時

懇親宴 午後5時から

ところ アウィーナ大阪

◎詳細は後日お知らせいたします。

残暑見舞広告

本誌八月号に掲載する残暑見舞広告を募集いたします。広告のスペースと掲載料は、左記のとおりですので、よろしくお願い申し上げます。

★個人 一口二、〇〇〇円

(氏名・住所・電話番号など掲載)

★団体 次の四種といたします。

①1/3頁 六、〇〇〇円 ③2/3頁 一二、〇〇〇円

②半頁 九、〇〇〇円 ④一頁 一八、〇〇〇円

▼原稿締切 6月25日

〒545-0005 大阪市阿倍野区三好町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

川柳塔社

■川柳文芸のバイブル

川柳入門事典

全日本川柳協会・編集
葉文館出版・発行

四六判ソフトカバー／三〇〇頁
定価二〇〇〇円(送料三四〇円)

本書の内容

第一章 川柳の歴史と現代の川柳

川柳の歴史・現代の川柳・作句の実際

第二章 川柳鑑賞の手引き

古川柳・近代川柳・現代川柳・ジュニアから二十一世紀へ

第三章 川柳作句法

雑詠・題詠・時事吟・慶弔吟の作り方
推敲と添削・川柳名言集

◇お申込みは左記へ

〒530-0041 大阪市北区天神橋二丁目北1-11-702

社団法人 全日本川柳協会

電話・FAX (06) 6352-2210
郵便振替 00970-9-3575

窓あかり

小松原爽介句集

橘高 薫風

四月二十九日みどりの日、豊中のアイボリーホテルで開催のみどり川柳会35周年記念川柳大会に出た。

赤い絨緞の敷かれた部屋の椅子に掛けていて、突如野火に取り囲まれた幻想にさいなまれる。日本武尊の草薙剣さながら炎を振り払わねばならぬと思うほどで、余程神経が疲れているように思えた。

それで五月一日のときさんの大会に欠席し安静にしていたが、大会を偲びながら小松原爽介句集『窓あかり』を読む。

爽介さんは創始者の三条東洋樹先生の川柳のころを立派に引き継いでおられる。平素から自らの意向を明確に示すタイプのお人柄とお見受けしていたが、まことにやさしさに溢れている。

階段の手すりを掴む敗け戦

人生の過程を勝ちと敗けて処すことは

男らしい。手すりに手を掛けて階段を上がるのは敗者の姿、思いひしがれている。勝者は階段の真ん中をどつどつと駆け降りる。個性鮮明なる作品だ。

ゆつくりと水呑む父に近寄らず

酔醒めの水を立ったまま飲む父の姿が、薬を飲む水のあとの思案の態か、具体的に触れず父の苦悩に関わるたずまいを感じさせる。「水呑む」ことで心情の厳しさを表現する、これが短詩の腹芸だ。

地下街で一度こだまを試したい

地下街を改めて眺め、地下街の本質を見直すと、これは四角に区切られた隧道ではないか。無人の夜にはずい分遠く迄こだますことだろう。しかし文明の屑は味気ないだけである。底流に批判あり。

余生とか子のやさしさが胸に棲む

東洋樹先生の薫陶がそっくり形に出たと思える句で、爽介さんの師への眼指しの尋常ならぬを感じる。

子と暮らす月日の中の春惜しむ

東洋樹

爽介さんも師を越える難しさを実感されているに違いない。

組板の凹みは勲八等ぐらい

人生の重荷を振り分けにしている妻への感謝が惻々と迫る。勲八等といがしるに述べているようで必してそうではない。爽介さんのところは、勲章など俺は要らぬが妻には八等位でも贈ってやりたいたの思いなのである。

スーパへ行く仕方のない夫婦

「仕方のない」夫婦の有り様は文字通り仕方のない毎日で、所在がないとか、屈託のないとかでは充分に表わせない。

荒い措辞を求め、それを成功させられた。

路郎先生に去就の似た東洋樹先生も川柳は批判詩と標榜されていた。川柳塔の目指す句作りに通じる句柄を、句集の最前部四十頁の中から寸評させて頂いた。

妄言多謝

作品

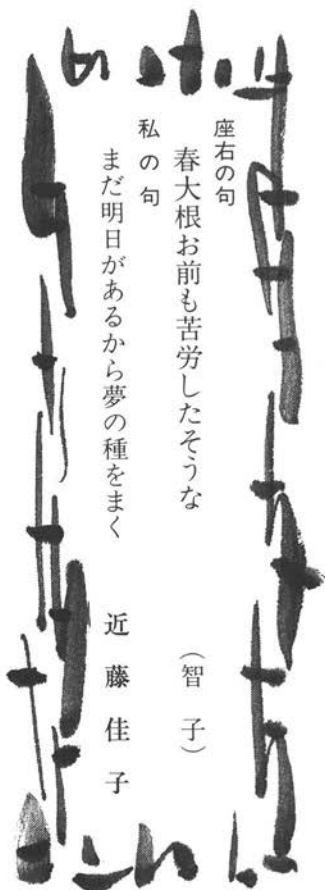
祝 五楽庵さん古希

庵主古希百楽庵を屈指しませ

蝶蟻に無益な死無しコソボ飢ゆ

日の丸がまたも爆発しはせぬか
孫二人たこ焼きの前気を合わせ

誕生日ひとりひとときが至福



座右の句

春大根お前も苦労したそうな

(智子)

私の句

まだ明日があるから夢の種をまく

近藤佳子

川柳塔 六月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 窓あかり 小松原爽介句集

大和郡山城趾お城まつり

川柳塔(同人吟)

佳句感想

自選集

川柳の群像 片岡つとむ

誹風柳多留二四篇研究 6

水煙抄

大空のこころ (101)

秀句鑑賞「同人吟」
水煙抄

渺湖抄

茴香の花

橘高薫風……(1)

宮口笛生……(2)

橘高薫風選……(4)

橘高薫風……(52)

東野大八……(53)

東野大八……(56)

河内天笑選……(58)

河内天笑選……(62)

橘高薫風……(85)

春城武庫坊……(86)

小寺花峯……(89)

八木千代選……(86)

西出楓楽選……(90)

大和郡山城趾

お城まつり

宮口笛生



奈良県下の桜の名所の一つに、大和郡山市の郡山城趾があります。戦後すぐ植えられた約千本のソメイヨシノが、広い城趾一円にあ

り、桜の頃となればボンボリが飾られ、夜には電気が入り、数箇所よりライトアップもあり、夜桜見物にも有名です。毎年四月一日より十五日まで、大和郡山市主催によるお城まつりが開催され、期間中の日曜日には、郡山源九郎稲荷より、白狐に扮装した子供達による白狐行列等、色々のイベントが開催されます。郡山名産の金魚即売会始め、盆栽や植木市、たくさんの露店が並び連日人で埋まる盛況です。

城趾の真ん中に城趾会館があり、此処のロビーにて、川柳を知らない一般の人にも、川柳を知っていただいて作句してもらおうと、大和郡山市民川柳会が、お城まつり協賛川柳

「ガラス」	倉益一瑤選	(92)
一路集「休む」	長谷川呂万選	(92)
「釘」	牧淵富喜子選	(93)
初歩教室「迷惑」	吐田公一	(94)
■句集鑑賞『師弟』万感無量の句集	東野大八	(96)
■句集紹介『しまなみ』	小島蘭幸	(97)
■エッセー	奇蹟! 十数年来のセンソク退散	(98)
	花七日	(99)
二賞選考改定について	西田柳宏子	(98)
五月本社句会	井上照子	(99)
各地柳壇(佳句地十選/西村黙光)		(102)
柳界展望		(106)
六月各地句会案内		(101)
■編集後記	みつ子・金太	(123)
		(124)

座右の句
私の句

落椿情炎未だこちら向く
雑沓の中あの人傘が来る

石森利昭

(薫風)

募集と、昨年募集して入選した句、約五十句を私が短冊に書いて、大だ的に展示して、一般の部とジュニアの部に分けて、今年の川柳(お城まつり雑感「春」として募集をしています。お城まつり期間中何万もの花見客が訪れられ、城趾会館ロビーで休憩して短冊の展示を見られ、色々の批評も行きかい大変好評で人气的になつています。

私は奈良市在住ですが、大和郡山口市はすぐ隣で近い事もあり、大和郡山口市民川柳会が結成されてより、すぐ会員となつてお付き合いをさせて頂いていただいています。今年も三月三十一日午後、城趾会館ロビーに短冊の飾り付けをしました。今年の展示短冊は、ジュニア十名十句、一般三十七名三十七句でした。

毎年入選句は、大和郡山口市民報「つながり」に発表されて、郡山市より賞品が進呈されます。また展示短冊は四月十五日十三時に、取りに來られた作者の方に進呈しています。

毎年四月第二日曜日十四時より、お花見川柳会を、城趾会館内で開催しています。今年は四月十一日でしたが、桜の開花が早くて葉桜句会となりました。それでも熱心な会員で盛会でした。句会終了後桜の下でシートを敷いて、酒とビールで楽しいお花見をいたします。各地に花見の名所はたくさんありますが、郡山城趾の桜も一度見に来て下さい。

川柳塔

橘 高 薫 風 選

熊本市 永田 俊子

愛染の風にさくらが狂い舞う
夜ざくらに恋を深める道祖神
平成の男子をさくら値踏みする
もののふといくさと桜と茶髪の子
西行も兵も過去形花万朶
霧おぼろ記憶おぼろの花浄土

鳥取県 原 みさを

境界のそばの魚がよくふとる
境界の杭が行ったりきたりする
警策をもらい過去から立ちあがる
銭になることのほかには動かない
誰が本音を上げるかポート大揺らし
心閉じた子と冬の波見つづける

生駒市 北山 悟郎

ああ桜 男魂地に墜ちる

桜咲き老人力が燃えて居る
筋金が暗い世間を嘆いてる
リストラに婿と息子がおののいて
なり振りを構わず前に向いている
取巻きが離れて運が向いてくる

川西市 松本 ただし

見て聞いて納得さしたまがいもん
大正の重い鎧は脱がないぞ
四捨五入して小吉でよいみくじ
日の丸と君が代僕に生えた苔
呆け封じオレと俺との一騎打ち
ピツタリと嘘を見抜いて頬被り

弘前市 高瀬 霜石

友だちに言えない金のない話
くたびれた旗だが風を待っている
空缶を蹴っているのは社長だな

銀行へ偽の笑顔を貼りつけて

恩人が亡くなったのに腹が減る

八時間きちんと眠る楽道家

和歌山市 川上大輪

石投げて蛙を少し黙らせる

万歳の後のため息見てしまふ

ビデオカメラへ姑は直立不動なり

禁猟区なのにキョロキョロしてしまふ

他人のカメラで知らない人を撮っている

のら猫は肥り少年飢えている

唐津市 宗水笑

失業率春は名のみ風が吹く

休耕に老人力の鉢の世話

陶芸入門 縄文土器に焼き上がり

報道の自由が怖い通夜の席

ふるりのネオンが旅をしめくくる

説教和尚落語のコツで説き

豊中市 田中正坊

今日こそは舞妓に会えるクラス会

料亭へ行くときの靴履いて

喜寿祝う会費一万五千元

老人会その名はグリーンクラブなり

年長のお方と上座すすめられ

妻の忌に小人一日閑居する

西宮市 井上信子

髪などに頓着はせぬ竜馬ゆく

春信に髪の魅力を教えられ

髪染めた夫の姿良しとせず

鉛筆で綴った日記亡父のこと

服装を見るだけでよい晚餐会

池の端の睡蓮つばみ静かなり

富田林市 藤田泰子

私に時代遅れという誇り

さくらさくら人もだんごも食べ飽きた

さくら餅話し相手のいないお茶

人形にはなれぬ私の衣替え

散骨に終の港は珊瑚礁

一枚上の敵だと思ふアツプルバイ

茨木市 堀良江

竹林に居て潮騒を聞くごとし

疎開してこの港町ふるさとに

一寸先わからないから生きられる

整然と講義ノートの丸い文字

時々メニユーかえてとグルメ猫

母の指細かった小さな翡翠

先生の偏食だけが直らない

英語の先生丹野吉左衛門

東大阪市 谷口義

漢文の先生中村富十郎

パンにバターたっぷりつけて春の朝
面白いことはないかと春は来る
桜咲いているよと四十九日なり

池田市

栗田久子

何も無い町だと聞いて降りてみる

若者の人間賛歌ひとしきり

波打際打ち寄せられる貝の歌

花の寺今は菖蒲の開く頃

紫陽花は未だ咲けないと身構える

薄曇ためらい勝ちに合飲の花

横浜市

菱田満秋

満洲に行けば蒙古に陽が落ちる

超軽量傘を持つてる晴男

ゴミのない国でカラスが保護される

ゆうべの女が妻を演じてる

時は金なり歩行中話し中

銀行に預かり賃をとられそう

竹原市

三宅不朽

方言地弁地酒をあふれしむ桜

無理をすなすなよ代つてはやれぬ

木蓮の肺わずらいし頃を昏れ

鉋研ぐ形見の木肌かもしれぬ

ランドセル母という字に見えてくる

恋文を孫よいつばい書くんだよ

和歌山市 池永正甫

わが部屋も満更でない白障子

二十一世紀を乗せた乳母車

お互いに古くなつた腕時計

パソコンは年の功など遠慮せぬ

角帽もいつの間にやら時代劇

長いのはたこ焼きを待つ五分間

岡山市

井上柳五郎

無為徒食飯碗すこしでか過ぎる

弱虫でも一本芯を持つ男

木の芽萌ゆ雑木林の抱く古墳

春がすみきょうは見えないくにの山

乱舞する桜花の樹下もさんざめく

お見合いもタッタ一度で末の孫

鳥取市

倉益一瑤

わたくしの絵にはたくさん窓を描く

眼裏を赤い記憶が揺れている

同性にとつてももてる低い鼻

わたくしの灰汁が湯舟に浮いている

春なのに弾まぬ影がついて来る

音楽のシャワーが五感刺激する

鳥取県

さえきやえ

つっぱったわけを笑顔で聞いてやる(こんたとかかわって 6句)

下市の言葉ではなそごんたくん

話せばわかり流す涙も持っている

あしたまた来ると指切りしてくれる
五合めし炊いてごんたを待っている
この子等と残る命へ灯をともし

弘前市 一戸ツネ

八十路の春浪速の酸素吸いに行く
昼食は梅が綻ぶ大阪で

スケジュールひとつひとつに置く命
趣味ひとつの幅を広げてる

参加して津軽の木偶のなみだ壺
法善寺小雨しよばしよば上燭や

弘前市 小寺花峯

裏道を好きかも知れぬ僕の影

少年のにきびが破裂する迷い
逆立ちをするから過去の血が騒ぐ

回転の椅子が目標見失い

価値観の違いで生きたる重い靴
左遷地の酒に涙を吸いとられ

弘前市 櫻庭順風

おこしやすと柳友うれしともうれし

初対面数年来の友のごと
直撃だ上擦るに上擦る呼名

七十五周年死角も埋める人いきれ
塔きさらきさら柳友の輪ここに

再会のように懐かしい路地の句碑

呉市 榎田英詩

桶の音する温泉で満ち足りる
女客ワインを召した声になる
早起きの妻体温を置いて抜け
あやふやな私に影が二つある
始発待つ缶コーヒーで暖まる
難聴の身です静かに逝かれそう

広島県 藤解静風

一泊二日七十五周年の縁に会う
川柳ノート五冊わたしの知的所有権
コンピニの無表情さが性に合い
風邪ひきのマスクが胡散臭くする
夕暮れの雲うまそうに焼けている
少し騙し少し騙され夫婦する

香川県 木村あきら

大海の夢捨て切れぬ水中花
底を這う景気細腕試される
奥山の石は尖ったままでいる
トンネルを抜けると碧いあおい空
人間の真価問われている老後
礼束で裏門開けにやってくる

食吉市 松本よしえ

水涸れた川に自転車捨ててある
花見酒ついに青鬼愚図りだす

こつこつと貯めて閻魔に袖の下
振興券祭りみたいになられる
酔った顔見せない人で味気ない
せびるのは少し酔わせてからにする

吹田市 石原靖巳

回遊魚今日も句会へいそいそと
古希過ぎて待ったするのが癖になる
昇進の息子大変だなと思う
春なのに振興券が浮かれない
職安に春の日差しが届かない
パンパカパーンと浮かれておれぬ二度の知事

大阪市 清水絹子

先生が好きで今年は皆勤賞
ハンサムな先生に足診てもらう
彼岸明け蛇口の水も春の音
特価品ウエスト直し丈直し
若葉マークの嫁の運転断われず
天気地図北が最後のフルムーン

米子市 澤田千春

歩け歩け大地と語り合いながら
仏壇も今日は会議かにぎわしい
霧晴れて竹人形に嫁が来る
旅の駅楽しい歌の本を買う
影法師役を忘れて飛び出すな
平凡にくらして鳥の声を聞く

振興券買った孫へついて行く
彼岸去り在庫はいくつ天の雪
いじめなどない輝いている瞳
地の恵み天の恵みに支えられ
真知子巻きとっても似合う名残雪

弘前市 佐治千加子

津軽富士男いっぴき金魚売り
たばこ一服金魚思案の街の角
天秤棒 金魚すなおに夢を見る
金魚売り呼び止めている亡母がいる
春の雪 目覚め不安な金魚たち

弘前市 須郷井蛙

新製品次々形変えてくる
お守りも賽銭効かず不合格
びしょびしょになってうれしいトッシュューズ
ゴミだけを多くしている包装紙
減税の後に重税押し寄せる

弘前市 高橋岳水

吹く笛へ踊ると決めている不遜
服薬のための三食とはわびし
ストレスが溜まると増える壁のシミ
逃げ水と行けるとこまで行くと決め
涙腺の脆さ老人力とする

弘前市 斉藤 為

弘前市 蒔苗果林

花盛りりんごの合唱すさまじい

一人爺りんごの花と長い恋

咲く位置に花の生涯読む爺

エリートの花陽と人を呼ぶうまさ

人みんな花と夢見る夢子です

弘前市 富士慕情

生も死も究めきれずに般若湯

写経する筆から罪のひとつずつ

鶯の今日は良い事ありそうなる

郭公の声が緑の風になる

一匹の蠅を目で追う蠅叩き

弘前市 岡本花匠

若葉萌えこころ洗われ大阪城

空堀を嘆く豊公こぬか雨

破れ障子風の噂も雑音も

こだま返り今日を大事に舌下錠

才媛の娘にどきまぎ相撲草

弘前市 小枝ふさゑ

極楽と地獄の岐路にやじろべえ

多数派が固くスクラム組んで冬

今朝の雪ニュースにならぬ北の冬

甘味料少し足りない夫婦箸

ひまわりも月見草も好きな花

黒石市 相馬一花

一言で済むのにくどくど言う借り手

越中も文化遺産になる時世

ヘアとは髪の意味です広辞苑

夫より犬を大事にする女房

教養のない振りをする学識者

十和田市 小笠原敏人

三春四冬こんなことばが生れそう

雪の朝桜の開花を聞いている

転住で猫残されて爪を研ぐ

散歩道変えてうぐいすまだ聞けず

娘が親に子の友達もみな親に

十和田市 阿部進

コップ酒のんで政治をめったぎり

医療ミスうかうか入院できません

タマゴツチお部屋の間で忘れられ

窓際に社の裏表よく見える

早春の喜び招く福寿草

青森県 西谷大吾

忍従の汗が滴る農の顔

一本の樹にも伸びゆく空がある

左遷地の海はあまりに青すぎる

帯きゅつと締めて火を噴く嫉妬心

点滴のリズムにいつか軒揺く

青森県 諏訪柳々

抜け殻に帰るさびしさ思うつらさ

人生の序列狂わす大たわけ

モシモーシあなた科学を信じますか

光背を背負う仏陀のあばら骨

人間を上位に据えた神のミス

仙台市 川村映輝

富士の山生まれながらにして霊峰

百までは指を折らずに分る年

若い娘の煙草はらはらしてるだけ

寿命は貴方まかせて本を読む

母上への孝養今も悔い残す

大宮市 八田敏

春うららまだまだ死ねぬ花の下

万歩計子は徘徊を心配し

古希過ぎて背広が何故か身にそわぬ

プライドを捨てた男の前屈み

麻痺の妻介護五年の老いの坂

町田市 竹内紫鏡

国文法忘れず九十の詩を唱い

古希にして無芸 観光しかできぬ

白髪が毅然 葬儀のマイク持つ

焼却灰からの路盤を踏む万歩

年ごとに未知の恐怖よ温暖化

八王子市 播本充子

吉報を内緒内緒とリレーする

カレンダー夢を叶える為に繰る

狸とも狐とも手を繋いでる

溺れてる若さへロープ投げてやり

新世紀迷いの虫も動き出す

横浜市 清水潮華

越境の庭木も新芽芽吹かせる

俺よりも先に逝くなと口説かれる

顔を見て言いたいことが引いて行く

もて余す暇も寿命に数えられ

通勤路変えてさくらの下を往く

横浜市 菊地政勝

通ぶって高いワインを買ってみる

ウイंकが妻のシグナル酒の量

生きるほど不幸になると人が言う

無所属と名刺を刷った退職後

会社辞め貧乏だけど面白い

横浜市 後藤早智

花の芽は三寒四温見逃さず

菜の花にれんげ桜の紅が映え

葉の緑見せて桜の満ちた顔

楚々とした巫女に桜の化身見る

春爛漫今年の色は決めました

静岡県 蘭田 模杏

漫画にも春の躍っている雑誌
早よせんと花の命は短くて

春爛漫トンネル以外皆さくら

花卉がアクセサリーに着く小雨

口ほどに動かぬ足で従って行く

富山市 舟渡 杏花

蘇生の手で彫り上げる阿弥陀仏

自由とはこういうものかバックめし

右の視力がとんでもないものを掴む

節操を曲げたことない銀の匙

善玉のオニオンスूप目の前に

富山市 酒井 輝

キズバンをいろいろ貼って遍路旅

一ぴきの舵で魚群が向きを変え

一ページ一句が浄化する大気

老い先の余力を覗く視力表

貼り付けた笑顔に滲みる冷えた風

富山市 島 ひかる

雪国の春だチンドンコンクール

しょっぱ目のこんぶ茶空気とませる

喜ばすつもり泣かれていた美談

老木の中に根つこのある若木

異議無しへ机の下で手を叩く

富山県 増田 紗弓

巻紙に祝辞を織ってゆく佳き日

兼六園パワー笠松から貰う

爪ほどのことでもふたりなら記念

酔うことと夢を飾っているさくら

葉桜はためらう祖母の手に似たり

犬山市 早川 盛夫

あんな事出来てこんな事が出来ず

君が代に直立不動してしまふ

哲学をちゃんと持つてるホームレス

そのうちにボクもあなる車イス

反抗の形で服が脱いであり

可児市 板山 まみ子

顔見知り名前は知らぬ散歩道

気心が知れて空気は同じ味

減量をめざす一かき力こめ

これでよい これでよいかと立ち止まり

爺ちゃんが子供にかえる祭笛

京都市 都倉 求芽

春全部吸う気ブランコこいでいる

俤は蕾のころのままの君

暮れ残る街に揃わぬ軒あかり

ガーデニングこれぞ箱庭兎小屋

紙コップ本日はああ尿検査

京都市 山海友 熙

手を合わすことを忘れた古都の風

高台寺辺りの松は母想い

愛されて三年坂も夏の風

もう嫉妬することもなし夏の帯

好きだとは言えず鴨川水ぬるむ

京都市 小西 未佐子

誘われたほうがはまった趣味の道

小引出しあちこち開けて出た名前

新幹線下りれば戻る京都弁

誘いたい人の仲間へ誘い水

引き返す勇氣確かめ出す一歩

京都市 稲葉 冬葉

今ここで走らなくても陽は昇る

間違いの電話にしては詫び上手

結局は私案につきる六法書

人を視る眼鏡を替えてアイウエオ

そわそわと無料バス出る月曜日

大阪市 西出 楓 楽

いざと言う時武器にする京ことば

話下手だから口数多くなる

うちへ持ち帰るとスネる鉢の花

灯明をあげて亡夫とデートする

背もたれのない椅子性に合っている

大阪市 本間 満津子

どちら向いても鏡の部屋を抜け出せず

じゃ又ね会うが別れと胸の内

やさしい泡になって貴女が来た喪明け

道聴いて遍路は胸の鈴鳴らす

もうええわ探し止めたらここやった

大阪市 神夏磯 典子

ミニ溢れバラもれんげも美しい

雑巾は何にも言わず耐えている

ちやらちやらと夢物語もう出来ぬ

のどの奥まだ残ってる小さい骨

花疲れ五月の風が押してくれ

大阪市 榊本 落児

地蔵さんたんと並んで何話す

命がけ近頃そんな人おらぬ

山男日本人の顔をみた

火葬場の僕のけむりはすくと立ち

また少し視力が落ちた粥をたく

大阪市 田中 節子

情熱に燃えた写真もセピア色

バツカスも美酒か媚薬を決めかねる

ギャンブルと酒につながる寂しがり

雲水も歩の乱れくる春の鬱

飼い主も猫も老いゆく白い髭

大阪市 北 勝美

選挙戦福祉を叫ぶ拡声機
老妓舞う扇の先まで血が通い
御影堂に和上が偲ぶ涛の音
星塚に宇宙まんだらかいま見る
ご朱印帳筆の運びは書の大家

大阪市 小林 周 信

五月晴れ虫干しをする自尊心
先ず御札言うて断る気の配り
はさばさの髪で終日妻の留守
すらすらと鉛筆だから書けること
こけしとして時に茶髪が羨まし

大阪市 川 端 一 歩

花見して脳の酸素を入れかえる
玄関を出ればおしどり夫婦です
マスコミよ敗者の背なのドラマ追え
あやまると何のことかと呆けられる
褒めことは少しトーンを上げておく

大阪市 杉 澤 汀

花祭り酒浴びて寝る天の邪鬼
仏ではないので三度目はあかん
お寺参りで古里の人に会う
割り勘と心得てますレジ係
渡り鳥今年は桜見て帰る

大阪市 渡 部 さと美

仁王さん衣裳つけたら名役者
インド中国日本と変わる釈迦の顔
ボールより兎はよく転ぶ草の上
建て替えて古いアロエもまた並び
子が三人みな優しいのも淋し

大阪市 津 守 柳 伸

満開へパアッと散らせぬ振興券
口八丁手も八丁の耳年増
リサイクルひと針ごとにある祈り
祖谷溪の鯉はためいている旅情
欲張りへ振興券は愚痴になる

大阪市 河 井 庸 佑

厚い壁やる気勇気で立ち向かう
物知り顔するでなかった恥ずかしさ
第三者案外的を射た意見
認識を新たに時の大切さ
越えるものないが歳だけ父越える

大阪市 川 内 叭 笑

老人力明日の日本へ活かしまひよ
定数割れで学力問わず這入れます
都知事殿 四年後ノーと言えますか
和平とはミサイルかます事やろか
過疎の里ダイオキシンでなお過疎に

大阪市 玉置 英子

結局は辞書を引く字を妻に訊く

桜だけは見逃せません車椅子

まほろばはのぞきめがねのその先に

オホホとは笑ったことのないハハハ

ばったりと今日は会いたくない人に

大阪市 板東 倫子

たこやきを昼餉に孫と花の下

手に余る土筆貰うて困る嫁

まだ生きてはったと古老噂され

責任はどっちにあるの花と蝶

カワイイとギャルに呼ばれるおじいちゃん

大阪市 辻川 慶子

四月馬鹿この世を少し楽しもつ

桜草女系家族も老化する

花柄の傘 六月の雨に差す

石段をゆっくり降りる思いやり

いわし雲あしたは誰とはなしする

大阪市 大塚 節子

排気ガス あ・んの獅子も口つぐむ

平成のグリコのネオン男前

橋筋のビルに残った老舗の名

通り抜けから風邪もったまま梅雨の冷え

うど到来それ木の芽買え竹の子も

大阪市 津村 志華子

雨だれは遠いあの日のセリナーデ

温もりに飢えて亡母恋う花手桶

ひとりぼちショートケーキの誕生日

自己嫌悪とつても怖い夢をみる

旅人を詩人にさせる花の道

大阪市 町田 達子

一年を一気に花の精燃える

深刻な話は聞かぬ缶ビール

可愛さは犬の身をわすれているタロ

青丹よしタロも車へ花遍路

孫の婚温い家庭を言い添える

大阪市 川原 章久

一病がつかず離れずいて元気

うっちゃりを食う老人の勇み足

あせらずに巻返す時期待つ不況

人の住むまだ先がある丸木橋

色紙一枚命与える絵の具皿

大阪市 井上 白峰

まったなし地球は回り四季巡る

石橋を叩く暇なき世の流れ

かすみ草主役の陰で炎えている

頑張れと声をかけるが手は貸さず

器では無いのが口を出したがる

大阪市 宮本 欣史子

エライコッチャ年金だけで暮らせない
いま国がどうあろうとも日本人

手探りで自分守って行く老後

だんだんと老母に似るのを覚悟する

夫とはとても身近な他人です

大阪市 中田 あい子

二月宵金星木星ランデブー

律義なる母の家計簿ガラスばり

長生きの家系に生れ戦死の子

あつさりと齒のうくお世辞いうてのけ

堪えること女の道というた母

大阪市 鈴木 トヨ子

不況風ババが見せてる底力

四月バカ本当に降って来た雹

夜桜へお手手つないだ老夫婦

拾うて来た犬が私を離れない

バスガイドとちつて車内盛り上がる

堺市 神原 文

おおらかな国わたしにも羽生える

太陽は裏というのに眩し過ぎ

南国にゴルフボールは素直なり

太いのが泳ぐ安心して泳ぐ

ホッとした旅より帰り又ほつと

堺市 志田 千代

遺書はまだ鉛筆書きのままである

ばあちゃんの水ばかりやる植木鉢

シューベルトよりババ即興の子守歌

のんのさまばあちゃんの手も添えている

ばあちゃんが嫌いになったばあちゃん子

堺市 柿花 紀美女

白黒をはっきりつける不器用で

気楽さと隣り合わせにある淋しき

歳月の早さが恐い向う岸

籠の鳥食事きっちり惚けている

サービスの良さを味方と勘違い

堺市 山本 半銭

春なれや四綾仏高松万五条桜舞う

前垂れの赤に映えてる花地藏

娘をおくる長持唄と賛美歌と

長雨の竹の雫は竹のいろ

墓洗う良い事ばかりよみがえる

堺市 黒田 真砂

筆不精詫びて母への花便り

次々と悪いとこ出来春の鬱

想い出は亡母と綾とり夢の中

桃咲いて心の渦がとけてゆく

引き出しに夢のかけらがつまってる

高石市 浅野 房子

少年の夢を紡いだ赤い靴
縮んだか消耗したか身の丈よ
老骨にもはや鞭打つことはない
アメリカ村老人ひとり紛れこみ
乾杯へすぐに気の合う友がいる

貝塚市 池田 寿美子

若人も遍路の仲間花の旅
お花見のお洒落を花に見てもらう
老春や食べられるうちグルメ旅
月明りこころの底を洗い出す
哲学の道にデュエットしたい人

和泉市 西岡 洛醉

一病を大事に平成生き続け
暗雲を払い切れない嘘ひとつ
米を研ぐ女の夢を持ち続け
道草の或る日へ欲が顔を出し
世界地図平和の彩が塗りたくて

岸和田市 高須賀 金太

南無大師遍照金剛遍路道
菜の花のやさしく揺れてゆく遍路
ボランティアの原点をみるお接待
大師のこころ歩いても歩いても
まだ夢の叶わぬ遍路旅である

岸和田市 岩佐 ダン吉

受付で僕の名刺が透かされる
はらはらと砂幸せも落ちていく
一山に私もされているらしい
核ゼロがびつたりとする青い星
返り血は覚悟で君に言うている

岸和田市 原 苑子

春の陽は鏡の中に老母が居る
悲しみを陽気にくるむコメディアン
落書きのようでも孫の絵は宝
用意ばんだん調えて娘は嫁かず
詫び足らぬ精進落しのわさび効く

岸和田市 原 さよ子

咲き揃う花へちよっぴりおしゃれして
ばあちゃんは大安を選んで梅漬ける
稼ぐこと夫にまかせて趣味三昧
子育ての重荷がとれて太り出す
ごてたつてもう似合わない歳になり

岸和田市 芳 地狸村

十津峡のお風呂ではずむ志士談義(十津川峡 2句)
せせらぎと桜に酔って花見酒
先代の顔が重荷になるのれん
切符切るパンチの音がなつかしい
先頭を駆けて落伍のお人好し

岸和田市 寺田甚一

以下同文わたしは十ば一からげ
引揚げで泣いた港に行くツア―
足腰の痛さダンスが忘れさせ
気遣いが嫌で訪問予告せず
喜怒哀楽包まず涙もろくなり

岸和田市 藪野けい子

転居してこの一本道深夜帰る
お遍路さん迎え一枝ふゆざくら
梅の香を心に残し万歩計
ダイオキシ文明の世の落し物
桜の下手弁当食べる男女組

岸和田市 井齋一齋

神の意に楯突くような臓移植
大赤字疑似餌も欲しい決算期
割り勘に手間取る女五人旅
金婚式歩幅を合わす鶴と亀
一生にお金で買えぬ友が逝く

岸和田市 長谷川呂万

恋してる幸せの顔みやぶられ
彼想い人さし指のピアノ曲
ミレニアム(千年紀)その瞬間に生きている
緊張は若葉マークの隣席
おしゃれ着に靴まで揃え妻散歩

岸和田市 井伊東吉

不審船防衛論議を勇気づけ
バラの木に溢れ出る芽のバイタリティー
桜咲きエンジンかかる老人会
ランドセル背負う姿に感無量
いくつもの励ます会にサインする(選挙)

岸和田市 田中文時

時価と言う曖昧の無い回り寿司
白蟻が隣まで来た春の鬱
合格と訃報交々泣き笑い
煙草屋の親父禁煙してゐるらし
酒の所為あんたの所為や無いんかね

八尾市 宮西弥生

一日のリズムの中のトコロ天
陽がのびて余裕の窓にしてくれる
友達を集めホテルのティールーム
おーいお茶答えなどない花の冷え
逃げ道をつくって今日も家を出る

八尾市 高橋夕花

桜満開伝言板の青春よ
木蓮と心あわせて旅に出る
花冷えの町で出会った恩一つ
二三日私のさくら咲いていた
おぼろ夜は踵かえして握手する

海難救助の話がはずむ船溜り

八尾市 宮崎 シマ子

流れには乗れぬ私はポンコツ車

妻と酌む酒ならさらに薬かも

平均寿命過ぎて塩味楽しめり

家計簿は母の辛抱の記録帳

八尾市 内海 幸生

手刀を切れぬ力士の勝ち名乗り

病む妻が酒に意見を垂れてくれ

伸べた手が医者のコールな答え聞く

絶対に割れぬ口から飯を食う

水だけの札に真つ赤なグリヤ咲く

八尾市 大内 朝子

絶頂の恋を別れてゆく美学

出直しへ今日が一番若い日だ

再会へ濡れゆくころ演歌なり

生き甲斐へ夢ふりかける飯茶碗

老いらくの恋かてハート真つ赤つか

八尾市 村上 剛治

父さんのハードル徐徐に低くなり

子はじつと見ている父の渡る橋

優等生杓子定規がとても好き

司馬遼の本に目覚しついている

嘘ばかり言つて介護を終えました

ランドセル祝うさくらも咲きました

さくら吹雪にちよつと六方踏んでみる

いちばんの笑顔形状記憶する

力まんとできることからばちばちと

まだ戦引き摺っているさつまいも

八尾市 吉村 一風

聞き役に回るやさしい顔になる

赤い傘ふわりきれいなぼたん雪

大の字になつて眺める鯉のぼり

昔の苦勞笑い話にする夫婦

背のびせんでもええのに呑むと悪い癖

八尾市 長谷川 春蘭

露味噌の小皿の中に見る故郷

人と人出合いの温み抱いて生き

若葉せし大樹に我の小ささよ

飽きるほど寝かせておきぬ合格子

母の日は母に謝る事ばかり

八尾市 高杉 千歩

木の芽あえほとけと話す梅雨晴間

六月は父恋月よ麦畑

スーパで交換食べてしまった振興券

短夜や苺が苺らしくなる

もう誰もふり返らないプチトマト

八尾市 神原 まさと

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

いい笑顔返す明るく育ったね
納豆を買うにも裏を見てしまっ
たんばもガーデニングの仲間入り
蝶蝶の舞わぬ菜の花淋しそう
春雷や名残りの花を明日は見に

八尾市 生嶋 ますみ

幸せに今年も花見できました
現代っ子も卒業式に涙拭き
雀まで咲いた咲いたとはしゃぎたて
リストラに影響あつて休めない
春うらら小犬のくさるとき放つ

藤井寺市 高田 美代子

うなずいているが解った顔でなし
落ちこぼれいいではないか元気なら
二千年に植えるいい苗をさがす
お見舞いへ音のせぬ靴履いて行き
前向きに生きても先は知れたもの

藤井寺市 福元 みのる

噛み殺すレディーの欠伸目を逸らす
河馬の欠伸で写真一枚埋められる
鬱の字をもう覚えたと妻が言う
八十三 八十六の地区当番
老いて子に従うわけを分かりかけ

朝刊は寝ぐせのついた髪のまま
えんぴつでせせらぎと書く川の音
鮭五郎海の深さをまだ知らず
こぶし咲くかつてわたしも上向いて
二千年誕生の子は身ごもらぬ

藤井寺市 中島 志洋

植本市金のなら木はないかいな
労りの手を振り払う若作り
他人から見れば理想の嫁姑
メーデーのお蔭あの娘と肩をくむ
別居した訳はどうやら酒らしい

松原市 玉置 重人

眼医者から帰りマンガを読んでいる
足を知る私も老いてきたらしい
制海権 制空権は死語なりや
再会の友の話題は血糖値
太閤はんをいっぱい褒めた春の城

松原市 小池 しげお

入れ知恵の指人形が動かない
思い出の広がるままに曼珠沙華
上手い字で書いた上棟式次第
焼芋屋妻の気前を知っている
灰皿をつい一ぱいにさせて通夜

禁煙を繰り返してゐる律儀者

羽曳野市

榎本吐来

解説はあるが脱出策のない不況

名声に票が流れる知事選挙

造幣局の桜に挑む川柳子

花のいのちを考えている夜の蝶

羽曳野市

吉川寿美

椿ほど悟り切れない盆の窪

男と女にらしさがあつた昔の絵

やり場ない憤懣レモン切り刻む

万年筆のインクが涸れてゆく文化

肩の力ぬけば何とか開く道

羽曳野市

福田満州

花冷えと不況に耐えている桜

病院のさくらトンネル潜る幸

すれすれで振興券に見放され

失敗のたびに罰金なら破産

月参りみたいに眼科歯科内科

羽曳野市

三好専平

ありがたいことにぐっすり眠れます

買う金もないのに本屋のはしごをし

嘘でええいっぺん美男と言われたい

散つてまだ舞うのを忘れない桜

ばかばかしい嘶ですがと五十年

水仙が一輪咲いて庭の隅

先生と言われてからの不勉強

音楽の教師カラオケうまくない

生徒から人気があつて出世せず

先生を困らせていたのは私

羽曳野市

徳山みつこ

枝垂桜の凄さ青空従えて

手を挙げて歩道に弾むランドセル

公約の期限が切れた当選後

葬式はマメ議事録に名が見えぬ

終章はパツと明るい色がいい

富田林市

片岡智恵子

鵜の首の魚吐くたびに増す孤独

老眼鏡はずすと過去がそこにある

枯れていくいのち仰山水を飲む

ほどほどに顔出し無視を免がれる

雪吊りの松呪縛から目を覚ます

富田林市

松本今日子

亡母さん噂してます桜の下

波風を立てたくないから凡夫婦

コーヒーの美味しい店も閉めはった

油断した顔は鏡に見せられぬ

夜桜が見たくて孫を誘い出す

連休の花よりダンゴ三兄弟

河内長野市 井上喜醉

老人パワー地道な風で輪を広げ
嘘がある夫の顔を覗く妻

汚れても青空好きな鯉のぼり

大変な時代ネットで夢を見る

河内長野市 加島由一

携帯の話はやはり他愛無い

行くあてがないので布団干している

花満開今年も同じ人と観る

貧乏に慣れてる振りが板につく

逆境にやはり笑顔は欠かせない

河内長野市 植村喜代

お水取り済んで足ふみしてる春

家増えて山がだんだん遠くなる(ヘランタより)

一句出来慌てて電気点けて見る

来る時は電話入れてと言っておく

目が覚めて夢でよかった世紀末

寝屋川市 平松かすみ

祖母 母がこんなにしていたよもぎ餅

沈丁花匂いそろそろ浮気虫

よく見える鏡があつて裏返す

違和感がないので尻に敷いてます

町内にふたりおニューのランドセル

寝屋川市 森 茜

どことなく観念してる枇杷の花

ほほえみをいつも浮かべてものがなし

あぶなげにマリリン・モンロー 蕾つけ

夫には美学 私は地を叩く

揺すられててんやわんやの目高の子

寝屋川市 江口 度

回復の兆しそろそろ無理を言う

今日のうそ夕焼雲に裁かれる

カグや姫見送ったらし竹の花

花好きの妻は蕾をすぐ見つけ

はがきより封書で届くもどき寒

寝屋川市 高田 博 泉

値下がりを待つて遠のくマイホーム

体重も増えてないのに出るお腹

丹精の花を娘が持つてゆき

たまに着る背広に男見直され

流れ星失恋らしい消えて去り

寝屋川市 堀江 光子

ジャム煮詰め四月一日ことも無し

四月馬鹿常より多い言葉かず

かつがれた背へふわりと春の風

名園の椿それぞれ名前持ち

恃むもの心につか気飾らず

寢屋川市 柴田 英壬子

怠惰かな読むのも書くこともいや

桜散る報道だけを聞いた春

自転車二度も倒れた春あらし

桜草が匂うころやさしくなる

わからない新語わかった顔のまま

寢屋川市 富山 ルイ子

子の事故のFAX混乱する頭

息子からの経過只ただ待つばかり

ドナーカード家族で話し合いを持つ

しまなみ海道 今治は指呼の間

瀬戸の海の自然に融和してる橋

寢屋川市 北岡 波留吉

福福しい嫁は我が家のマスコット

魅力ない妻だが俺の宝物

鳴き砂の音色に明日の夢がある

大きい夢持つ少年に覇気がある

気の弱い夫とゆるるかづら橋

寢屋川市 酒井 勇太朗

定年後妻からの指示鞭のよう

後家さんになって玉緒のはしゃぎよう

長鳴が好きでガルベス許してる

妻だけが残ってくれた縄電車

退職日 気力体力萎えてくる

寢屋川市 太田 とし子

早い春おそい春にもリフレッシュ

紫に衿とり替えて姑になる

おぼろ月 女すこしもうろくなる

故里の山菜料理ほろ苦い

花の野を観覧席にする仏

寢屋川市 坂上 高栄

高濃度ダイオキシンのうろたえる

屑金魚 我が大宇由金魚鉢

妻と言う字に遠ざかる二十五忌

握手ではない手を握る脈を診る

暗闇で目つぷりで見える母の顔

吹田市 古川 喜美子

予告編明治の雪の美しさ

背の子に髪なぶられておぼろ月

花吹雪黒髪のまま逝かんとす

落ち椿こんな処でこんな艶

スタートで水飲み過ぎた僕の負け

吹田市 山本 希久子

夕暮れの嵯峨野路あたり恋が待つ

春の中視線遊ばす蝶に似て

大笑いして忘れよう春の鬱

ノーヒント勧進帳も遺言状も

桜散る春の野菜のほろ苦し

一本もよし千本もよし桜

吹田市 瀬戸 まさよ

春爛漫花も私も生きている

つばめスイ光の風を運ぶ使者

あの世からもっと生きよと父母の声

知事さんの歯切れのよさが不安です

吹田市 野下之男

爽やかな話を探す世紀末

どないした隣の猫と家の犬

嫁はんと髪の色を競い合い

団子でもこれだけ売れる意外性

お散歩の好きな犬にも好敵手

枚方市 前 たもつ

大変だ小学生が荒れている

パーティーへ叙勲の恩師妻を連れ

大きな器いつもゆったり受け答え

戎橋 髪のアブジェを見ていたり

自然に還るつくづく思う土の彩

枚方市 海老池 洋

君が代日の丸 桜の花も駄目ですか

色鉛筆の色にもあった依怙蟲屑

パーティーも一会の縁と酌ぎ歩き

雑兵の歴史は地下に眠るのみ

百年河清 贈取賄の続くなり

梅開く一輪挿しが居丈高

木の芽吹くプラス思考が動き出す

一斉の新芽嫉妬も少し湧く

結婚は約束手形より怖い

ト書きには逝く日も書いてあるらしい

枚方市 二宮 山久

ほら春が来てるおいらにこない春

どの顔も疲れた顔の春うらら

美人とは言えぬが笑くばかわいい女

とっておきの一芸もつて末の席

妻の愚痴聞いて世間は良くなり

枚方市 森本 節子

向き変えて音を探している難聴

大崎の桜の下に兄がいる

お名前を名のってほしい野辺の花

優しい句読めばやさしい句が出来る

三横綱不在でも沸く大阪場所

枚方市 鈴木 政子

催促なしある時払いの夢を見る

地下街で迷うと浪費の癖が出る

奥醍醐ホーホケツキヨに励まされ

山寺の千二十四段登り切り

歓迎会背広汚して下戸の孫

交野市 山川 日出子

高槻市 川島 諷云児

夢の字が帽子について甲子園
卯の花見団子兄弟おどり出す

また秋ね桜の下の墓参り

仕舞風呂六十六の垢流す

ひとときを一休庵でひと休み

東大阪市 森下 愛 論

極楽も地獄も売り買いされてる世

満開の花の吐息が聞こえてる

歪んだ朝だ昨夜の酒の鬱

地酒酌む旅の出会いが始まるよ

顔みたら飲んでまっかと言われてる

東大阪市 指宿 千枝子

ポチポチポチ草も裸の木も芽吹く

毎日が同じだなんて言わないで

満開のリラの香りに窓を開け

仏さまとのんびりしてる春の午後

頬よせる御室桜と車椅子

守口市 結城 君子

花韭のハミング久しぶりの晴

街角を曲つてもブリムラの鉢つづく

檸檬忌にみめうるわしきレモン買う

切株に座ると世のウラよく見える

わたくしのストーリーカーは影法師

四面楚歌 私に座る椅子がない
笑うまい時代錯誤の父の辞書

道ならぬ恋に溺れてゆくスリル

安売りはすまい私の自尊心

忘れたい傷をつつきにくる他人

高槻市 井上 照子

砂時計察する心もてぬのか

人生の旅路山谷まだあるか

子の燥ぐ声も聞こえぬ春休み

娘の自立喜ぶ裏のすきま風

七回忌亡夫の声が耳にあり

高槻市 傍島 克治

言訳がまずく疑い深くする

木の芽時道草おぼゆ一年生

終電車昨日見た顔今日も見

いい人と言われその気になる私

立食いに早技みせるラッシュ時

茨木市 藤井 正雄

酒とろり八十八夜茶も美味い

放課後になると無口が嘘のよう

いざ本番鉛筆時計受験票

辞書にまだ載らぬ新語を父が聞く

花束をかばって乗ってくるラッシュ

茨木市 井上森生

苦も樂も夫婦茶碗のヒビ模様

本陣の客に吉良やら浅野の名(草津宿本陣)

桜咲く生涯学習キックオフ

セリツクシ 自然食派の花見時

赤ん坊の老母にあげるさじのかゆ

豊中市 安藤寿美子

呉越同舟 屑籠の候補者名

トランプの恋占いも忘れたり

鏡にはアマテラスさえだまされる

会いたくて小さな罌を用意する

遠ざかる島に合掌島遍路

豊中市 吉田あずき

春風に迷える帽子飛ばされる

木の芽和えふと振り返る女道

冷泉展 俊成 定家の筆の香よ

う雑炊京の老舗の味に酔う

人間の弱さへ揺れる軽い首

豊中市 井上直次

鉛筆を削れば木の香少年期

晩成へ辞書から拾うボキャブラリー

土に生き土の時計に知る季節

金婚式はめる言葉はみな妻に

貞女より悪女と話はずみ出す

豊中市 湯浅馬洗

花殻を摘んで祝おう古希の妻

停泊も出船の姿勢老いて真似

今日のこと明日に延ばせぬ老いの性

竹のたが締めてもゆるむ凡夫婦

嘘だとは言わずに妻は席外す

豊中市 滝北博史

太陽の塔背に夫婦梅うどん

ガザニアを贈ろう妻のバースデー

梅が来て椿も桃も美しい

玄関で面映ゆそうな君子ラン

海棠に西行きの旅想う宵

豊中市 松岡久留美

ドラの音に別れを惜しむ父と母

子育てに生涯かざるつよい母

川柳に生きた証を残したい

ライバルが上司の部屋へ消えたまま

胸のうち犬に話して楽になり

池田市 藤井計光

変化球妻は上手に打ち返す

さりげなくやさしく吐かす黙秘権

金一途ばける間がない欲の皮

髪染めて明日の逢瀬に翔ぶ女

宮仕えあきらめゲイツ幸之助

池田市 岡 本 吉太郎

のびやかに育てた割にちやっかりや
リストラに和の心にて社長さん

五十過ぎ後は懸河の三十年

懺悔する人ばかり見る大聖堂

うしろ髪ひかるる思いの港町

箕面市 岩 津 ようじ

信仰も学問も来る古都の寺

人生は不可解である 枝雀

モンタンに枯れ葉 雨情に枯れ芒

頑張れば出来ると思ふうちが花

ノムさんの威を借るトラとなりにけり

箕面市 出 口 セツ子

出会いからやり直したい花吹雪

記念日に風呂に薔薇でも入れようか

温めた言葉で春の朝が明け

阿呆なこと言うて紛らわせる悩み

留守を子に任せ夫婦でするデート

大阪府 米 澤 俣子

楚々とした風情さき草白が澄む

世の中を綺麗に見たい眼鏡拭く

指で問う答えだまって指でまる

ゴミ捨てる課長同士が出あう辻

値切ったらあつさりまけてくれました

大阪府 榎 山 隆 盛

峠越え上り下りにある茶店

化けて出るほどにいつべん妬かれたし

清め塩娑婆の背広にふりかける

初恋の愛のメモリーさくら色

コンテナ埠頭キリンの骨が並んでる

大阪府 八十田 洞 庵

雑兵の汗にべもなく見捨てられ

少年の心が読めぬ今朝の記事

いつも母さん辛い話でごめんよね

年下の男この頃重荷です

蔵の壺家宝と言うが偽らしい

奈良市 米 田 恭 昌

しごかれて地区代表の初舞台(甲子園 2句)

間一髪ホームベースを掃いた指

代表なんて柄ではないと嬉しそう

新世紀見る生命ドナーから貰う

こだまする指笛 山の鎮魂歌

奈良市 天 正 千 梢

寒風をやわらげて咲く椿かな

氷室社のしだれ桜に恋をして

鹿啼いて奈良の公園わびしかり

草書体腕が段々冴えてくる

泥どろの中で遊んで泥仏

生駒市 麻生 アート

うたおうよ碧空の碧果てるまで
生きてます米ひと粒を拾う如
とばしかった昔の味か梅のひとつ
地振券食うものばかり買うて来る
尾道は近くてとおい亡父の邦

大和高田市 岸本 豊平次

底冷えに肩をもぐらす老いの朝
お彼岸の雪にも桜たじろかず
春の道大の散歩の距離がのび
二上の夕映え今日のころ満つ
沖繩の旅語りへの涙聞く

大和郡山市 坊農 柳弘

ジューンブライド濡れて可憐な杜若
ふる里の母の温もり新茶着く
銀杏並木小雨に煙る御堂筋
和服着る娘やつぱり日本人
柿の葉の緑眩しい法隆寺

和歌山市 岩本 美智子

春の風心の友を攫われる
友の逝く道かくしてる春霞
春霞やさしく包む悲も哀も
春の雨花の雫に染まらんか
傷ついた翼休める春の海

和歌山市 牛尾 緑良

アッカンペー私もしたくなる世間
石投げた男の影が見当たらぬ
眉すこし上向きに引く雨上がり
プライドを振替用紙突いてくる
葱刻む心を刻む妻の鬱

和歌山市 福本 英子

還暦も古稀も過ぎてゐる紅の彩
消え入りたい日もあるだろう造花の朱
約束は無いけど花の天満橋
花筏難破しそうな風が吹く
一票の軽さ重さを見せしめに

和歌山市 堀端 三男

棄権などしたこと無いと言う米寿
誇らし氣に無党派ですと胸を張る
昔の女とばかり出会う投票所
朴訥な意見がいつち的を射る
春雷を聞きつつ友に書く便り

和歌山市 青枝 鉄治

積年の恨み晴らそう投票日
手を握るだけの演技でバツジ付け
政治屋のポッケは直ぐに綻びる
野次だけの議員地方で反り返り
悪いのは皆秘書だという構図

和歌山市 桜井千秀

エンジンがまだかかるから大丈夫

安売りに出そう妙案二つ三つ

良心に異議申し立てされている

陽が翳り猫のつそりとする背伸び

ルスロクはガチャンと切ろう花日和

和歌山市 山田高夫

向き合つて啜る番茶も枯れた味

時効まで鳴りをひそめて待つ男

散るさくら明日は我が身ということか

父という重荷を横へ置いて呑む

ポスターも衣替えする初夏の候

和歌山市 山根めぐみ

母の翼たとえ嵐に遭おうとも

甘酸っぱい光たたんで満ちる月

ふところの深さへもぐる火の雫

明日捨てた男のすごいエネルギー

喜んでくれば満ちる妻の海

和歌山市 堀畑靖子

基地依存からの脱出はかる町

平和訴えて発光する珊瑚

おてんばに返るワンパク王国で

ほかほかの幸やキイモを分けあつて

好奇心満々わたくしの泉

和歌山市 福井桂香

恋衣おんなは桜花の下に佇つ

回覧板 熊野古道へ誘われて

ジャムパンに入園式を告げて出る

欄外に小さなあくび書き込もう

勝鬨を上げる若葉が薫る街

和歌山市 楠見章子

オカリナへ切り絵の兎耳を立て

庖丁さげて魚屋愛想してくれる

多重人格けいたい電話三つ持ち

鬱憤を燃やすとダイオキシンの出る

電柱の影を見紛うもの思い

和歌山市 細川稚代

幸せの限界を知る鉢の花

明日開く蕾に呪文かけておく

新茶揉む亡母の手もとを真似てもむ

逆縁の遺影を抱いてゆく遍路

目と鼻の先で出会ったことがない

和歌山市 木本朱夏

さくらさくら哀しいことがないように

雨の夜のさくらと通じ合っている

捨つるもの多きを恥じぬさくらばな

神さまの不意のくしゃみに散るさくら

さくらはらはら死ねと言ひ生きよと言ふ

和歌山市 榎原公子

春寒に夫も妻もぎこちない
朝ざくら牛抱地藏と二人じめ
再婚の家でひそかな義理の音
陽春にわつと芽吹いたカレンダー
パンジーよ房事言うなら控え目に

和歌山市 垂井千寿子

メダカの先生澄んだ学校さがしてる
平凡な位置が好きです齢重ね
手を握るだけで味方だなあ選挙
父母の敷くレール一応ごててみる
エリートも関係の無いチャンコ鍋

和歌山市 山口三千子

子に頼まれUSAへ電子辞書
十七時間時差タイミンクまだ合わぬ
回れ右心のリサイクルをする
ふるさとも線路は消えて路線バス
子は巢立ち貯金と余生考える

和歌山市 木村初子

海光の乱反射して和歌の浦
花冷えに追討ちかけるビッグバン
老いてなお まったり人生そのまんま
ひとり来て来し方しのぶ旅の宿
新生児無限を秘めて大の字に

和歌山市 田中みね

今が旬この私も竹の子も
日々好日ひいばあちゃんの鼻眼鏡
影法師も揺れて迷路へ差し掛かる
順風満帆すこし驕りはないですか
濃い薄いの言うてべろりと平らげる

海南市 三宅保州

都合よいように解釈する味方
自慢する度に値打ちが下がります
肩の荷が重いお前も衣紋掛け
叱ってはいるが怒っていない母
ほんとうに役立ちますかアンケート

海南市 谷口義男

寝返りをするのも政治泳ぐコツ
死亡記事聞いた名前だ同窓だ
耳遠いはずの姑が知って居る
都合よい誤解は知らぬ顔をする
老いたとて黙って居れぬ損な性

和歌山県 中後清史

総ざらえせねばぼうふら涌いている
団栗を並べて基礎を打っている
木に竹を接いで杜屋の建て直し
平凡に飽きた頓馬の綱渡り
ほどほどで盃伏せる年の功

神戸市 山口 美穂

衝動買いを詫びつつ整理しています

赤や黄に色変えたがる青い鳥

ガーデニングのブームにちよつと乗っている

ホーホケキョお山はおそい春の花

こぼれ種の芽生えでうれし春の庭

神戸市 中村 ゆきを

なつかしい言葉のひとつにセッケン粉

選挙カー花見の席へ首を出し

リストラと知らず愛犬じゃれてくれ

春の川去年は去年みな流れ

鳥が来てきよろきよろ春を眺めとり

神戸市 池田 善守

女とは昔の辞書は役立たず

公園に声を残して子供去る

嘘言うと分ついても聞く女房

目覚しも俺と一緒に失業し

百貨店客もモデルのように立つ

芦屋市 黒田 能子

愚痴ひとつコップの底に沈ませる

スキップをしたくて軽い靴を履く

欠点も今日は長所に見えてくる

春も浮かれて秋も浮かれて旅ころ

オートロック関所のようにドアが開く

特急がはげしく桜散らしゆく

二三度は出来あい食べて妻の留守

ほどほどに聞こえて返事ほどほどに

どなたさまにも失礼します目のかすみ

この街から孫よ羽ばたけトロンボーンで

尼崎市 春城 武庫坊

春の茶房でゆつくりと読むスポーツ紙

妻と歩いて昔の雲をさがしてる

一年たつても売れない家が並ぶ街

育て易い赤い花選り植えてます

桜散る飛べない鳥が群れている

尼崎市 長浜 澄子

五月病ついコンビニへ足が向く

心情を手取るような声の艶

持ち味を素直に出せるコンマ以下

いいことの子感オムレツ裏返す

ミルフィーユちょっぴり誤算悔いている

尼崎市の 場 十四郎

這いはいの胸へ童話をふくらます

価千金育つ嬰兒の初笑い

笑わせてピエロ淋しい舞台うら

タレントの別れ話に凝るテレビ

今ここに立てる命の素晴らしさ

種袋ふればサラサラ夏の音

伊丹市 山崎君子

ツノ出して星になる日の金平糖

昼花火大漁船を待っている

すぐそこ言われて遠い知らぬ町

和菓子の名あじさいとあり仏の日

伊丹市 小熊江美

咲きたいと蕾待つてる春の風

砂時計さらさら落ちて恋もさめ

亡母さんに面影似てる竹人形

思ひ出す引上げて来たあの港

裏方に妻が居るから見得を切る

西宮市 山本義子

四月馬鹿だれも騙しに来なかった

銭湯も市場も消えて街新た

街の蛙生まれ故郷が無いと言い

ゴミ置場カラスが睨む親だろう

女です米研ぎ小火を消している

西宮市 門谷たず子

サクラサク家族旅行の時刻表

高原にいつまた会える花を愛で

歳時記のページが瘦せてゆく老いよ

守らねばならぬ人あり踏むペダル

昏れ近し川の深さを足さぐり

花びらは大事なひとを乗せてゆく(義妹の死)

きざはしの数だけ揺らぐ寺の鐘

花びらの舞いくる中で選挙戦

正当化したいコーヒーでは駄目か

銘酒には違いないけどかしこまり

西宮市 奥田みつ子

いい夢をえがく必ず夢叶う

親子でも娘は娘 母は母

あるがままあるがままにと竹は伸び

花の雨花の命をしたたらす

三回忌写真しずかに笑うのみ

西宮市 亀岡哲子

梯子車のどんどん延びて風ありき

コントラバスの響きで心ゆるする波

蒔草も子等も育っている大気

花見の宴ラジオ沖縄優勝す

ひと事のすんで一人の花吹雪

西宮市 牧刈富喜子

ひたすらに風に向かってペダル踏む

もの知らぬ事の多さが生きる糧

よく当る天気予報がつまらない

雷鳴を押しつけて来る選挙カー

西寄りの風がコソボの音で吹く

西宮市 緒方 美津子

子の赴任急に地球儀ほしくなり
子も巢立ち姑も元気で翔ぶわたし
徒花と思い込まずに咲いとくれ
CMのようにはいかぬ洗い髪
幕引きの話も今は声高で

西宮市 秋元 てる

スニーカー急ぎ立てられて緑の野
木のベンチ隣に座る人は誰
忘れてる熊手砂場に桜散る
雪を少し残し迎える故郷の山
私の今知ったの保険断られ

西宮市 菊池 トミエ

御無沙汰を謝ってくる花手桶
竹の子がすすく育つ嵯峨野道
其処ここに匂う釘煮で春を知る
雪かぶり蘭の花芽が育ってる
実印を作り就職祝とし

西宮市 井上 松煙

我が余生色鉛筆の淡さなり
4Bで描いた自画像祈る顔
パーティーの上座は料理余ってる
亡母の和歌額に入れたが読めぬ文字
許すのが上手になった日暮れ時

西宮市 長谷川 淳

餞別を貰いライバル意識消え
啐啄の音も聞かれず雛解る
名を言わず珍客ですと妻は告げ
損をした気になる空いた指定席
封切ればそこはかとなく母匂う

宝塚市 嵯峨根 保子

思い出の父の声には色がない
若先生おくすりだけにして帰る
晩学に社会科だけは良く出来る
師の言葉おち穂ひろってついて行く
元気な声と言われたけれど病んでいる

宝塚市 黒台 伊佐武

近頃の三下り半は女から
理屈より直感力で勝負する
味の無い正確さより下手で良い
不真面目が寄り集まって真面目顔
はみ出したおもしろい奴が牽引車

加古川市 吐田 公一

花見頃今年も逃がす社のピンチ
マンションに長屋暮らしの近代化
検事長女は恐いものと知り
流行に遅れ今頃カゼをひき
次世紀の夢詰まってるランドセル

相生市 中塚礎石

四コーナー遠心力が振り回す
病院の前で別れてからダンス
親離れした車椅子風を切る
策のない男一票たのまれる
鉄塔の気骨へまとも北の風

姫路市 古川奮水

くぎ煮など配って留守も告げる旅
野鳥園とりも子供の顔選ぶ
雑魚とりの話童になつてゐる
熱血を甦させる話でる
鏡見て風呂の湯加減褒めておく

鳥取市 近藤佳子

たてがみを付けて男を売りに出す
負けるなと黄色たんぼば燃えている
追伸に逢いたいと書く字が震え
喜びにいつ出逢ったか指を折る
美しく老いるにやはり金がいる

鳥取市 武田帆雀

戒名に朱を入れてから意気盛ん
あつちにもこつちにも向く器量よし
完走が目的だからいい景色
生卵握ったままの愛でした
言うことをコロコロ変えて毬をつく

鳥取市 両川洋々

六尺の男を呑んだ骨壺よ
南無諸仏亡父を浄土へ連れて行け
火葬場もラッシュやあやあコンニチハ
道案内ないが浄土で迷うなよ
初七日よ今どの辺に行く旅か

鳥取市 岸本宏章

合格へうれしい悩みひとつ増え
妻や子はいないだらうなホームレス
にんげんの価値制服で決めたがる
勇気あるもぐらが先に叩かれる
真ん中の団子が串を抜けたがる

鳥取市 岸本孝子

人の道はずさぬ心子に植える
春一番三年日記くつてみる
しなやかにいろんな風と遊ぶ竹
権力を持つと公私が狂いだす
長男にしっかり者の嫁もらう

鳥取市 春木圭一郎

どう生きる分らないから生きてやる
花冷えに人の真実見えてくる
弱点を武器に図太く生きている
ぬるま湯の句や人生は真つ平だ
ずたずたになるまで生きるただ生きる

鳥取市 植田 一京

友人がふえて晩学忙しい
独りになった女いきいき弾みだす

句読点打って呼吸を整える

駆け抜ける月日わたしを置き去りに
もう遙か昔になった始発駅

鳥取市 西村 黙光

いつだって酒は師であり友であり

病院の近所で酒を売っている

何もかも喋ってしまう花の下

歳ですれ前後不覚になっちゃまい

ペン執ると胸のマグマが暴れ出す

鳥取市 福田 登美

どんな風吹いても好きな道に行く

背伸びして若い空気を吸っている

ありのまま映る鏡の罪深さ

子が見てる背が淋しい定年後

もっと良い暮らしを毬は知っている

鳥取市 上田 宣子

重箱の隅にあなたの綿ぼこり

おねだりの時の仔猫がメツチャ好き

公平に暮らせる換気扇回す

下り坂チャランポランと歩くなり

好きな事してたら朝が来てくれる

鳥取市 石上 悦子

病院はカボチャ畑を取り違え

バスツアーホストクラブへ行くという

通勤路ようやくしつぽ振った犬

得意先ごとに名前が違う猫

母親になれた記念日娘のバースデー

鳥取市 富山 檳榔樹

美しい別れにしたい花見宴

凡人の良き自然の道を麗らかに

花吹雪古木の精が意地誇る

勝ち抜くぞ春雷怒声激飛ばす

両輪のリズム噛み合う夫婦道

鳥取市 杉本 孝男

順風に乗るスピードが怖くなる

勝つリズム覚えてからは汗かかぬ

他人さま結果でものを言うばかり

敬老の文字始めての膳につく

先生が書くと立派な筆になり

鳥取市 坂田 和歌子

細い首哀しいまでの蟻の列

先生がペンペン草の頭して

嘘ばかり本音は言わぬ祭り客

ひらひらと桜の花のお葬式

花見かなハイハイハイ駐車違反

火消壺意外に色気衰えぬ

鳥取市 岩原喬水

機械では出来ぬ卵が安過ぎる

眉毛にも白髪鏡は嘘言わぬ

始めから男の嘘を知る女

煩惱がまだ老骨に恋をさせ

倉吉市 米田幸子

一合の酒で酔うほど柔じやない

師の恩を仇で返した子のいじめ

火の車だけど我が家の舵握る

人相は悪いが心暖かい

いり豆に花の咲く世が恐ろしい

倉吉市 野口節子

古里にゆうゆう泳ぐ川がない

故里に目高のいない寒い川

暴騰の株で寝込んだおじいさん

感謝する形で咲いた座禅草

新緑に負けぬ若さがまぶしすぎ

倉吉市 山中康子

我を張って少し淋しいすきま風

たらの芽が凄いい脚光浴びている

身体ごとぶつかっている教え下手

春嵐おおう植木に手がやける

穏やかな桜でいたい散るまでは

釈迦の掌に罪を預けて花祭り

故郷の祭りしばしば夢に出る

訣れると決めて最期の花見する

お花見へ弁当の数もめている

いつの頃清き一票死語になり

米子市 鷺見正子

長生きの税私が老いた頃来そう

一票をやるとお役に立つと言う

嵯峨野にもデイスコが欲しいかぐや姫

砂風呂が恐い大人になりました

喜びを母に伝えて倍にする

米子市 白根ふみ

花ぐもり神の気まぐれかも知れぬ

さくらの下で悪人が見つからぬ

山ざくらに土筆も露の臺も負けぬ

葉ざくらになってわたしの影がみえ

葉わさびのみどりに匂が深くなる

米子市 木村春枝

身を守る何物もない丸木橋

まなうらに住みついている亡弟よ

恐い話やたら口にし淑女とか

人間に合格点は無いと知る

はいチーズ孫のカメラに皺のばす

咲くほどに悲しみ深いアンネ バラ 中井 ゆき

母のまゆくもった訳は知らぬまま
ヒラヒラと蝶々が胸に舞った日も
思案して半分残すティーシュガー
おんぶした子の暖かさまだ消えぬ

米子市 野坂 なみ

笙ひちりきの音色にこもる竹の精
港出てから停泊しない船と知る

役終えず走っていた競走馬
葉桜の手入れに老父は忙しい

ありがたく受けた善意のあとのつけ

米子市 林 瑞 枝

羅針盤男のロマン知っている

ハローページの海を泳いだ子亀たち

自転車に大空があり海がある

カタログは詩人で夢の絵で招く

ピアノ弾く丹頂鶴の舞うかたち

米子市 茂理 高代

せせらぎと語る思いの丈のせて

笹舟を流した川で舟を折る

何処からかあなたの声が聞ける丘

悲しみを重ね人の心知る

悲しみに押し流されず燦と咲く

四季咲きの几帳面には脱帽だ

活力剤になる時たまの都

若者たちを吸いこんでゆく都の灯

愛し子を盗まれたなゝ都市砂漠

帰っておいで懐あけて待つ港

米子市 本吉 宗光

まだ女性恋う唄選ぶ吾れは喜寿

東海林太郎 声の調子が今日は良い

天上がり厚生省も伏魔殿

ユーゴーにデモクラシーはしみ込まず

地方選より良い郷土票入れる

米子市 木村 富美子

風紋は砂の暗号だと思ふ

目をとじる砂丘は昔のままがいい

礫にも成れよと砂を握りしめ

大空を初めて知った竹とんぼ

竹の皮母は草履に編んでくれ

米子市 石垣 花子

笑い声いつも洩れてるいい家族

空気のように家族がそばに居てくれる

競争で家族の箸がはずむ鍋

グラスあけ子を縛る紐ゆるませる

カットグラス三猿主義を通し抜く

米子市 青戸田鶴

ほんやりと桜の花の中にいる

減量が出来ぬ言い訳ばかりする

あと先をとんで離れぬ姉の蝶

ズボンから砂ばかり出た少年期

まひるまは眠そうになる月見草

米子市 永井三津子

記念日を忘れた日から溝が出来

男心の方程式がまだ解けぬ

リストラの地雷に怯え日を捲る

フラッシュバック挫折の中に立つ私

春うらら死ぬまで紅は放さない

鳥取県 新家完司

水仙は春が来たよと歌う役

どの花も豆電球を抱いている

にんげんの群れ立ち去ってゴミの山

医者たちは多忙ゆっくり診てくれぬ

何の虫かと思っていたらジンマシン

鳥取県 近藤春恵

病床に峠を越した朝光る

金婚の喜び深い皺に秘め

親の見栄すぎて子供がぐれはじめ

参観日どの子を見ても賢そう

再会の思い出尽きぬ茶をすすり

鳥取県 土橋 螢

永遠に戻ってこない今日の朝

戦いの歴史を鎮めさくら散る

連休の遊び疲れという休み

少子化の歯止めに私立幼稚園

爺婆の学級懇談会へ出る

鳥取県 土橋 睦子

煩惱に三面鏡がくもりだす

紅を刷き姑を見送る草いきれ

片腕と信じた的が狂いだす

少年の地図に桜の木を植える

恋ひとつふくらみを増す嫉妬心

鳥取県 土橋 はるお

人相はマンガみたいな方がいい

恋人が時々怖いことを言う

私に分相応の古本屋

孫の予算は年金で補正する

銭のある顔は仲々むずかしい

鳥取県 岩崎 みさ江

冬眠のわたしを起す春いちばん

負け犬にもきつとあるだろ自尊心

紙ぶくろ子供も犬も耳を立て

やきもち焦がさぬようにふつくらと

路の臺ああ人生のほろ苦さ

鳥取県 西原 艶子

傾いた家に欠けてく屋根の艶

鈴つけたように携帯電話鳴る

車座のまん中にいて姑ゲスト

酒好きに嫁いでからの修羅の道

どこにいても私の部屋へ向く舐

合格でこんどは金の苦勞する

ほめられた花から順に散ってゆく

正面を福沢諭吉なせ見ない

日の丸を出せば昭和の風が哭く

振興券ぐらいで財布ゆるめな

鳥取県 津村 八重子

衣食住足ってあれこれ欲が出る

香水に今日と言う日の幸を知る

親友はいいな裸のおつき合い

生き抜いた八十年の思い出よ

短命だった兄の三人分生きて

鳥取県 吉田 孔美子

ほろ苦さい塩梅のみそですな

遊漁船囲んだ春はにぎやかだ

最愛かつ好ライバルのいい夫婦

いい夢が見たい布団をまつ新に

六十歳若い動脈抱きしめる

鳥取県 権代 康女

人ごとでないと難民おもしろ

太陽をあびる農夫のいさまし

なんぎやと言って自慢をしてみ

人なつきよくて雀がよく喋る

鳥取県 羽津川 公乃

当選をしたらもったいつけてくる

母の日にまた増えました外出着

幸せを絵にしたようなガーデン

嫁方の祖母に叶わぬ身のこなし

喪の家に照明だけが明る過ぎ

鳥取県 石尾 かつ乃

髪と爪切ってストレス追い払う

前向きにみんな生きてる向かい風

表札も年輪がある六代目

合格のよろこび空の青さ知る

誰の手も借りずパズルを解く余生

鳥取県 奥谷 彩子

一日が終る家計簿枕もと

にぎりめしうれしい春を摘んで来る

肩書きを外して軽い万歩計

腹八分いい話だけ呟しゃくして

以心伝心老いをいたわるフルムーン

鳥取県 山 本 正 光

軽率な約束ばかり僕の癖
泥の手に握手求める知事候補
深い訳なくて三度の飯を食う
要領は悪いが何時も忙しい
食べ放題酒など呑んでいられるか

鳥取県 谷 口 次 男

いい話聞けば心も小春日に
約束を忘れなんだかホツとする
飽食を細魚が笑う哀れんで
出陣の光秀の目が光り出す
ボス同士花見の席でヒソヒソと

鳥取県 橋 本 多 哥 由

人間をやめてうららか昼寝する
明日という未知の世界は楽しみだ
良心が錆びて芯までずるくなる
生涯をきれいに咲いた桜なり
無人駅おりて喜ぶ花がある

鳥取県 太 田 幸 枝

重心が下でなかなか転ばない
天も地も人間の手で汚してる
食べて寝て喋って寡婦の花ざかり
天と地に恥じない顔を磨いてる
罪の無い寝顔にソツとほほずりを

鳥取県 乾 隆 風

わけもなく止まり木が呼ぶ雨の音
長生きをしてねときれいごとを言う
終い湯のほうが長生きするそうな
貧と富が代わりばんこになるまいか
塔立てる捨て石忘れないように

鳥取県 乾 喜 与 志

草取りをした水仙の花まわり
わらじ履く百姓道は過去のこと
温泉に浸り好々爺のはなし
懐かしや今朝は太陽顔見せた
満開の桜をコタツ褒めている

鳥取県 林 露 杖

鴛喰いの桜雪洞だけが揺れ
ご祝儀も受付けてます樽神輿
鍬使い腰脚老いのバロメーター
身心の自信みな失せ春早
地方選連呼も噎れて花の雨

鳥取県 垆 寛 子

刻とまり花びら一つ赤く塗る (インドネシアにて 五旬)
日本語でハイビスカスを所望する
スケッチの老婆を囲む黒い群
無心とは筆と一つになるしじま
只ただ写生遊び心はまだ無縁

鳥取県 田村 きみ子

うかうかと笑って居れぬさあ田植え
ため息は聞こえるようにして柴に

負けてなど居れぬと思うのは心

何の罪だろうか不眠症の性

エブロンはやはり離せぬ欲でしよか

鳥取県 幸家 單車

神通力を信じ勝負に賭けて見る

それ以上言うなサーピス過剰です

決断は神に祈ってから決める

品種改良挿木重ねて試作する

難題は明日に回してリラックス

松江市 舟木 与根一

四月馬鹿本音も入れて憂さ晴らす

アイドルは売るほど芸がないらしい

支払いに追われ必死にペダル踏む

大正には孫の二十が頼りない

勲章も風化が進み半世紀

松江市 川本 畔

春なのに地球多くの人泣かす

呼び止められて思い出せないおぼろ月

群がった鳩手のやさしさを知っている

天の声無視し時々小悪魔に

欲深い声が袋の中でする

松江市 浦辺 静江

いの一番カレンダーめくるランドセル

痩せ型は待ち遠しかった春日和

若者と別居で家勢衰える

腰痛が遊び心をおこさせる

晩酌は温めの燗がいいらしい

松江市 佐野木 みえ

娘の新居ダックスフントと初対面

東名道まっしぐら浜名湖の宿

鎌倉の大仏様も雨に冷え

江ノ電に乗れば優しい風に逢う

命日に銀杏御飯差し上げる

松江市 安食 友子

マンネリを論してくれるブリーカー

今もって罷り通るか袖の下

負け惜しみボスは葉巻をくわえてる

一途だな葉漬けの五臓六腑

手を引くと払い除けられた米寿

出雲市 吉岡 きみえ

どの部屋に座っても影一人きり

花冷えの街をすたすた背を曲げて

葉ざくらの下で来ぬ人待っている

海の向こうに安らぐ場所がきつとある

いい出会いあつてはみ出す日記帳

祝川柳塔七十五周年

出雲市 園山 多賀子

覚めやらぬ夫に一筆早朝^{あき}を出る
春うらら七十五層の塔が映え
感激の握手やつぱり温い掌だ
満席に両手に雄花^{ゆうな}と言う果報
やくも号「師弟」の句集読み耽る

出雲市 福田 蘭水

花吹雪老兵しきりうなずいて
日に一度太陽おがみ出るゆとり
母の忌に忘れず今年も桜咲く
ペイオフきつい言葉で生きたせる
老いの道狂いはないか確かめる

出雲市 岸 桂子

整形をした古里は他人めく
おはようのただそれだけの持つ温み
打ち明けた友の丸みにまるくなる
生きたまが自分の顔を彫り上げる
母見舞うこぶしの花も五度目咲く

出雲市 久谷 まこと

あくせくとノルマ果たせぬ陽がしずむ
散歩道次つぎ花が咲ききそい
園庭に誰も乗らない縄電車
おもちゃからお菓子日本語どこいった
味噌汁の湯気の向こうに待つ禍福

出雲市 小玉 満江

カタカナの花の名前をまた忘れ
嫁さんに知恵を授かるお人好し
かげろうの中を竿売り遠ざかる
葱坊主おばばは帰らぬ旅に逝き
さくら咲き一目散に春が来る

出雲市 小白金 房子

紙雛もやさしく並ぶ春の段
入学を祝う実家のランドセル
言い分けはよそう心に春を盛る
竿売りの声が過ぎ行く花の街
牛糞も掴んで農婦土づくり

出雲市 石倉 芙佐子

一片のガラスの欠片にされた妻
ケセラセラ残り少ない予定表
王様にお后様は幾人目
ハメハメハ南の国は踊り好き
透明なグラスに注ぐ赤い酒

出雲市 板垣 夢酔

がぶがぶと飲める日本のうまい水
なにもかも綺麗に波は過去を消す
種まいて水に咲けよと口説かせる
花と蝶甘いキッスも春のどか
灰皿を嫌う畳の焦げの跡

島根県 堀江正朗

見えた日とやっぱり違う雨の音

上見ても下見ても我 闇の中

どこからが余生分らぬ戦盲記

働かぬ目が疲れたというも歳

食べて寝る闇一筋に道があり

島根県 堀江芳子

師を囲みみんな嬉しい花の宴 (紫香先生二一行様)

春うたうラララ歌う穴障子

花吹雪 化身の如く立ち尽くす

犬の散歩よりむずかしい正朗さん

雪月花いのち生命のありがたさ

島根県 伊藤寿美

かたつむりそれから潜る寺の門

これも聞法エレキで聞いた恩徳讃

定退の夫が背から老けていく

追伸に書いては消した跡がある

バアチャマと今夜は寝るとアンパンマン

島根県 松本文子

ひとりになる時を数える群れながら

流された日も大空を見ていよう

尊厳死 波のように風のように

出発の時は茶碗と皿二つ

商店街のさくらの花はまだ散らず

島根県 西村早苗

煮くずれた芋大好きとはお上手

良き友よわらび話もひっさげて

男同士の話に似合う酒もある

戦陣訓忘れはできぬ黒い雨

さんしょ手にかおりがしみてやつと夏

島根県 小砂白汀

雨しとど汚れた地球洗う如

病葉の下から青い芽がのぞき

炬燵から娘二人が追いたてる

片足が折れたバツタで寝ています

しがみつきゃつと牟寿に手がとどき

島根県 榎原秀子

復員のその日を憶う桜咲く

そぞろ歩き立話もして花の道

道の駅出会ったひとを思う駅

奥出雲小さい駅の客一人

ホトトギス子と呼ぶ声がよく響く

島根県 森茂美

草餅を搗く老妻に春が笑む

キャベツ玉重そうなのを買ってくる

人間に戻って午後のお茶にする

日朝のはぎまでゆれる波の音

年寄りも黙っちゃおれぬ桜咲く

倉敷市 田 辺 灸 六

蘇生していのちの重さ噛みしめる
試された余命絆の縄梯子

生き延びて笑顔をくれる人恋し

さしあたり生きた証の花見酒

がっぷりと組んで持病と四つ角力

倉敷市 小 野 克 枝

嬉しくてはしゃいで割れる皿もある
逆算をしながら墓地の値をはじく

「イエス」「ノー」丸い背なには逆らえぬ

惜しまれているとも知らず散りいそぎ

孫の守りさせて貰える有難う

倉敷市 井 上 富 子

画仙紙の鯉がぼちやりとはねている

無骨だが胆の座っている器

咲くまでのプロセスが良し花いじり

給料の差は節約でカバーする

小柄だが心の窓の広い人

岡山県 富 坂 志 重

研ぎ水がすんで私を取り戻す

立春を聞けば大地の雑音高くなる

いい話聞いた耳元温かい

思慕一つ橋の向こうで揺れている

子供の頃の神様は今どこに

岡山県 矢 内 寿 恵 子

昭和元禄ツケが回ってきた不況
郷愁の一本杉が灯をともし

賞味期限知るや知らずやさくらんば

SLの煙と父母も遠くなる

公約は砂の器に盛ってある

岡山県 大 石 あすなろ

ひらめきが欲しく鉛筆ばかり研ぐ

次世紀を担うやんちゃが目覚ます

安物の靴になじんで翔んでいる

お彼岸に先祖と語るさくら餅

生涯現役気楽に行こう肩はらず

岡山県 山 本 玉 恵

地下足袋で通した父のいかり肩

うなずいて静かに母のはなしなど

真実を求めて今日も草の道

沈黙の中素通りの風の音

想いひとつ小さくたたみ村を出る

岡山県 福 原 辰 江

母さんの涙声から逃げられず

桁外れ叱る親父も桁外れ

割算の上手な母へ子が並び

残り火が奇遇のチャンス見逃がさず

合格の知らせへ弾む毬を抱く

岡山県 福原悦子

我がまな手に光っているナイフ
飾らない私はわたしなりの彩
曲り角いくつ越えれば終の駅
先回り妻の気配り忘れない
胎動へ今母となる底力

岡山県 二宗吟平

我が部屋は我が図書館で飽きもせず
三十年のキャリア老大精勤賞
修了の名簿学長読むばかり
ゴミ作るため生きているゴミ出し日
歳のこと忘れキツパリ跳ね起きる

岡山県 江口有一朗

八十二未だ慌ててる見苦しさ
山菜蓂の木とはこれかと散歩道
麦の穂にまた挨拶をする季節
もの並べて春を奏でる音を聞く
満開の命が春の陽に映える

広島市 森田文

鑑賞の仕方いろいろ胡蝶蘭
約束は麦の穂が出て釣りのこと
お中日電話の声も風邪らしい
不都合もあらうにじわり別姓論
始めて聞くように返事をして暮れる

竹原市 小島蘭幸

妻も私もふつくら歳を取りすぎた
僕をほめているのはきつと亡父だろう
定年はまだかと趣味の友が言う
橋を見上げて宇宙を語る島の少年
松坂君を本気にさせてくれたプロ

竹原市 岩本笑子

休憩もいいねツクシが二三本
文庫本外は桜も咲くらしく
確実に巣立つ娘なりし路のとう
一人読むスリラーあれば風の音
太陽を追いかけて行く飛行雲

竹原市 時広一路

風温しいつも往復切符買う
鯉に餌隠していても感づかれ
リストラの記事よ年金有難い
雲一つ僕の真上で呼んでいる
笑わねば鏡の機嫌悪くなる

竹原市 森井菁居

アイデアをつなぐと僕の主義になる
電気自動車に日本の明日を任せよう
哲学を持たない桃が咲き競い
春だからうっかり世辞を真に受ける
気が抜けたビールのごとく生きている

竹原市 古谷節夫

あれそれで今朝も家族にからかわれ
野に咲いたすみれと目線びたり合い
本音聞く居酒屋が好きひとが好き
夕焼けにさそわれ花の種をまく
四捨五入されどプライド捨てぬ一

竹原市 石原淑子

再会を喜び合って花筏

春や春刻々変わる山の彩

お茶の間で南極探険しています

古本のにおいに染まる小半日

祈る身に時計が止まる手術室

下関市 石川侃流洞

夜店から金魚一匹春迎え

川の流れのように死んだらなと思う

大根の葉っぱ一皿母の腕

母百寿父はテレビを知らず逝き

枯野にもきつと青い鳥が棲む

美祢市 安平次弘道

月下美人がひらく演技でなく開く

恋だなんて花屋の世辞が憎らしい

相槌を打たねば妻が承知せず

風船が割れると疑問符が解ける

斬られ役がうまくて少し楽になる

柳井市 弘津柳慶

サラ金で競艇場へ入りびたり
地球の終点に核が誘い込み
浦島を帰して姫のヒスが出る
原爆の街青々とよみがえり
酔いが回って本当の心さらけ出し

宇部市 平田実男

鷹よりも鳶の子にある郷土愛

漬物がいちばん贅沢かも知れぬ

千羽鶴もう翔べそうな彩でなし

イエスにもノーにもとれるご尤も

昭和一桁へバナナが安過ぎる

香川県 池内かおり

若いのが良いとは腹に据えかねる

道頓堀でホームレスの目に負けました

身の丈に合わし水掛け地蔵さん

苔の青これも執念やも知れぬ

立ち泳ぎ止めると溺れそうになる

香川県 工藤吟笑

老鳶はもう鳴きもせず飛びもせず

極楽を目指して今日も寺詣り

龍の首どころか鶏の尾で老いる

ユメ幾つ追えども奥は遠い道

殿さまは奥の一間で居て御座る

香川県 成重放任

松山市 丹下美津子

おとぼけの心の奥が読み取れず
人はみな生まれながらの仏です
憶測で吐いた一言罪つくり
親と子の意見を分ける振興券
霧雨をぬうて群がる桜狩り

香川県 山地マツエ

二十一世紀へ希望をつなぐ孫が出来
争った後も夫婦の顔で寝る
妻と児を持って男の顔になる
プライドを曲げて金魚の糞になる
切れそうな絆へ選挙言うて来る

香川県 神保坊太郎

別れともなき顔のせて流し雛
春愁に笑い袋を買って来る
怖いのは神様の組む予定表
覆面の一人は身内かも知れぬ
雛壇の夢を見ている古代びな

松山市 宮尾みのり

母親の達者を家族疑わず
子が羽を休める母の遊水地
定位置が仲良くずれて来て夫婦
雑念が今朝の化粧の邪魔をする
ガーデニングしてます苗は買ってます

目覚ましと電話コールで初出社
散策の雨もまたよし天龍寺
ずばずばと指摘ストレス溜めぬ性
年金の少しのゆとり狙う孫
父の墓前分け合って飲む缶ビール

今治市 越智一水

夢のまた夢の話の橋渡る(しまなみ海道開通 5句)
花嫁が来たぞ島にも橋がつき
永らえて妻と渡るも海の道
明け暮れの橋をたたえて島に住み
水軍のロマンを秘めて渦がまい

今治市 野村京子

喪の帯の長さの縁と知る夫婦
春の恋嘘で丸めてそれつきり
煮え湯のむ百合の白さにだまされて
裏切って確かに出てる副作用
過保護すぎやせたカラスにしてしまふ

今治市 矢野佳雲

身の上を聞くと向こうも職がない
不自由の中の自由で生きている
父さんは頼りないねと母がいう
背広着てゆくとどなたもモーニング
黄砂とは知らずほめてた春霞

高知県 赤川菊野

草原に黒一点となる私

昨日より川幅少し広げよう

鎮痛剤それより母の一言が

毒舌を聞いて孤独な人と知り

ひとりでも生活の匂いふくよかに

北九州市 梅田宣司

だしぬけに雪三月を拗ねにけり

会心の一打ドームの風を切る

膝を打つ話にあった落し穴

まだ何が起きても不思議ない世相

正論をはけば梯子を外される

唐津市 樋口輝夫

初孫は俺に似るととゆずらない

愚妻かも知れぬが美味い汁を炊く

口実を反芻している午前様

バスツアー隣の婆さんよくしゃべる

交番の写真亭主によく似とる

唐津市 山門幸夫

有難や朝餉の美味い老妻と居る

砂だんごひたひたと食べて満つ

春雷や遠い悪夢に疼きけり

敗戦を終戦と詠み墓洗う

碇巻くゆつくり街の灯が回る

唐津市 山門タミ

背伸びしてお手々つないで孫と旅

席ゆずる外人どうぞ まあサンキュー

終章をバラ色旅で飾り度い

眼裏に熱い思い出旅日記

文化財竹屋の顔で出る鰻

唐津市 井上勝視

目出度さが目減りしてゆく誕生日

すぐムキになって淋しい人なんだ

同心円のはずと思っていた亭主

宗旨変えとても無理ですカタツムリ

土壇場も妻のザイルを信じてる

唐津市 久保正剣

同棲も不倫も文化だつちゅうの

駆け落ちの約束がある無人駅

じゅげむじゅげむ果てるともなき不義汚職

春爛漫光陰遅々として不況

窓際の椅子で過労死免れる

唐津市 田口虹汀

雛が済み鯉がすぐ来る姥と尉

宣誓が春を呼び込む甲子園

素通りで御免候え吉野ヶ里

檀那寺の枝垂れは身延生まれなり

東大寺の瓦一枚壱阡円

唐津市 山口高明

継承の子息が欲しい御皇室
亡骸に縋つて見せた世間体
取り巻きに担ぎ出される政治好き
我が家の鷹派はメンタばかりなの
蛸壺に隠れて蛸はひと安堵

唐津市 市丸晴翠

万歩計と孫が付いてる爺の腰
まったりと生きて卒寿を越えた母
死語にしたもつたいないが築くゴミ
楽しんだあとをローンが追いかける
割烹着脱いで漸く妻の顔

熊本県 高野宵草

まっさきに孫がこんにちはと茶の間
濡れおちば以下同文の日記帳
威張ろうとするから矛盾粗大ゴミ
ヤケ食いが出来た若さをなつかしむ
凡夫吾 古稀に至りてまだ迷い

熊本県 岩切康子

医師離れりハビリ決意マイペース
幸運に気付いてそつと手を合わせ
口止めを守れば一つ穴が空き
解禁へ魚はきつと注意する
会に慣れ言うべき事をわきまえる

砂川市 大橋政良

花ぐもり不倫の噂耳にする
春風の誘いかくちびるが乾く
手のひらの月のしずくを見ています
バス停で知らない人が会釈する

弘前市 中山雅城

六根清浄 岩木御山を讃歌する
六月の花嫁で金婚祝う
六歳で親の批判をしゃべってる
六畳の間借の頃が懐かしい

弘前市 相馬銀波

切口はみごと空論だとしても
陽炎の中に休耕地がめだち
薄味に不満が募る初夏の蟻
補聴器に不満がたまる母の耳

弘前市 今愁女

均等法 男うかうかしておれず
母さんより父さんに付く子が育ち
病んで気付く子なき悔やみと寂しさと
春愁にひこばえ眺め癒される

八戸市 島田昭治

風下に居れば亡妻の匂いするようで
逝くときは思い出詰めた袋持つ
いつ見ても素晴らしいドラマの甲子園
悪いくせ死んだ人にも片想い

大阪市 稲本 凡子

引出しの未決の方が溢れだす
風邪ひきで入院すると思てなし
雑談になると補聴器大にする
つばみから育て見頃で差し上げる

大阪市 川久保 睦子

句読点まだ付けられぬ余熱あり
お化けより恐い女の裏の顔
霜枯れのアロエに似た影つれ歩く
よもぎ餅姑の顔に見えてくる

大阪市 清水 利武

紫陽花が輝いている雨上がり
川柳も可愛がつてよ通り抜け
学歴を看板にして落選し
ノックさん二期目は腕の見せどころ

大阪市 寺井 東雲

何処で見るゴミを捨てればカラス来る
チヨコレート恥ずかしながら渡してる
耳つけて大樹の話聞いている
身ごもった日から女は強くなる

大阪市 松尾 柳右子

富士登山また登りたい街の蟻
宇宙飛行また行きましょ天女さん
子が四人息子も髪が薄くなり
タイガースファンで無いが気にかかる

北狐浪速の客をお出迎え

大阪市 岡本 久峰

よくもまあ人人の通り抜け
うかうかとよそ見愛妻見失う
傘寿なお書生氣分の抜けぬまま

堺市 宮本 かりん

春雷に追いつてられてきた花見
深呼吸ふと遠のいてゆく悩み
聞き役が上手な母の遠い耳
もくろみがあるのか妻が逆らわぬ

堺市 近藤 豊子

ショートヘアロングヘアへ春の風
巣立つ子の髪はゆたかな森のよう
うっとりわが娘の髪をみています
くすの木のわっははははと風に鳴る

泉佐野市 山本 蛙城

風邪感謝ネジを緩めて横になる
舞い降りた都庁で鷹の羽繕い
フルーツポンチあーらあんだの若いこと
保健食チラシにまだかこれでもか

藤井寺市 楠 昭子

お金では買えぬ安らぎ寺めぐり
はめられよう思う時にははめられず
カルタほどの診察券で生きている
良い話くぎりに熱いお茶が出る

寝屋川市 籠島恵子

だらだらのついで狸になっていよ

約束を延ばしてばかり菜種つゆ

振り向けば山の低さが見えている

濡れ衣着ているようなわだかまり

大東市 児玉蛙

好々爺のいつもの笑顔にだまされる

節くれの数だけ耐えた大きな手

答出るまではアンテナ立てておく

幸せにつながる糸がもつれ出す

東大阪市 安永春

雨天でも花見約束決めてある

お彼岸に霞おまいり取り止める

山里がにぎやかになる春の駅

雨しきり寝られず手紙ゆつくりと

和歌山市 川上富湖

布花が少し淫らに雨の日は

淋しいと決して言わぬ箸枕

兄弟が多くていいね胡蝶蘭

観覧車一周恋のプロローグ

和歌山市 古久保和子

雲の峰時刻表にもない電車

ムーミンと出合う高齢化の村で

部屋ごとに老眼鏡は備え付け

即答を避けてアメ玉溶けるまで

和歌山市 玉置当代

啓蟄に合わせ炬燵の線を抜く

春雨に低血圧を持て余す

満開のさくらの下のランドセル

束縛はしないが指輪重すぎる

西宮市 刈田泰司

鳴けもせず翔べない鳥も居るんです

乾杯にカチンカチンと湧く闘志

火の闘志泣いて笑って甲子園

耳鳴りも生きた証と聞く余生

宝塚市 吉田笑女

うっかりと口すべらせたないしよ事

ママのあと追うて泣く子がいいらしい

そつと目をとじれば浮ぶ姉の顔

一人住まいなれてもやっぱり淋しいね

鳥取市 美田旋風

なれてないお世辞が喉にひっかかる

メダカの学校を春の小川が消して行く

見送ってくれるな手術では死なぬ

度忘れの名前が浮びまた沈む

鳥取市 徳田ひろこ

おたがいのツボ心得ている芝居

公にしたくはないに羽根が生え

君子蘭やすっぱい世辞大嫌い

しなやかな杉菜頑固さには負ける

倉吉市 山本 玲子
あれもこれもつまんで仕舞うバイキング
笑うまいとすればおなが笑い出す

大袈裟な笑いで茶化すミスショット
否応なく電気時計にない休み

鳥取県 西川 和子
転けただけなのに心配してくれる
定休日には休み仕事が続くのである

あぶく銭身に着かぬまま消えて行く
不況風囲む明かりの数が減り

鳥取県 石谷 美恵子

蟻の列少し休んで行き給え
罪一つ許して素うどんが旨い
天地裂く声 日本海の寒稽古
寡婦の輪へ友の一人がまた入り

鳥取県 国森 武子

天と地の中一点で古稀近く
赤ちゃんを囲み家族の初対面
おだやかに仏となりし母囲む
草木染め趣味になりそうはまりそう

鳥取県 黒田 くに子

仏さまへ上げたい花の種をまく
童謡で心のうつを和ませる
掬っても汲んでも母の泉湧く
ふところが浅くて愛が掬えない

岡山県 小林 妻子
金婚へあかぎれの手が自慢する
お調子に乗りすぎましたなと思う

晩学は間に合いそうにない日暮れ
誰でも出来る誰でも出来ん五七五

岡山県 荻野 鮫虎狼

ゆつくりと夕陽よ沈め春の海
首長くして年金の有難さ

誕生日熟年達の無表情
フランスの料理がうまい日本箸

高知市 北川 竹萌

令室に明るい会釈貰う朝
朝顔の播き時決める桃の花
中庸の道穩やかに歩むべし
チューリップ春一番に覆いする

唐津市 仁部 四郎

不意討ちのはずはなかった検診日
宗教の人不意討ちに軒に立つ
無器用な恋でしたとは不躰な
無器用な問いに立板ともいかず

第54回 尼崎市文芸祭

雑詠一人一句(未発表作) 選者 黒川紫香・田淵定人・萩
原金之助・春城武庫坊・森田栄一 締切 6月10日(当日消印
有効)所定葉書・官製葉書で下記へ 〒660-8501 尼
崎市東七松町1-23-1 尼崎市国際文化室「文芸祭」係

佳句感想

橘 高 薫 風

句の句い

その日ぐらしも軒に雀がこぼるるよ

寒うおまんなあも芸者も年をと

路郎先生の句集はどの頁を開けてどの句を取り上げて味がある。一句一句が個性的なのだ。内容にリズムが適切に応ずるからだ。

貧しい長屋の生活ながら軒は雀の子育ての最中で日射しも暖かくまろやかである。

火鉢一つの四畳半、手をこすりながらに、

「私も一杯呼んどくなはれ」と熱燗を所望する馴染みの芸者もめつきり年を取った。客に

本音の言えるのは年季の味であらう。

長男ロンドンさんの一周忌に際しての

お父さんは不覚束なくも生きている

お父さんの神経衰弱がわかるかい

の一連の作や、終焉近くこぼれ落ちた

死の影が紋十郎の背後から

などの句は触れるまでもなかつた。

境界のそばの魚がよくふとる

境界の杭が行ったりきたりする

テリトリの境に犬の糞がある

原みさをさんの三句である。みさをさんは75周年の大会で月間賞獲得のきつぱりした力量のある作者で、今月の巻頭第二位を占められた。三句のうち一句を削るのに私は最も明快な、犬の習性を縄張りの絡みでとらえたのを外した。うがちも堂に入り過ぎる見え見えのマイナス面を意識したわけである。調和の点で前二句にひけをとったことになる。

満洲に行けば蒙古に陽が落ちる

菱田 満秋

満洲生まれの満秋さんは今なお同窓会で中国東北部へ旅をするらしい。彼の地の夕陽の美しさは定評があるが、満洲へ行けば更に西の蒙古の落日のたたずまいを臉に浮かべる。男のあこがれの雄渾さ、際限のなさが二つの固有名詞により大らかに表現される。構成はシンプルだ。自然リズムも壮大となる。それが短詩文芸なのだ。

娘の新居ダックスフントと初対面

佐野木みえ

娘の新居を訪う人一倍のうれしき、その真実味がそのまま感じられる。斬新な犬の種類名がポイントとなり一句の味を支配する。表現していない事柄まで新鮮に想像させる。

わたくしの絵にはたくさん窓を描く

倉益 一瑤

鳥取の柳人は先輩に現代川柳に挑む好作家が多いので少なからず影響を受ける。わたくしを見詰める眼は現代的だ。

すべての部屋に灯を点ける句は出尽くした。作者は窓を増やす。ストレスへの対応か、秘密のない明るさへの希求はお人柄であらう。

病院の前で別れてからダンス

中塚 礎石

自分自身を老人の範疇に入れての際立つた表現が効果を出した。一息に述べて二様の姿を垣間見せる転換のうまさ、現代を詠む。

モンタンに枯れ葉 雨情に枯れ草

人生は不可解である 枝雀

岩津 ようじ

私と同じ世代の二句、前者はモダンリズムと明治調を対句にまとめて趣を得た。対句はリズムに乗る。この句も滑り過ぎの感を後半の内容が補う。後者は藤村操の古事を想起させて、時事吟の妙を披露出来た。短句の効果だ。二句ともに広いうがちに通じ句いを持つ。

自選集

藤村 女

雲一つ無く忙しい洗濯機

生きて行く一つ二つと捨てながら

満天に星あり心あたたかし

ラバウルの星を知ってる老いた夫

露天風呂月が星つれこんばんは

波多野五楽庵

晚鐘の淋しい絵にはまだ逢えぬ

花伝書の中で幽女になる小袖

血球を星の数ほど吸い取られ

薬草の匂いが洩れるよされ節

こぼれ花だれも拾って下さらぬ

金井文秋

嗅覚も味覚も持つて行った風邪

情報墓場が棚の隅にある

補聴器が推理ドラマに無視される

妻が居て反応があるそれでよい

失敗談に花を咲かせている話術

小林由多香

世紀末生き抜く新語辞典買っ

日記帳悠悠自適白いまま

晩学ヘメガネ補聴器買い換える

高齢化少子化学ぶこと多し

役職をもらい単身赴任する

正本水客

春一番待つてる人がいてくれる

髭そっているのを見る暇だから

無理やりに爪先立つてるのがわかる

仲直りして夏がくるのを待っている

血糖値主治医の顔もふきげんに

藤井明朗

太陽の平等忘れ自国の幸せはない

薫風さわやかところが動く便りくる

むらくもの前進 柳友の力貯めてある

むらくものは続く若い力が発進す

敬愛される人柄文化交流の誘い

野村太茂津

停船命令聞かねば舵を射撃せよ
スクリューを撃てば進めぬ不審船
工作船兵士は憫れ消耗品
兵士には親兄弟が居るだろう
この次は容赦はしない捕獲する

野田素身郎

これというニュースもなく春うらら
髪洗う明日は会える予感する
戻り寒波三度目の風邪をひき
一周忌年に一度の顔も居る
花散った頃見計らって車椅子

黒川紫香

遠く来て出雲路は今花嵐
崖高く立久恵峽の吊り橋よ
まぼろしは亡妻か夜中の美人の湯(湯の川温泉)
さくらさくら木次の土堤は花の下(斐伊川)
握り合う堀江夫妻の手は温し

遠山可住

年寄りへプリン一つが開けられぬ
記者会見箇のうくような恋をする
足音がない新聞が風邪をひき
春の陽へバンザイして土堤の花
一坪の裏の畠も篠山市

西田柳宏子

もうキセル許さぬ自動改札機
選びたくないのばかりが立候補
お守りを仰山持つていて不安
種明かししては自分の首を締め
細々と開店脱サラ屋台曳く

恒松町紅

冗談で笑わす父の酒一合
太陽と仲よし鍬の汗がいい
足元はおばつかないが口達者
芽が出たと畑の方で呼んでいる
几帳面な人柄でした空いた椅子

辻白溪子

しとやかに見せて婦警が見合する
歯並びに自信を持っている素顔
解説が努力をほめてくれただけ
恋人の事も調べている刑事
出しゃばりが玉に疵とは思わない

月原宵明

鉄筋でわが故里は他人めく
かなな屑燃やして大工お茶を待つ
笑ったら損の役所に顔並ぶ
素晴らしい眺めに出した握り飯
熱してるような花見と選挙戦

松川杜的

高杉鬼遊

佇めば旧友のよう鳩が来る
「火廻要領」阿多古さんの札ありがたし
何もかも賞味期限切れそうで
ひまあれば折っておきましょ千羽鶴
呆けたかなちよいちよい間違う般若経

小西雄々

見せるものない大阪の城の石
右の手で洗う左手伸がよい
金魚鉢女性上位を見て暮らし
ふたありで花の散る夜に飲む珈琲
生かされているのを忘れ生きている

阿萬萬的

汗と涙に耐えた蕾にスターの座
喜びの頂点に立つ忍の石
嘘の上手な鷗が群れる港町
熱燗で酔わせ赤鬼眠らせた
上品に食欲みせず食べ残す

板尾岳人

ひらがなの心で包む母性愛
婦唱夫随ネジを巻くのはいつも妻
直線しか見えずだまされ易くなる
自己過信を論す椿の花が落ち
川底の石もはじめは角がある

八木千代

耳よりな話バラには棘がある
棘のあるバラを千本抱いている
わたくしを抱いて下さい昼の月
恋をしたことがあるので本を読む
遺書を書く筆を探しに妻の留守

等身大の鏡に曇り癖がある
曇らせぬ手だてもなくて拭くばかり
わたくしの憂い鏡を哀します
鏡から絶え間なく散る星屑よ
人間を眺め長生きする鏡

宮口笛生

河内天笑

散髪をして来た父の男前
まだ死ぬ死ぬめどうまい酒がある
吞んでます顔艶艶としています
野良猫四匹狸七匹餌をねだり
阿呆やなと狸にあげるパン買いに

薫風の舗道茶髪を光らせて
箱の一日外は若葉の萌える初夏
近すぎて偉い方とはつゆ知らず
いつ離婚されても元氣よく生きる
トラのメガフォンがどかどか乗ってくる

川柳太平記 (253)

川柳の群像

片岡つとむ

東野 大八

「私と奈良の結びつきは長いんです。兵隊に行つて帰つてきたら、勤め先の内外綿紡(う)が、チヨンガーの復員者は要らん、と態よくクビになり、ぶらぶらしていると、市役所からいい若いもんが遊んでいるなんて、というある人の助言から、就職試験などなくて、腰掛けのつもりで入つたら、なんと三十年以上も勤めることになつてしまつた。最初は農務課、民生課、それから教育委員会の主幹など、奈良市のことならこんな具合で隅から隅までお見通し、ということになつた」

いかつい顔の御仁だが、根が心やさしい人とみえ、こんな話を初対面の筆者にしみじみと語つてくれた。古い話で、どこかの川柳大会の懇親会だつたように思う。

その折、川柳との出会いは、さきの綿紡会

社の経理部に居た福島郁三氏が川柳人で、それとなく、川柳のよさを吹き込まれたが、私は三歳の時実母を亡くしたことから、水府先生の母百句が心にしみた。

万一を思う日もあり母の咳

水府

今にして思えば母の手内職

〃

の二句に非常な感銘をうけ、川柳つてこんなにいいものかと肌にしみたのが、そもそも川柳入門のきっかけだつた、ともその折、しみじみと語つてくれた。

この番傘の水府の句との出会いから、晩年には、番傘川柳本社幹事長にまで栄進し、平成10年12月14日胃がんのため死去。76歳。本名勉だから、それをひらがなにして柳名とした。大正11年6月6日奈良県生れで、昭和17年に番傘初投句、処女作は

刀鍛冶昔の名残り低い軒
だつたという。

つとむ

それから六年後、番傘本社同人となり、昭和30年奈良番傘会を創立。二十年余の後は番傘本社同人部長を経て、平成2年副幹事長として近詠欄選者もつとめ、程なく幹事長となり、朝日新聞には柳壇、大和柳壇選者、全日本川柳協会常任理事のほか朝日カルチャースタターや、NHK学園、社会保険センタ―等の各川柳講師をつとめた。著書に句集『沓の音』『風鐸』『片岡つとむ句集』などがあり、奈良市の風土性の中で一貫する生涯を送つた。

彼との交遊は、時折出会う川柳大会などの風交からハガキ等のやりとりをする仲となつたものの、この人の川柳観は『川柳春秋』(平成7年4月刊)の、「この人に聞く」の大本俊秀本誌主幹とのインタビュー記事にくだしいので、以下この欄から要点を抄録しよう。

生れは奈良県磯城郡都村宮古で、川柳は昭和17年からで、約六十年近い柳歴になる勘定である。

「奈良は春より秋がよろしい。大仏殿の西側に池があり、その東側に大きなイチヨウの木がある。その紅葉が見事で、奈良へ初めて来られた人達はみな秋なればこのイチヨウの

ある大仏殿の裏通りに案内するんです」

晩年のこの人は、筆者へよく奈良観光を熱心にすすめてくれたが、秋に限る、とその折の季節感の注釈から、ははん、この場所への関心からだな、と内心納得していたものだ。

兵庫県の三田に国立療養所があつて、福島郁三さんがここへ指導によく出かけられていて、この春霞園の川柳グループのキャップは齋藤以登さんという人で、この方と『両輪』という川柳句集を出され、その出版記念の大会で選をしたのが、初体験となつたらしい。

「初めから川柳は岸本水府選へ投句したらばーんと出まして、以来何もかも川柳作品は水府という人の影響というか感化で、いわばわたしの川柳は水府という人の人柄に惚れて番傘オンリーの生涯を送つたというわけだ。従つて昭和40年8月6日に水府先生が亡くなられた時、私はもう番傘を辞めようと思ひ同人辞退届まで書いたものです。しかし、生島鳥語幹事長の「水府路線に続こう」という一文を番傘九月号で読んで、成程、これで行くこうと考え、辞退届を撤回したんです」

もつともこのくだりと別に、こんな大事な一幕もあつてのことにもよる。

「先生がお亡くなりになる一カ月前、その時まだ比較的气元だったが、見舞に行つて

帰る間際になつて、布団をのけて手を出されたので、握手をしたがつておられるのかと思つて右手を出したら強く握つて、

「つとむ君、番傘を頼むわ」

と言われ私はひどく感激したんです。今から三十年も昔の話で、当時私は番傘の中核にいたわけでもないのに、甚だ潜越な受けとりかたかもしれないが『奈良には片岡つとむがいるのだから、奈良はつとむに委せておけば大丈夫だ』という気持が先生にあつたのではないかと思つたものです」

水府の心証をある程度まで認識している筆者は、このつとむの判断は正鵠を得たものと納得できた。

「朝日カルチャーの川柳入門は、橘高薫風という川柳塔のひと二人で講師をやつていますが、川柳塔といへば、昭和25年頃だったか番傘が『川柳の定義』を募集したことがあるんです。その論文の一等に当選した福田山雨楼氏は『川柳はくつろぎの文芸である』の言葉でしめくつていられた。いい言葉だと思ひます。川柳をやつていてよかつた、というのにこの言葉はよくあてはまっています」

この片岡つとむなる人物との対話での快さは、決して番傘オンリーにこり固まらず、流派を越えて、こと川柳に関する限り、いいこ

とはいいい、いいことをこの人は話す、という一種のおおらかさで賞揚してやまない点だ。

「貴方は、度量海の如きその点がよい」と筆者がいうと、柄にもなくテレ気味で苦笑された貌を今も忘れない。

「昭和三十年代でしたか盛んに奈良の句を作つていた。それは奈良に住んでいるからの郷土愛に似た想いからにもよるが、そこで奈良本位の作を集めて出したのが『沓の音』で芭蕉の「水取りやこもりの僧の沓の音」のその沓からとつたもので、奈良の句ばかり二〇〇句を出し、高橋市長にその題字を書いて頂きました。それから本格的な奈良の句集として『風鐸』を出しました」

晩年の片岡つとむは、しきりに仏性奈良の風土性にみちたたすまいを、盛んに作品にしていた。以下それらの句を最後に記す。

風鐸にかげがある日の法隆寺 つとむ
中年の恋が秋篠寺を訪う

幻は青衣の女人二月堂

五体投地罪がとび散る音なのか

王羲之という人ありき千字文

頬杖の指するわしき中宮寺

いとしひとのいとしき草木染

母一人子ひとり母の好きなもの

▼次号は「北川絢一朗」

俳風柳多留二四篇研究

6

橋本秀信・粕谷長生
山田昭夫・伊吹和男
大野秀二・小栗清吾
高橋啓之

清 博美・佐藤 要人

32 ちうぎさハ鉄打て行ぬけまいり

洗路

清 春日の局、伊勢参りと称して駿府家康の許へ。秀忠の長子竹千代に將軍職を継承させようと直訴。

徳川幕府に於けるお家騒動を未然に防いだ忠義。

表向伊勢で駿河へ抜ケ参り

一五一 35

橋本 賛。鉄乗物は、「大名の奥方や大奥女中の乗る駕籠。裝飾に鉄が打つてあるのでいう。鉄打駕籠」鉄打（『江戸語の辞典』）佐藤 賛。

33 越の傘かり吉原へいつてもて

夢中

清 髭を生やしてむくつけき男ではあるが、一口

34 ひげつらてあま酒をのむみともなさ

清 「越の傘」は越後屋の貸し傘。たとえ越後屋といえども、めくらめつぼうに傘を貸した訳ではない。常連客や品物を買ってくれた客に貸すのである。
その越後屋の貸し傘を持って吉原へ行き持てたというのである。越後屋の常連或いは越後屋で買物をしたとなれば、懐は暖かいはず。吉原の狐が懐が暖かいと見込んでちやほやした客は、実は狸だったという次第。
佐藤 賛。

下戸なのであろう。甘酒を呑んでその滓を髭にこびり付かせているなんざあ、男の風上にも置けねえ無粋な話しよ、といった次第。
或いはまた、甘酒の滓が口の廻りに付いている状態を髭と見立てたとも考えられる。
橋本 礎稿前半賛。甘酒は女の飲物。
山田 礎賛。なれど場面は、
雨舎りあま酒などをふるまわれ 明八仁5
あたりか。
佐藤 礎稿前半に賛。

35 しん川の手がらハ水をあびせられ 喜常

清 「新川」といえば酒問屋だが、そこで誰が何で手柄を立て、水をあびせられたのか？
川と水、酒と水の縁語仕立ての句のように思えるが、どうもよく解らぬ。

①新川の番頭が結婚して水祝いをうけた、とも考えられるが、結婚をはたして手柄と言えるかどうか。②番頭が深川へ遊びに行き、それが主人に発見、仕置きに水を掛けられた、では如何か。これも又、手柄に相当するかどうか。③番頭が玉川を割ったのが手柄と言えないこともない、然し、水を浴びせるが結びつかない。

小栗 「水を浴びせる」というと、水祝いか

師走油くらいしか思いつかぬ。新川(酒)の手柄(効能)でできあがつた生酔が油をこぼして水を浴びせられた、と読むのはこじつけに過ぎるか。

佐藤 この句、余り難しく考えない方がよいのではないか。江戸の婚礼用の酒はほとんど上方下りが用いられていると、いうだけでしょう。「水を浴せられ」は、婚礼用という諷意と思つ。

36 百性もどなるをきいてあきれてる 串柿

清 田舎で怒鳴っているのは誰か? 何か故事でもあるか。全くわからず。

或いは、遊女八つ橋を斬った、野州の百姓佐野次郎左衛門かとも思われるが、句には関連付ける措辞もない。

小栗 年末の掛取りではないか。門松売りに来ている百姓が、座頭(に限らぬかもしれないが)の怒鳴るのを聞いてあきれている光景。

百性をわけ／＼座頭門へいる 安元義6
百性と座頭の合へまつを立テ 安四仁2
佐藤 御不勝手の前でしよう。

門前へみの市のたつ御不勝手 三八16
という句があり、旗本の中には所領地から年貢米を取り立てる階層もあるが、年貢米の輕

減を嘆願する百姓たちが、その旗本屋敷へ押しかけるという状況もあった。が、ところが、御不勝手の玄關へ一足早く来ているのが高利貸の座頭。その怒鳴り声を聞いては、百姓どもも呆れているという状況。

37 ふところハでんがく切りと土手てい、 米久

清 柳多留五篇に、
ふところハでんがく切りのしたく也 五34

とあり、主題句はその焼直し。

真崎で田楽を喰い、さて吉原へという段になって、金を持っていないと言う。人様の懷を宛てにしたケチな野郎の言い草である。

橋本 賛。真崎では言わないが、日本堤まで来てから言うなんてこやつ計画的。

佐藤 賛。

38 兄弟か居ぬとだるまも無一チ物 寸魚

清 『日本国語大辞典』の達磨の項に、④亮春婦 すぐにころぶところからいう。とあり、本句を引用している。

とすると、兄弟は曾我兄弟で、虎御前と化粧坂少将ということになる。「無一物」は、何も持っていない、何一つ無い、との意。

句は、曾我兄弟がいなかったら、虎御前・化粧坂の少将は歴史に名をとどめることは無かつただろう、との意か。

橋本 消極的賛。そうすると「曾我の貧」で兄弟のほうも無一物に近いことを掛けたか。

「無一物」または「本来無一物」という成語が、川柳には達磨に関して多い。また達磨を有名人に擬した句もほとんどないので、何かほかの解がありそうな気はするのだが。

佐藤 礎賛。

39 めし人のゑんてよしはら通ひなり 文集

清 主題句での「めし人」は奴の女郎。奴については、『川柳辞彙』の説明を借りると、「江戸市中に散在した私娼が捕はれ、又は武家方で不義した女などが制裁の為吉原に遊女勤めをする者の称」とある。

句は、私娼であつた当時馴染んでいた女が捕らわれ、吉原で奴となつてゐる。それまで吉原に足など運んだことはなかつたが、その奴に逢うために囚らずも吉原通いをするようになった、との意であろう。

橋本 賛。岡場所のけいどうの結果。
佐藤 賛。

秀句鑑賞

同人吟 春城 武庫坊

— 5月号から —

川柳塔の秀句鑑賞執筆のご依頼があり、自分の甲斐性もかえり見ずお受け致しました。

先ずあたえられました資料を拝見、作家三百八十三名、総数一千九百に近い句をしつかり読ませて頂きました。

さて秀句とは？ その格付けが見つからず「うまい句」と言うのはありますが、技巧的に美辞麗句を並べてつくられた句が秀句であるとは思いません。私は句と対峙した人に作者の心が響いてくる句だと思います。

但しその感じ方も読者の経歴、経験、性格、境遇等により左右されるでしょう。

脳細胞が減少気味の私ですが、私なりに立ち止まらしてくれた句を鑑賞させて頂きました。作者の意に沿わないこともあると思いますが、その点ご容赦のほどお願い申し上げます。

電安室の静けさだけは本物だ

川上 大輪

人間の耳には絶えず生きるための何らかの

雑音が入る。それが幽明を境にして全く音の無い世界に身を横たえるとおそろしいまでの静けさなのだ。

地下の電安室だけは静の極致ではないだろうが、その静けさの中に敬虔な祈りが湧き出てくるでしょう。

新しい着目に敬意を表します。

投函後誤字はニンマリしはじめ

石上 悦子

投函後に気付いた誤字、誤字のもたらす影響は大きい、その結果を思つて誤字はあとの祭りをあざけていよう。

誤字がニンマリする擬人法がおもしろい。

解凍をされてるように沁みる酒

三宅 保州

身も心もほぐしてほしいときの酒は凍ったものが解きほぐされてゆくようにじわつと沁みわたる。

まるで冷凍が自然解凍されるときのようにある。上五、中七に五臓六腑に沁みてゆくのを味わせて頂いた。

ビク一杯釣れて撒き餌の恐ろしさ

山門 幸夫

政界、財界、産業界にかくれて撒かれて、それぞれ社会を不正に歪ませている根源がこれ、作者の鋭い目のつけとるを頂きました。

僕は糸電話孫等はコードレス

平田 実男

最近の通信機器の発達には目をみはるばかり、それを端的につかみうまく表現された。

僕の糸電話には詩があります。

預金利子拡大鏡でやつと見え

谷口 次男

現在の預金利子の低いこと、老人生活はこたえます。利率0・xパーセントの利子を見付けるのに拡大鏡を持ってこられたのがお手柄、それで見えましたか？ 利子なんておこがましい預金の塵でしょう。この塵はつっても山にはならないでしょう。

死ぬものが極楽ありと分かるまで

内海 幸生

びたり名言、行き先のわからんとこへは行けまへんわな。それまではちよつとでも現世の極楽を楽しむ努力をしましょう。

七賢人不況によい知恵おまへんか

大塚 節子

つまらない地域振興券にすがって不況対策

を考へる程度の低い政治家へ、一向先が見えぬ現在に對する庶民の叫び。

BC六世紀頃のギリシャで優れた統治者として伝えられている七人の賢者、タレス、ソロン、キロン、ピタコス、ピアス、ペリアンドロス、クレオプロスに不況対策を聞く、そこらへんの政治屋や経済人でなく七賢人に目を付けたのが面白い。下五のおまへんかがこの句に適切。

抱いた孫も高いほう指す武者飾り

杉澤 汀

お孫さんを抱いて節句の人形を買いに行けるのは老後の人生の楽しみの中では最高のものである。陳列されている人形を見比べると見栄えするものにはよい値段がついている。

思案の最中お孫さんが指さす先はやっぱり見栄えする品、お孫さんの鑑識眼に負けました。負けてうれしいおじいさん。

聖書がなぜかホテルにおいてある

永田 俊子

私も経験したことがあります。キリスト教徒でない私は真もくらずそのままにしておきました。作者は細かい出来事をとらえておられる。旅に出てゼンマイがゆるみ放埒な生活を戒めるためでありましょうか、疑問を持たれたところに深い思いがある。

カラオケの音痴活き活き歌つてゐる

吉村 一風

その元氣／その元氣／曲から外れようが気にしない。元氣で歌い愉快になればそれが健康によいと言われています。細かいことは気にせずに、活き活き歌えばこの世は極楽。

古希のり越える 先ず手ははじめの赤い靴

舟渡 杏花

古希を越えて初めて自分の齡を自覺、老と言う字が身の回りにちらつく。これで老い込んでしまつては人生は終り、古希を越えて未來に挑戦、手はじめに赤い靴が嬉しい。ピンクの服もどうぞ。

思ひ出は沖の白帆と遠ざかる

横田 英詩

思ひ出は夢に似て夢よりもなつかしと聞いたことがあります。思ひ出はその人の宝です。白帆は思ひ出を飾る背景でしょうか、齡を重ねることに遠ざかつてゆく思いが美しく歌われている句です。

嗽して植木水遣り思ひ立ち

本間 満津子

喉が渴いてお茶をこぐりと飲んで満足感を味わった。ふとその時渴きの連想から植木も水を欲しがっているかなと日常生活の中の無造作な行動にもやさしい心遣いが次の動作を

起す美しい心の句です。

生き下手になつてブレーキばかり踏む

門谷 たず子

老いを自覺するようになるとどうしても引つ込み思案になり実行しては中断する。ブレーキを踏む気持ちがよくわかります。

アリバイの土産梅田で見つからぬ

福本 英子

行き先は内緒、用をすまして大阪駅で下車予定の土産を地下の名店街で探したが見付からず、困った顔が代用品探しにウロウロと、面白い句です。

不自由は不幸ではない寒牡丹

村上 剛治

不自由な身でもそれ相当の幸福にはなれる。菰をかぶつて寒に耐えて立派な花を咲かす、寒牡丹は幸せ者です。寒牡丹をもつてこれられたことがよいと思ひました。

社員食堂 知人はまれとなる月日

竹内 紫鏑

久しぶりに元の勤務先をおとすれた時の淋しさがよくわかります。長寿の宿命ですか。

通夜の席時計は見ないことにする

相馬 一花

お別れの席を立ち去ることが出来ないうちいやりがよくあらわれています。

水煙抄

河内天笑選

和歌山市 森口美羽

わたくしの顔でいいなら売りますしよ

花の芯ちよつと意地悪したくなる

理屈では負ける黙殺しておこう

袋帯の自慢話を聞いている

ほんとうをのらりくらりと躲される

今治市 村上久美子

自画像はちよつと整形して描こう

花吹雪舞えば本音もほろほろり

ワイワイガヤガヤ団体さんで春は逝く

断りもなしに鏡の中の老い

脳は錆ついて血管滞る

大阪市 亀井円女

ガンに克ちおまけの命抱きしめる

婆ちゃんと呼ばれて横を向くお方

長らえてシナリオ無用欲無用

ここだけの話に耳は貸さぬ主義

女はおかし歳を言う人隠す人

和歌山市 武本 碧

妻でなく母でない日の華やかさ

クラス会心に少し派手を着せ

高望みし過ぎた杭が折れている

さり気なく褒めて促す子のやる気

慢心の手からこぼれる罪の数

藤井寺市 太田 扶美代

うやむやにしていけない請求書

悲しいくせに笑ってみせる芸がある

鯉のぼり序列をちゃんと心得る

合格の噂に聞くチューリップ

情報が少し遅れてくる暮らし

京都市 高島 啓子

いつからかプラスチックのはたきの柄

おつりだけ貰い竹の子置いてくる

白川へ舞妓は鯉をそとはなし

目が合って子猫家までついてくる

お茶会へ少しきつめの足袋をはく

堺市 矢倉五月

安来市 原 煩惱児

神様に任せましょと茶をすする
恋になる予感ページが埋まり出す
こだわりを捨てておはよう私から
不規則な音で父さん葱きざむ
かすみ草いつか主役になるつもり

泉佐野市 稲葉 洋

塩店からお中元くる水戸泉
浪速場所三横綱が蚊帳の外
徳俵たよりに老いの意地をみせ
手刀をきって振興券を受け
物言いがついて胃の腑を再検査

富田林市 山原昭水

恵比須さんみたいな顔で腹黒い
百円のチキンライスの恋もした
神童と言われた友がボケはじめ
花らっきよ薬のように五つほど
門限を守らないのはパパとママ

大阪府 澤田和重

助け舟だして共犯者にされる
親戚より他人の店は値切りよい
子の気持汲む先生は人気者
職歴に短気を悔いた跡がある
言にくい話は帰りぎわにする

わだかまり解けて出雲はお茶どころ
未だ古稀よじじ呼ばわりは止めてけれ
性善説四季折々の花が咲く
歌があり夢あり故郷の春の山
もう預金みんなはたいた老人力

兵庫県 安達 厚

往き還りおんなじ道は通らない
当り役演じ人生終りたい
預金より妻の長寿を当てにする
もうそんなになるのか古い日記帳
庭雀あんたも家族なんだよね

横浜市 山下省子

うしろから返事をされた独り言
ごねかたが老母も上手になってくる
諍った日の洗濯は別に干す
春の風主婦を休めとささやいた
いい人と言われたいから無理をする

羽曳野市 川口信子

ぶっちゃけた話もウソが混じってる
まだ若いわかいと足と脳に言う
聞かなかった事にしておく春の耳
嘘つけず年中肩がこっている
友情も金もなくした保証印

尼崎市 清水久美子

口うるさい妻に慣れっこロボの耳
介護士の慣れた手つきが冷めている
献血はするが臓器は思案中
遮断機がおりて女神を見失う
見え透いたドラマの壺に泣かされる

川西市 西内朋月

リモコンに埃もたまる独り者
留守電にあまり呑むなという息子
再婚の話に妻が浮び出る
とでんな焼け木杭に火が付かず
頼った主治医が先に逝ったうつ

倉吉市 牧野芳光

蟹気楼のようなサラ金のネオン
時々ここに居るよと棘を出す
トラック便 命を削る音がする
帰って来い片道切符子に送る
おしゃぶりのように携帯電話持つ

尼崎市 森安夢之助

裏に何かがありそうな低い腰
選り抜いてもらった妻に角が出た
池に月そんな夜がある里が好き
明るいニュース聞くとお腹が空いてきた
底ぬけに明るい嫁の軽い口

秋田県 湊修水

振興券抱いてうかれる子だくさん
幕開いて酒がおいしいトラファン
大バーゲン店員だけが売れ残り
一病と仲良く浸る野天風呂
畔道の土筆を撫でる春の風

米子市 森脇麗

竹林がライダンスの脚にみえ
空想の時には私ヒロインに
善人の仮面被って人騙す
噂だけ一人歩きの俗世間
寝入りばな怪獣吠えて眠気とぶ

河内長野市 木太久 正一

日本海追跡劇にある不安
春雷や姉は遠くへ旅立てり
眠れぬ夜妻とミルクを飲んでみる
三日間腹にやさしいおでん食べ
辞書を見るくせが妻にもついてくる

今治市 塩路よしみ

やっと寝たねとパントマイムのパパとママ
ピーポーが止まり近所がさわがしい
冷静になれば笑ってすむものを
喜寿が来て学び足りないことばかり
息止めて歯医者椅子でかたくなる

横浜市 山梨雅子

さがしもの夫の書齋未知の国
夫看ていて新聞を見ない日々
川柳が支えてくれた介護の日
家中の電灯つけて独り居る
一人病み鉢植も枯れ草も生え

河内長野市 杉谷一栄

初対面話はずんで伸びた麵
お互いに大正生れうれしがる
曾孫の知恵に元気を貰てくる
暖かい日の約束をして別れ
万一に身元のわかるバッグ中

松原市 和氣慶一

かげろうも黄色にゆれるゴッホの絵
モデルから声がでそうな印象派
だまし絵に気づいた母の赤い顔
定年でトーンが下がる日記帳
不景気に芯まで冷えた円と株

出雲市 梅ミツエ

胸の中馬鹿という字を飼っている
福寿草露のとうとも仲よしネ
嫁姑いつも感謝の輪をつくる
来世は針の山より花の山
手を振れば燃えるたすきの町議選

綾部市 藤田芳郎

アンテナの雑音これがおもしろい
神の名をひとつ憶えて旅終わる
躓いた小石がヒントかもしれぬ
ポツクリ寺に立寄るといふバスに乗る
不覚にも躓いたのは週刊誌

高槻市 西谷治三郎

予防接種済んだその日に風邪をひき
メーターが上がったとたん家に着く
おばあちゃん降りる駅までしゃべりづめ
傘をさしリュック背負って杖をつく
平成は他人に介護たのむ御代

高槻市 左右田泰雄

高く低くかわすつばめのランデブー
気配りの女将はそつと座を外す
はなみずにハチミツレモンしょうが湯
胃カメラをのむのがうまいとほめられる
待ちぼうけ雪洞ともる池の端

和歌山県 村中悦男

病床になじまぬ一夜やつと明け(日赤へ入院)
消灯のあとの不安をもてあます
部長回診一団となり部屋に来る
CTのかまは私をのみに来る
私の手術前夜をはげますわたし

横浜市 小野 句多留

検査前まずい下剤を二リットル

病床に悔しい程の空の青

春の宵飲ませ上手な友が来る

ため息をついて夫にいやがらせ

茶髪より混合茶髪増えてきた

高知県 桑名 孝雄

こんな血があつたか孫の能舞台

能舞台下りてウルトラマンになる

受付の筆と硯は意地悪い

三年日記だんだん角がとれてくる

泥水をすすった貌にある気骨

高知県 百田 幸

伸びる芽を影で支える親がいる

世代の差埋めるユーモア持っている

平凡な日々有難いありがたい

噂まぐくわしいことも知らないで

家計簿を欠かさずつけて五十冊

横浜市 長島 亜希子

グルメ番組追ってる夫がプレッシャー

移植するための脳死を待たれてる

内臓を信じてドナーカード持つ

うらかな日のパーマ屋で久しぶり

縁談保留ステッブアップする娘

神戸市 船津 とみ子

杖ついて歩く半年過ぎました

指紋たつぷり残る大事な杖である

姿勢よく歩けるようになりました

春ですよ杖つく音も春を呼ぶ

一病と生きしみじみと米洗う

京都府 前上 英一

淋しくてコンビニの灯に会いに行く

行間に思い出うずくまる日記

三途の川渡るクロール習ってる

稜線の向こうに憧れいまも持つ

拒みたい人もいるだろ自動ドア

浜松市 田中 知行

花冷えの馬蹄を替える脚を抱く

正座して見送っている世の流行

春愁の九官鳥に愛語あり

桜咲きひらりと姉の来たまえり

波の前涼し両手にハイヒール

大阪市 中井 正秀

気安く言う一寸山陰へ蟹食べに

世渡りが下手で孤独をかこってる

かたくなに手書きにしている年賀状

年寄と納得すれば気が楽だ

ただ酒と昼の酒とはよく回る

草笛を教えてやりたい白い雲

鳥取県

加藤 公子

罪悪観 価値観違うと処理される

新緑に囲まれている便りする

犯罪の低年齢にピリオドを

大ものは口先だけで謝罪する

日上市

加藤 権悟

サクラ咲く絵馬を労る赤マンマ

ままならぬ初鳴き妻と笑い合い

度忘れをしたとは友の思いやり

恐い夢ばかりが続く休肝日

土壇場で決断迫るのは卑怯

鳥取市

谷岡 清子

再起願って夫の杖となり切ろう

雑草も春だ春だと背伸びする

今度こそを秘めてこりずにくじを買う

新ジャガの旨さにうつも飲みこんだ

掃除機よごみも悩みも皆吸うて

伊丹市

延寿庵 野鶴

脇役が仮面をはずす露天風呂

箱庭の餌皿にスズメ群れ遊び

つむぎ織る夢を紡いで祖母は生き

不況風吹き飛ばせるか振興券

追い風を待って飛び立つ鴨の群れ

一病の息災ねがう万歩計

八尾市

山本

宏

助けあい二人連れならこせる坂

口惜しさを苦い薬とたえている

内心を見すかされてる欲の皮

饅頭がこわい闘う血糖値

今治市

渡邊 伊津志

おろかしいものから作り出された美

仏像は立木信仰から生まれ

純粹と健気さ愛を育て上げ

反対へやっぱりついてゆくメダカ

偏差値が雑魚の群れにも波を立て

羽曳野市

永田 章司

花よりも三兄弟で宴さかん

年金を鼠の如く子等が引く

資産家はケチの度合いでランク付け

休肝日良いと知りつつ今日も駄目

明治人羽毛ふとんは軽過ぎる

米子市

猪森 スミエ

ゆうゆうと宇宙泳いだ片笑窪

お医者さん曇った面は外しとく

チラシ華やか振興券の迷い箸

守られてどんな風にも耐えている

飛行雲一条春の彩の中

横浜市 三 村 八重子

恢復の歩幅迷わす水たまり

おみくじの吉へ疑ぐり深くなる

選挙カーに待伏せられる交差点

上寿司が限度か主婦の腹いせは

リサイクルするとオシャレなカーキ色

米子市 小 塩 智加恵

鼻風邪がなかなか抜けぬ四月バカ

大学生ハウス育ちが多すぎる

極楽にゆく道まめに草をとる

熱燗で風邪が抜けると飲まされる

孫の服一つ大きいサイズ買う

八尾市 田 中 トシエ

ズレている眼鏡だけならいいのだが

新しいエプロン母の晴着です

連休明け体重計が怖くなり

バーゲンで同じ服着た人に会う

出番なく糸切りばさみさびている

横浜市 保 田 絹 子

母の日におふくろの味せがまれる

子も中年まるとい言葉になってきた

肩書きが取れても残る傲慢さ

柔順な妻の反旗に慌てて

超ミニの視線靴で隠される

横浜市 川 島 良 子

賞味期限過ぎてる父の流行語

気の弱い男が妻をはなさない

まあいいかいいいかいで今日も暮れ

ハイチーズ笑顔頂戴いたします

公園デビュー六十歳も花盛り

出雲市 城 多 喜

私の行きつく先に木を植える

大波小波みなわたくしが投げた石

争いの果てに鱗が手に残る

いい加減影も私と離れたかろ

てにをはが何であろうと大阪弁

岡山県 国 米 きくゑ

忘れられた雛人形の恨み節

木の温もり生かす匠の腕の冴え

耳あてて聞く枕木のひとり言

過労死の記事を読んでもコップ酒

ひっそりと心が揺れるまだ女

和歌山県 坂 東 和 代

知らぬ間におよねになっておせっかい

シングルになった級友華やいで

貸し借りのない身のなんと清すがし

花の宴 下戸は埴輪のよさな顔

時どきは家事手抜きしてほくそ笑む

大阪市 中澤伽羅

子育てに家族ぐるみのおつき合い
アルバムに合格証も張っておく
春が来てくすり一粒減りました
同窓とわかつて肩の力抜く
耳さとい夫がそばにいる電話

横浜市 福田由美子

やせ方で病名までも見抜かれる
介護する嫁の健康忘れられ
電器具のスイッチは手が覚えてる
耳遠いことは隠している笑顔
親だけは入れぬ高校生の部屋

鳥取市 録沢風花

即発の火種たくさん世紀末
目だたない花でドラマの傍観者
日本中お日様マーク靴が鳴る
花に酔い話に酔うて山笑う
竹とんぼ昔の腕がまだ冴える

三田市 北野哲男

桜より短冊読んで通り抜け
そんな事言えず出来ずを句にしている
脇道が好きで世間を斜に見る
朝シャンはして朝食は抜いて出た
歩道橋渡るとそこは百貨店

鳥取市 有沢せつ子

うまい酒日本の四季に礼を言う
晩年の幸かも知れぬ孫の守り
落書きがつたない文字で憎めない
春うらら祝儀袋が忙しい
父さんの料理でつかい物ばかり

大阪市 大川道子

移り香をそっと抱いてる一筆箋
口出しをぐつとこらえたへば将棋
キャミソール下にババシャツ着る娘
お茶の間の一等席に猫座る
ちわ喧嘩のぞいた猫の大欠伸

鳥取市 福島庸二

お別れは辛いが出逢いくれる春
踏みしめたり踏み外したり人生路
大道の芸に魅せられ食い入る眼
うぐいすの声にカタクリダンスする
万物が動き始める春の山

和歌山市 福岡重美子

手短な祝辞は皆に喜ばれ
短兵急辞令に弱い宮仕え
少子化で明日の国土が気にかかる
ボランテア車で運ぶ投票日
フリーマーケット衝動買いもまた楽し

八尾市 與田 明

ストレスにずばりお金が効くと言う

決心を鈍らす春の甘い風

花見の宴下戸はだんごの立見席

ねじれたら親子の糸も難儀です

ミサイルに狙われている平和ボケ

大阪市 伊藤 博 仁

知らぬ間に妻のカラーでまともられ

御賓頭盧問診なしですぐ治療

撫で仏治療費納めぬ者もあり

貴方だけと齒の浮くような案内状

値引きして喜ばせた分他で取り

堺市 和田 つづや

男でも口紅引くは面白い

意地捨ててからの夕焼紅いよね

どうしたんと思わせるのもひとつの手

春愁か母に甘えてみたくなる

力こぶ見せはしません平和主義

鳥取市 山宮 愛 恵

よかったねのひとこと嬉し病み上がり

美しい思い出だけをたぐり寄せ

昔話よろこぶ母と日向ぼこ

春風のさやさや笑顔こぼれる

聞くことに徹し看護の手を休め

香川県 原 賢

トネルの向こうはきつと青い空

同窓会初恋かたる老いの口

茄子の花子供はそっぽ向きたがり

生き下手な夫婦の奥を覗く風

今治市 加川 はく文

春日遅々闊志ねむたくなってくる

春多感ところにより空が泣く

胸襟を開く相手をまちがえた

凡友として近すぎず遠すぎず

今治市 野村 清 美

大根がすばすば試し切りにあう

暖房がいやで厚着の癖がつく

ポケットの拳そのまま負けて勝つ

愛媛県 中居 善 信

肩が凝る気配りなんか欲しくない

窓開けているのに誰もやって来ぬ

あつばき予告もなしに落ちている

気がつけば父と同じ轍を踏む

愛媛県 安野 案山子

物言えぬ猫に当たっている夫

○×で分かるんですかアンケート

今日巣立つ子のネクタイを締めてやる

子が巣立ち妻と二人になっちゃった

愛媛県 黒田茂代

娘が病んで命の重さ考える
義足の娘迎える家を手直して
前向きにひらき直った娘が救い
再発の危機をうち消す娘のパワー

徳島県 安宅美代子

夫婦喧嘩笑い転げているダルマ
タレントの離婚話の視聴率
幸せへ不意に飛び込む彼岸花
人生の残り時間は神まかせ

鳴門市 八木芳水

春と言ってくれ涙が止まるから
駆け出せる姿勢をいつも崩さない
公害に揉まれ地球も末期が
教科書に追い越し車線見当らぬ

京都市 三宅満子

税金を払える身分ありがたし
水たまりムンクに似たるわが姿
老いはそこ身体と荷物軽くする
友が来て粗末な夕餉あたたかい

松江市 山根邦代

熱燭がむかしばなしを誘い出す
目に見えぬ毒が体をかけめぐる
手間暇をおしまぬ膳で医者しらず
空模様気にして巡る花の道

松山市 山之内 八重美
人だかりちょっと覗いて見たくなる
平凡に生きて明日の米をとぐ

嘘一つ鈍い痛みが胸をさす
席譲られ好意すなおに受けておく

三重県 佐々木 森哉

辞令一枚ひらひらと春の戯画
独り酌む酒はにがくて寂しくて
酔い醒めて蛇口の水に諭される
薔薇が咲いてる別れた恋が咲いている

鳥取市 山本 益子

皿数を気にせず食べる回る寿司
ほら吹きのでっかい夢に鬱暗れる
目札を交わして名前浮かばない
怠らず書いた日記は生き暦

鳥取市 中村 金祥
(丸金改め)

それぞれが嘘の上塗りして困る
ガン告知引き算ばかり考える
手の内は心のダムに溜めておく
まんまるい石にならんと又ころぶ

鳥取県 竹 森 富久江

うごく影もういいかいと夏陽さす
記憶かばそく帽子まだ脱いだまま
空を割く緊張感や飛行雲
とべた日の翼が少しだけ傷む

島根県 菅田 かつ子

そうじ機を止めてさつさと花を見に
しまい風呂あがると素顔光ってる

四月から老人会の一年生

鉄棒へ触ったけれど上がれない

島根県 福岡 博利

目覚しを止めてまどろむ二三分

疲れたら歩幅合わせてくれる妻

もつれます嘘を時々混ぜるから

旅に出てなんでわが家を恋しがる

島根県 武島 ちよえ

良いと言う緑茶で今日も恙なし

出る杭も使いようでは役に立ち

老いの膳 緑いっぱい皿に盛り

二三日会わぬと近所声をかけ

鳥取県 西尾 敬之介

振興券おかけを受けぬ恨み節

神妙に確定申告仕る

濃い匂い入学式の厚化粧

銭別の多寡で挨拶色分ける

島根県 槻谷 仲子

雨しとど桜ちらほらホーホケキヨ

お彼岸のオハギ菓の世話になり

草萌えて春愁によううららかさ

よもぎ摘み犬の散歩がきらわれる

札幌市 三浦 強一

神のみぞ知ってる明日へ米を研ぐ

うなずいて聞けば結局金のこと

年金で晩学の辞書買い替える

蟻の首ハローワークに吹き溜まり

川崎市 和泉 あかり
(見早子改め)

指切りをしようと土筆伸びてくる

チューリップ咲いて親指姫さがす

親ばなれ子ばなれ長い橋わたる

受付に並ぶ会社の好感度

静岡市 大村 正雄

気が付けば着ている服も疲れてる

欲張って開運の印買うてみる

金持ちが儲かる仕掛け出来ている

ひとときの相合傘も雨の縁

静岡市 中西 雅

小引出し匂い袋の似合う年

不自由を決して言わぬ友の意地

ボランティアたよりに走る運動会

古箏笛亡母の指輪が私呼ぶ

東京都 清原 悦子

薬箱すぐに減るのは胃薬か

下駄箱に足の疲れを溜めている

離婚して枯葉の曲が悲しすぎ

パソコンにいつも漢字を教えられ

四月馬鹿考えずぎて日が暮れる
雑草に元氣を出せと背を押され
ランドセル今も昔も赤と黒
ちゃんづけで呼び甦る五十年

横浜市

巖田かず枝

地味かしら派手を纏って娘に尋ね
かけつけたママへ泣き声派手になる
採寸へお腹の肉がへこんでく
或るヒント ペットボトルを細工する

横浜市

北沢街湖

部屋中に温さ広がる春の花
胃の中にストレスという悪が住む
愚痴少し言って肩の荷軽くする
丸めてた背中を春に伸ばされる

横浜市

田中笑子

列島に晴着をきせる春の精
休耕田へ絨毯を敷くレンゲ草
春よ春私も花を咲かせよう
桜より花粉前線気にかかり

横浜市

秋元和可

千年を咲いて雄雄しく立ちつづけ
花の下靴を鳴らして歩きましょ
花咲いてせつせと動く万歩計
猫の餌食費の中へ記入する

横浜市

伊藤ふみ

花曇り心のかすみ取れぬまま
夜桜を旅カタログでひとまわり
運不運 背おうも楽し看護の日
車椅子押して桜の中歩く

横浜市

岡田芳江

タイ刺しが僕だけにある誕生日
入院の妻が覚えた塩加減
退院の妻一番に美容室
同棲を叱らぬ母に同じ過去

北九州市

岡田幸生

合格で孫も一山越えた春
期限切れ食べる私も期限切れ
五十年添うて喧嘩も熱がない
ドラマ見てウルルン妻が泣いている

大阪市

中村叡子

自適とは言えぬが好きに生きている
名曲に引き出されてる過去の傷
売り言葉買わずに笑う歯が白い
そこまでは遠慮せずとも言える歳

大阪市

一本勇太

ジョギングの三日坊主に靴を買い
おふくろのような木綿の肌ざわり
困ったら走って来いと親ごころ
つっぱって親の意見に耳塞ぐ

大阪市

松岡千恵子

大阪市 榎 本日の出

海の荒れ静かになって春の顔
胸さわぎやと終つて胸なでる

スランプで一週間を棒にふり
砂風呂に三段腹がかくれぬ

大阪市 星 野 ひ さ

お笑いで命延ばしに行く花月

夜桜をゆらして風が嫉妬する

暮らし向きどう替えたとて唯ひとり

若返り鏡に聞こうテクニク

大阪市 安 達 はじめ

血統がなんだと駄馬の心意気

万葉の心訪ねて明日香村

春雨に肩寄せ合つて三千院

竜安寺 仏を守る庭の石

大阪市 小 泉 ひさ乃

花だより昨日の悔いを消してくれ

退院を待つてたように新芽吹く

落し物届くと信じ待っている

雨しとど今日も届かぬ落し物

八尾市 驚 見 章

晴天の朝 遠景に信貴かすむ

窓側のベッドで街の景を見る

窓際に来れば大空飛行雲

病室に光あふれて春うらら

東大阪市 今 岡 貞 人

捨てられし球根の意地水仙花

ストレスに堪えろ堪えろと蛙鳴く

甘さ辛さを選び分ける薬指

決断の勇氣の陰にある情け

箕面市 唐 住 実

まず酒税まだその上に消費税

義理チョコでなかった事を後で知り

チューリップ昼はぽかんと口を開け

それだけで天は二物の美人歌手

箕面市 釣 部 高 希

同窓会何時も上座にすわる奴

恋の芽を断ち切るように春が逃げ

男への不信が言わす愛要らぬ

信用出来ぬ言うて病院当てにする

貝塚市 吉 道 時 子

定年が公園デビュー日向ぼこ

組合せピツタリだった夫婦です

さざ波のようないびきが子守唄

手術の時は脂肪取るのも頼んどく

堺市 見 本 ちや子

娘も泣いた私も泣いた無事出産

娘の安産ちよつぱり肩が軽くなる

とっておきの写真仏にそつと見せ

会う度に一緒に食べている絆

泉佐野市 大工 静子
入院し小さな婆ちゃんと言う名付き

重病に若きナースの素ばしこさ
ボツボツとお出でと友は先に逝き
門を差込むように手術受け

富田林市 大橋 鐘造

少子化に歯止めをかける三兄弟

古代史の息吹伝える富本銭

次に吹く風を待つて鯉のぼり

花散つてやと己になる桜

和泉市 横山 捷也

旅行社に命預けた老いの旅

上手過ぎて老人会で一寸浮く

新築に親だけ住んでいる広さ

灰皿を持った四五人隅にいる

河内長野市 水谷 正子

終止符を打つまで人生クイズです

後れ毛が少し揺れてる喪の女

子を育て人の痛みも判って来

選挙カー花見の邪魔をしないでね

河内長野市 大西 文次

先生と言うてもキリのインタン

堂々と美人募集に応募する

強情な父そっくりの子の背中

価値観の違い下積み性に合う

寝屋川市 井上 すみれ
旅先でマクラ持参の友と居る

目の横のホクロチラチラ笑うたび
赤いもののドンピシャ着けて海男
やさしい女のひらかな文字の御見舞

枚方市 大昇 隆広

一条の光待つてた工場跡

里の川心の澄んだ人を生む

もう一度やり直しなと夜半の雨

ゼミで知り恋が育てた僕の酒

岸和田市 村垣 鹿太郎

振興券早く使えとそそのかす

事故現場お守り袋濡れている

再会に彼女の笑くぼ消えていた

重荷でも撤回出来ぬ男意地

岸和田市 宮野 みつ江

クラス会あこがれの師も好々爺

いろいろとあつたね笑くぼ消えていた

父の待つ陽気な美人ヘルパーさん

ポカポカの陽気に突如来る計報

岸和田市 徳庄 美智子

スカートは長襦袢柄京の街

富士山の空は青いと決めていた

失せ物に信玄袋のみせ開き

戸を開けよ閉めよと猫の亭主顔

羽曳野市 山本 たけし

点滴も遠慮したいな医療ミス
自分史に四季の移ろい見え隠れ
公園に増えたテントに見る不況
リストラに家のローンが追うて来る

羽曳野市 安芸田 泰子

花に来て花は見ていぬ二人連れ
老木の律義な春をいとおしむ
決断の臓器に命よみがえる
苦勞した話はしない力瘤

滋賀県 中 宗明

春うらら推理小説睡魔呼び
春を呼ぶお水取り観に妻と行き
端数切りサービスすると恩に着せ
まっぴらと言いつつ世話を焼く妻よ

宇部市 高山 清子

辛口の意見それから孤独感
優しさの同居で老化急ピッチ
愛こめて歌う音痴の子守唄
片想い辛くせつない老いの春

尼崎市 田辺 鹿太

飼う猫のような男が増えている
金のこと以外は妻と息が合う
湯豆腐に刺身が祖父のフルコース
甘口のカレーで育つひとりっ子

尼崎市 内田 美也子

カメラには納めきれない春の彩
のほほんひとり旅するおぼろ月
一杯のコーヒー目にしむ夜勤明け
明日のため今日大切に生きている

尼崎市 尾宮 弘治

同居して家の段差に手を入れる
リフォームを微塵も見せぬ妻のうで
小火千回耐えて笑顔の金婚譜
酔うたかな亡妻が出て来て眠られぬ

兵庫県 西山 八重子

火も水もくぐった母の太い指
叔母が逝く冥土の旅は花曇り
芽吹く季に花も私も忙しい
うっかりと主役の枝を切り落し

兵庫県 倉垣 恵美

篠山市誕生祝う小鳥達
明るい市制だいのししよ出ておいで
市政談義亡夫へ土産に持つてゆく
市になればデカンショ節も凄かろう

篠山市 円増 純子

新市へと夢を託した兎跳び
篠山市なんてまだまだ面はゆい
平凡が好きでそおとと一歩引く
老境へたまには欲しい変化球

兵庫縣 徳 平 穂 子

ひし餅に白酒飲んで雛気分
在りし日の母と竹む花の道
レントゲン心の中も写してよ
腰痛を口実にして風呂めぐり

兵庫縣 仲 井 素 水

不況風骨董店を吹き抜ける
秒針に急ぎ立てられる老いの日々
川柳を杖に悠悠九十坂
いろいろの欲で足元かため生き

奈良縣 出 井 澄 子

口もとが思わず緩む還付金
闘病の壁のり越えて春うらら
息抜きの旅が疲れる羽目となり
退屈をテレビゲームの碁で凌ぐ

和歌山市 水 田 秀 男

問題を積んで回っている地球
都知事候補一人紀州に来て欲しい
自然破壊町に猪やってくる
実力は先進国でない日本

和歌山縣 中 村 君 枝

痛い目に遭って信念荷くずれる
メンバーにやっとな入れて卒業だ
考えが浅くて迷い抜けられず
旅立ちと出合い織りなす花の下

和歌山市 木 村 親 路

死ぬまでは働けと言う低金利
何桁か兆の数字を書いてみる
就職が出来ず大学院へ行く
年金にあたま悩ます長寿国

和歌山市 吉 村 さち子

そして春笑い袋が締まらない
いろんな事あるが春には桜咲く
言い方もあろうに刺のある言葉
いい友になれそう無沙汰問うてくれ

和歌山縣 杉 山 精 子

一代で終る事務所の設計図
妻の留守一度も開けぬ冷蔵庫
大切な手紙にかけた小半日
美しい嘘友情のひび塞ぐ

和歌山市 上 地 忍

振興券黄色の財布買うつもり
春だからポストも洗い待つ便り
補聴器をつけたばかりに聞く話
一日中三つ子のように叱られる

横浜市 近 藤 道 子

ミサイルの空を横切る旅終わる(モロッコに旅して 3句)
風を読み陽と語らって羊飼いの
文明と遠くにあつて平和な地
満腹になると油断をしてしまふ

堺市村上靖雄

旧友に黒髪つけて名が浮かび

不況風名門ホテル吹き倒し

さけたばこくすりものんで生きてます

尼崎市軸丸勝巳

古希すぎて赤が似合うとほめられる

無料バス慣れてお礼も言わず乗り

花見酒ツマミだけとはさみしいな

豊中市岸田知香子

思い立ち八十路の記念バスポート

割り勘で若人出しにヴァイキング

予期しない振興券に笑みこぼれ

兵庫県谷田多美子

柚子の香に酔ってゆらりと仕舞風呂

分譲地職はためく過疎の村

古希過ぎて欲も小さくなってゆく

高槻市江原秀夫

どの医者も年だからねと軽く言う

財布握る妻にびったりフルムーン

土産物選る顔みんな目が据わり

今治市中村好恵

鯉のぼり村を日本の空にする

いかなごを煮てキッチンに春が来る

甲子園点差へ疲れどっと出る

横浜市平達也

寝たきりも桜飾って春となる

べったらを食って一日締めくくる

議題より余談ではずむ会議室

香川県向山治延

御時世か近くて遠い親子仲

八十路来て学びたりない事多し

白寿まで西の迎えはお断わり

横浜市荒井広和

絵手紙が母の元気を物語り

日の丸へ賛否両論吐く親子

蹴いた石が老人力笑い

唐津市岩崎實

宮内庁用達話のたねと連れゆかれ

大皿の対の値段が千六百万

神獸を四方に配し菊の紋

八尾市高橋明子

神仏を崇めますけど頼らない

二万円米と醤油とガス電気

孫はスキー息子はハワイ親テレビ

岡山県土居ひでの

春風とアバンチュールをしたい紅

合格の雛が並んだ熨斗袋

ひたすらに昭和一桁相撲好き

兵庫県 広瀬房江
笑つても泣いても財布口開ける

固い蓋開ける夫が居てくれる
兄嫁という損な役もろてます

出雲市 川島和歌子

会う度に興味出て来る味な人
こだわりの舌で覚えた義母の味
風はなの首すばめる間通りすぎ

大阪市 木村青生

諍いのあとクキクキとガラス拭く
音もなく落ちてても椿上を向き
伸びることあきらめ水中花揺らぐだけ

島根県 松本聖子

雪降らず田圃の害虫おどり出す
うさぎ歳亡夫はうさぎに連れ去られ
近すぎて何も分からぬお隣さん

高槻市 乙倉武史

連休のプランへ雨がいけずする
神様も不況を嘆くお賽銭
思惑の外れ一からやり直し

出雲市 岡あきら

ひと時は不況忘れる花の下
春風に揺れる柳の妥協ぐせ
散歩道草花の名を聞きながら

羽曳野市 西村りつえ

ようおこし美女へにんまり仁王門
老いのパワー茶髪に勝る足のバネ
幾重にも包んだ嘘があばれだし

米子市 足立由美子

そむいてた小石に今は教えられ
仏間にも春のひざしを入れておく
どうしても都会に合わぬ靴がある

八王子市 井上京一郎

思い出をフィルムに詰めて旅終る
風水に凝ってあちこち動く家具
深刻な手紙 眉間の皺で読み

宇部市 中田忠夫

お隣はいつも笑いの神が寄り
あれ程に飲んで食べても太らない
命日の亡母へご飯のてんこ盛り

新潟県 高野不二

無事すんだつもりのI.O.Cがばれ
携帯でつながれている仕事ぶり
砂糖 塩肉も脂も毒という

横浜市 豊田羊子

ルールは知らず松坂のニュース追
三年日記やめろおまえは続かない
合格へ喜ぶ桜肩に乗り

岡山市 清水 金太郎

悪い事続いたうえに風邪をひき

苦労しに生れたような人も居り

振興券年寄りだけは差別され

大阪市 平井 露芳

のど飴のなめ過ぎ虫歯痛み出し

IOCここでもとかげの尻尾切り

振興券うちがやったと威張る党

篠山市 高見 末野

篠山市開口一番おめでとう

愛情の鍵を持たせて送り出す

重い口開き婆さん意を通す

松江市 松浦 登志子

本日は自分都合でうつになる

子供の眼まっすぐ手品見据えてる

春風よそ様のゴミおしよせる

東京都 吉田 土風

握らせて受取りそうか様子見る

悲しみの渦中の人に近付かず

赤ヘルの娘颯爽バイク行く

大阪市 三浦 千津子

同居して老いに叶うた意見吐く

古里の地図をなぞっている慕情

あめ玉をふくませ禁煙強いられる

大阪市 立藏 信子

勝ったのにニュースで二度も確かめる

直球を投げたあとからする思案

間違いを正して笑えなくなった

出雲市 加藤 スズコ

手さぐりで始めた趣味が杖になる

振興券ふれずにおこう老い仲間

春告げる野焼の煙帯を引く

横浜市 布山 嘉信

出稼ぎの日銭を奪う雨続く

学級崩壊親の教育急がねば

背中にも喜び見える勝ち力士

倉吉市 大下 智子

ゆうゆうと見せて心はドツキドキ

物忘れしたほうがいいこともある

欲しい物上手にねだる子供達

堺市 荻野 正雄

揉めている話笑顔で治めてる

アメダスが外れてくれと空睨む

ふる里を箱に詰めてる親心

大阪市 尾崎 黄紅

四月一日老いの診察費のあがる

老妻の満足する庖丁のまだ研げず

手拭いを絞る力も妻と老い

羽曳野市 川 田 晋

褒めたいが言葉にならぬ書道展

写真帳掃除を止めて座り込む

旅終えた財布小銭ではちきれる

静岡市 増 田 扶 美

働いたしるし自慢の力瘤

農守る古老の勘は今も生き

自家菜園主より先に虫が食べ

尼崎市 河 津 正 治

愛妻の永久の別れに呷る酒

背なの児も別れ知ってか涙ぐむ

せせらぎの音軽やかに春の詩

和歌山市 上 地 登美代

よく笑う膝へお灸をすえてやる

だんご3個へ朝からママのヒステリー

乗り違い見慣れぬ景色飛んでくる

鳥取県 平 井 栄 翁

目に見えぬ寝返りのある投票日

合格がぐっすり寝さす春の朝

人の知恵借りて自分を売っている

八尾市 井 尻 民 子

認知せぬ約束の子が青い鳥

プレミアが付いてもほしいあの薬

鍋底を磨いて流す今日の鬱

京都市 高 村 吉之助

だしぬけに敬語を使うなにかある

生かされて方円の器にさからわず

気が晴れぬ午後のコーヒはブラックで

鳥取市 夏 目 健 一

物わかり良くて二の足踏んでいる

揉めだすと馬鹿になるのが得ですよ

この釘を打つか打たぬか思案する

吹田市 三 浦 憩

ご多忙を沢山くれている病後

無意識に君の名前を書いている

ハンガーに我慢しているスリーL

横浜市 福 島 かづ子

気と足がそっぽを向いてすぐ転ぶ

老母からの電話はいつも嫁が留守

春の宵またあの星にあえるかも

横浜市 鈴 江 純 子

術後二年ジャスミンにまた逢えました

肝試し震え隠そう手をつなぐ

背比べ柱に残し巣立ち行く

三重県 尾 崎 勤

サイレンを通し良い事した気分

帰宅して茶漬けで締めるフルコース

定食のごはん残せぬお年頃

松江市 小川 注 湖

貸ししぶり傾きなどは知りません
かば焼が新婚さんの手に乗った
出世欲捨てたつもりがまた燃える

鳥取県 高 尾 京

和を祈る空爆民を犠牲にす
初彼岸海辺の墓参空澄みて
沖繩に意地と希望の優勝旗

岸和田市 亀 井 皎 月

動燃は危険な嘘をつき続け
老残をひっそり生きている余生
出直しの利かぬ人生終りそう

鳥取県 藤 山 弘 子

怖いもの知らずに育ちフリーター
雀には内緒話は聞かされぬ
砂嵐コンタクトには大敵だ

鳥取市 宮 脇 道 子

幸福を自分に植えて春うらら
ズルズルと過去を引きずり針の穴
踏まれても幸せですと野のスマレ

東大阪市 北 村 賢 子

砂あそびもみじのような手でお山
風うけて孫とはしゃいだ夜の疲れ
人間くさい人が少なくなる憂い

鳥取市 松 本 つね子
老いて子に従う事にきめました
嫁さがし優しい風よ吹いてくれ
身の内の仏と鬼を使い分け

鳥取市 森 本 和 子
親の夢背負って歩くランドセル
今日を生き生き人を愛して花と住む
生き生きと喜寿を迎えて酒旨い

枚方市 二 宮 紫 鳳
垣根越し咲いた椿に仲もたれ
一呼吸おいて相手の良さを知る
口紅をひいて戦士の顔になる

横浜市 金 森 徳 三
古希過ぎてどこまで生きるロスタイム
ああ言えはこう言い合って歳重ね
傘さして拝む大仏雨ざらし

伊丹市 樫 谷 郁 子
縄のれんアウンのいきで腰をかけ
箒目に桜遊ばす銀閣寺
波の音肴に男ひとり酌む

岸和田市 木 村 正 剛
居酒屋の第一声が冷奴
懐かしい夜店のお菓子孫と買う
夫婦仲冷えぬ程度に口答え

堺市 梶本哲平

もの忘れ互いに喰い合う夫婦

平成になって毎日四月莫迦

きびなごの刺身 酢味噌が耐に合い

京都市 勝山美千代

有難い仏の加護に今日も生き

春彼岸墓は極楽花鳥

説教師いつとき老いに幸あたえ

大阪市 榎本舞夢

鍋料理上目使いで食べてはる

磨き上げた廊下で自分転んでる

嘘でいい妃になって威張りたい

姫路市 服部一典

いい歳の取り方したく読書する

他人さまはゆっくり療養せよと言う

酒の上だから許せぬ本音です

鳥取県 西垣美知子

春なのねやる気の虫が顔を出す

福の神舞い込みそんな家族仲

不景気も何時か笑える汗流す

宝塚市 飯西ミサヲ

正直に言わずにおこう糸電話

運のない女に当たるあみだくじ

校庭の夜桜ひとりタイムスリップ

吹田市 後藤志津香

サングラス女と判る胸があり

長風呂に夫の安否覗きこむ

榎原市 西本保夫

勉強をする気か孫のランドセル

一年生ランドセルだと決めている

倉敷市 家守政子

鍵をかけへそくりそつと数えてる

七十年のドラマ演じた足袋の裏

兵庫県 北川とみ子

つまりて他人の石を背負わさる

一服のお茶が愚かを包みこむ

和歌山市 土屋起世子

花見真産鬼も仏も踊ってる

来世紀へ夢を詰めてるランドセル

倉敷市 森本文子

これからは自分光らす石を積む

乳房吸う力よ親の字の重さ

富田林市 中井アキ

冗談も我がままもあり姉妹旅

役ひとつ持ってリズムを保ってる

千葉県 大川晩翠

ビニールの袋いっぱい蓬摘み

ペランタのガーデンングが花ざかり

鈴の音が奥の寺院に響く春
縁あつて私が生まれ曾孫抱く

香川県 松村 輝夫
八尾市 平川 幸枝

冬の芽は春の光に向きを変え
春「あつた」合格うれしい掲示板

横浜市 芦田 鈴美

追伸ということにして本音書く
先生がマスクをしてる休診日

和歌山市 岡本 八重子

念願の大原美術感動す

元氣かい今年もやって来たツバメ

高槻市 執行 稲子

カサブランカ好きだった友一周忌

度胸だめし下手物食いに挑戦だ

和歌山市 和田 美寿子

悲惨なる昔を偲び墓参り

口紅を引いて日々とぶ七十路

鳥取県 橋谷 静江

満開の花へストレス置いてきた

世話好きと見込まれ釣書持つてくる

野田市 那賀島 雅子

声高にわざと聞かせる壁の耳

はじめから聞く気もないにすわりこむ

道端の名もない草も春を待つ
山川を越えて五十路の二人旅

堺市 斎藤 さくら
羽曳野市 森田 四三郎

花よりもだんごのもてる通り抜け
やアーヨウーと互いに握手誰だっけ

福岡県 岩崎 和女

約束を破った日から遠い仲
世の中を曲りくねって世紀末

東京都 井上 つよし

毒舌に負けず皮肉で切り返し
スタンブが一杯熟女のパスポート

(イタリヤにスケッチ旅行)
横浜市 生坂 サト子

空近く窓ふく人の無事祈る
愛でるのが不足と見えて遅れ咲き

岸和田市 不破 仁緑

大声で喋らないから勘繰られ
この人と決め雑音に耳貸さぬ

愛媛県 宮本 末子

政界も数の力で押す倫理
老醜の手足心に従わず

川柳塔欄・水煙抄欄への投句は本誌最終ページの投句
用紙を使用、15日までに到着するようお送りください。

麻生路郎の作品とその周辺

大空の、い、ろ

(101)

橘 高 薫 風

この欄も大台の百回を過ぎ、今回は百一回となる。それも麻生路郎先生を中心として月々に出る『川柳雑誌』は如何に広範な執筆者が担当し、如何にバラエティーに富んだ内容を掲載して川柳人に裨益したかを提示せんがため、今の雑誌に比べその多彩さには舌を巻く。常に金銭との均衡を計りながらの苦勞が偲ばれて先人の奮闘ぶりに頭が下がる。

「春は春らしくフレッシュな感触のセンリユウ・マガジンをつくる。そんな事を考えぬでもなかったがふかふかとしたクッションに葉巻でもくわえ、マニキュアの身だしなみを誇るような時代でも来ない限り『川柳雑誌』らしくもないことだと思ひ、せめては来るべき丙子柳壇への我が社の抱負だけでも書きたいと思つていたが、これも雑用に追いまぐられ、発表を見合わせてしまった。発表は見合わせたが実行には移るつもりである。

この「金色蝙蝠」は自他の事を手当り次第に書いて行く真として拵えてもらった。私が何か言っていることも必要であると思つてい

る方は是非この頁の愛読者になつて欲しい」

このような書き出しで始まり、順序がなく時には世間のことを、また時には人間のこと、身辺雑話や柳友について、勿論のこと川柳論の片鱗も認められていてこれが半年間続く。

最初に昭和十年の主な回顧。三月に四男の洋さんの発病と死、それに幾年ぶりにサラリーマン生活に戻つたことを記し、十二月もキリキリ舞で暮らしたが、アートのヴァイオリンも本格的な勉強をはじめているので、先輩や友人の好意の中に包まれて越年する今の私は有難い境涯だといえる、と述懐する。

旧冬、南北翁が阪大病院に入院した。早速見舞に行つたら涼しい顔でベッドの上に起き直つて、「昨夜入院したんや、病人がピンピンしてるので、一体どなたが悪うまんネと看護婦が迂路々々してんネ。面白かつたで」とまるで宿屋にでも着いたようなはしき方、とても愉快そうである。

「それでもな、夜になったらここが痛んで

なかなか寝られへんネ」と頸筋を押さえて見せる。「昼にはこうしてキョロンとして何でもないので。これが反対やつたら散財に行くのんに」と如何にも残念そうである。

二度目に見舞つた時には、まるで死んだやうになつて、痛アーい、いたアーいと言う外の言葉はなかつた。人一倍大きな男が見栄も外聞もなく、まるでこどものように痛がつて奥さんに散々駄々をこねていた。あらゆる虚飾の中に生きて、くらげのような生活をしてゐる偉大な凡人南北翁の赤裸々な姿を遺憾なく發揮している。「先生、せーんせい」と同時に見舞に來られた長崎柳秀博士に呼びかけて、「せーんせい、手を握ってください」とうるんだ眼をこちらへ向けて手を差し出す。

「女でなければつまらんやろが」

「男でもエ、」と手が手を追う。

「わしの方がいかんのや」と博士は更に応じようとしめない。

瘦せても普通人より大きな体格の持ち主の病人と、達者でも普通人より小柄で瘦せている博士との対照は病室らしからぬユーモラスな光景が漂う。

一時南北翁の容態は私たちを心配させたが今日ではもう退院の日を待つばかりである。路郎先生のペンはのっけから快調である。

沙湖抄

八木千代選

この後は肥沃な土になるつもり
渾身の力で紅を刷くさくら
芝居小屋建てようわたくしの空き地
これは儀式ひとときを舞う花鯉
つるばらの絡みを軽く見たようだ
仰ぎ見る満天の星 そして罪
花の時実のときだけを名で呼ばれ
ばあさんと居るうめばしの色具合
言わなくてよかった 木蓮が揺らぐ
四捨五入されて五の字は重かろう
れんげ島なのに耳鳴りしてならぬ
回診のひと言 海にまで響く
川筋をいくたび変えて川光る
脈絡なく浮かぶいい事悪いこと
一流の弥陀に予約をしておこう
気負わずに生きて今年も桜さくら
狂うことはない花守のいるかぎり
街の中誰か見ている見えていない
留守電は何と淋しい声だろう
偶然をいつも計算する男

富田林市	藤田	泰子
和歌山市	木本	朱夏
和歌山市	古久保和子	
和歌山市	川上	富湖
同		
松江市	川本	畔
綾部市	藤田	芳郎
松原市	小池しげお	
西宮市	牧渕富喜子	
吹田市	山本希久子	
和歌山市	福井	桂香
米子市	林	瑞枝
あきる野市	佐藤	季穎
西宮市	奥田みつ子	
鳥取県	乾	隆風
藤井寺市	高田美代子	
島根県	松本	文子
犬山市	早川	盛夫
八尾市	宮崎シマ子	
和歌山市	川上	大輪

日の丸の染み洗っても洗っても
ひと冬の汚れガラスを拭くとしよ
現品限りの生命をいとおしむ
肉体も魂もまだ片思い

振り返らなかつた井戸に立ち止まる
どうでもよい事ひきずっている世間

青竹がしなる節目を越えたくて
雑草になって長生きしてやろう
驕るから神は人には羽やらぬ
美しい歌でここでは唄えない

特技などいらぬヒロは走るだけ
鉢植えを山に戻して発つ準備

人間のここは無力なピコグラム
砂山に穴掘る如く辞書を繰り

エレベーター今日も信じて乗っている
自分史に落丁という隙間風

告白がしたくて停まるかたつむり
下書きに下書きがある私小説

もう長くないと言いつつ井戸を掘る
許される範囲で犯すベンの罪

僕を刺す 影が握っているナイフ
サクラ閣そこから愛になるサクラ

春一番 言いたいことは言えない
水切りの石そのままに子の飛翔

熱湯がしごく私は玄米茶

何事もなくて出てきた路のとう

宇部市	平田	実男
砂川市	大橋	政良
大和高田市	鍛原	千里
鳥取県	土橋	螢
寝屋川市	森	茜
米子市	白根	ふみ
富田林市	池	森子
大阪市	神夏磯典子	
鳥取県	谷口	次男
藤井寺市	太田扶美代	
大阪市	川久保睦子	
鳥取県	新家	完司
唐津市	久保	正剣
堺市	神原	文
鳥取県	岩崎みさ江	
和歌山市	吉村さち子	
西宮市	門谷たず子	
堺市	桜沢	千世
倉敷市	小野	克枝
鳴門市	八木	芳水
三重県	佐々木森哉	
日立市	加藤	権悟
京都市	都倉	求芽
三重県	尾崎	勤
鳥取市	石上	悦子
弘前市	斉藤	蒔

愛の証たかが指輪じやないですか
呼ばれても噂降る町かけ抜ける
いきり立つ風にやんわり桜餅
イミテーションだから大きいのを買おう
逆立ちで方程式をうやむやに
逢いにゆく春の刺繍のような雨
匂いすみれの濃いむらさきは恋ならん
病室のベッド座禅の真似をする
引力に負けぬジャンプをしてみよう
太陽が見える間に森を出る
去年より少しうれしい春でいい
リーダーは自分自身と覚悟する
一冊を閉じて一つの旅終わる
陰影の深さ迷子になる私
花は当たり散らされても美しい
花に水あげるようだな化粧水
水仙がかたむく返された手紙
鬼やめたっといつまで隠れて居はるやろ
ひと鉤ほど物足らぬ僕の選
新世紀カニは横ばいやめるだろう
叛かれた日が祝日とある手帳
はどほどの修羅をくぐってきたんだ
回帰願望 靴の紐また縦結び
水澄まし己が円から抜かれられず
四海波見定めましてみおつくし
なまぬるい風に不安がふとよぎる

貧しかった昔話で酔っている
喜びの笑顔も入れてきた手紙
コンパスの先に未来がありますか
ブライドを質に入れたくなる不況
歯車のかみ合いも良し旅立ちだ
ろうたけて中間色になつてくる
好評のメニュー覚えて武器にする
新しい傘が水滴踊らせる
百歳の桜の樹にも意地がある
大空へ耳を澄ませば春の音
春の音となりも生きる音がする
八十路には仏の声や神の声
子供には隣のトトロ見えている
あの世この世で交わしてみたい糸電話
壁の向こうバラ色だとは限らない
小出しするうちに本心すり替わり
症候群 人も病も群れたがる
つづいたらやっぱり赤くなつちやつた
平熱に先ず髪といて下さいと
自信過剰だろうと幕の下りるまで
豆御飯の好きな男とエンド剥く
五体満足なのに不満な欲がある
一人息子 妻には優し過ぎないか
ドクダミもだんだん好きになる熟女
美しいナースばかりの快復期
花吹雪誤解も鬱も流される

唐津市	井上	勝視
米子市	足立由美子	
美祿市	安平次弘道	
箕面市	出口セツ子	
横浜市	後藤 早智	
枚方市	海老池 洋	
鳥取市	岸本 孝子	
横浜市	田中 笑子	
弘前市	中山 雅城	
和歌山市	武本 碧	
大阪市	辻川 慶子	
弘前市	一戸 ツネ	
札幌市	三浦 強一	
今治市	村上久美子	
鳥取市	植田 一京	
唐津市	仁部 四郎	
吹田市	石原 靖巳	
愛媛県	中居 善信	
堺市	志田 千代	
唐津市	田口 虹汀	
今治市	矢野 佳雲	
横浜市	川島 良子	
出雲市	石倉美佐子	
黒石市	相馬 一花	
横浜市	山梨 雅子	
西宮市	西口いゝゑ	

穴の無い白い障子に老い二人
軽鴨の家族に嫉妬するくらし
風化仏 一円玉をためている
野仏の腰にもあった万歩計
カタカナがすつきり言えず古稀つらし
食わなけりや捨てろとどなる冷蔵庫
街路樹が芽吹く想いを立て直す
落ち込めば月さえ通り過ぎて行く
愛想笑いする私に腹立てる
花が散る決心せよといったげに
飛び出した風船糸がついていた
立ち戻るにも原点はむずかしい
部屋にまで桜を運ぶぬくい風
名を知って見るたびいとし仏の座
吊橋でのんびり春を釣っている
メモ用紙置いておくだけよく眠る
道頓堀から中座が消える佗しさよ
藤田泰子さんの肥沃な土。実は私にも同じ思考が根付いている事に気がつきました。天を仰ぎ見ながら自分の手が届くところは、土だと。最後の安住地ではなくて次のものを育てる役に戻ろう。そう思い定めても少しの揺らぎ、泰子さんの一なるつもりにも感じられます。木本朱夏さんのさくらは渾身の力で訴えています。言葉に頼ると内容が甘くなりやすいのですが、やはり渾身以外にはないでしょう。身を振って幹の芯には血しぶきを散らして、やと桜いろに咲くことができた桜です。古久保和子さんの芝居小屋の見事さ。空き地があれば建てなおす小屋に精一杯の演技、芝居にしては重すぎるかも知れない、けれど自分への責任でしようから。

鳥取市	武田	帆雀
弘前市	福士	慕情
唐津市	岩崎	實
米子市	澤田	千春
河内長野市	植村	喜代
出雲市	板垣	夢酔
弘前市	高橋	岳水
鳥取市	福田	登美
倉吉市	牧野	芳光
八尾市	生嶋ますみ	
岸和田市	宮野みつ江	
枚方市	前 たもつ	
伊丹市	樫谷 郁子	
大阪市	渡部さと美	
青森県	西谷 大吾	
寝屋川市	井上すみれ	
阪南市	深日白光子	

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 5月号から

小寺花峯

明日食う米があるから笑つて

中居善信

今、地球上では食糧難で餓死者も出ている国があります。テレビから映し出される光景を見ては切ない気持ちにもなるが、作者の幸せな家庭が感じられる。

ガッツンと言えないボクは日本人

川島良子

先日、東京都知事になった石原慎太郎が、『ノーと言えぬ日本』という本を書いてベストセラーになったこともあるが、日本人はノーと言えぬ優しい心の持ち主なのである。

親しさを保ちながらも車間距離

安達はじめ

「親しき仲にも礼儀有り」と言う諺のとおり、何でも話せる友や先輩或いはお隣同士であっても、触れてはいけないことがあるものだ。「車間距離」が妙を得ている。

ランドセルギッシリ詰る親の夢

村垣鹿太郎

「末は博士か大臣か」、果たして親の願いをかなえてくれるだろうか。どこの親だつて子に夢を託すのは当然であり、「ギッシリ詰る」のは教科書ではないのである。

へそくりを太らすことにご熱中

妹背尽呂久

超低金利が続き、預金には利息が雀の涙ほどしかついてこない。でも、へそくりがあるうちは結構なことである。さて「ご熱中」とはどんな方法なのだろう。

背伸びなどしない暮して軽い足

福重美子

欲を抱いたらきりがなく、この辺で妥協しておくのが一番、軽いタツツで纏めている朗らかな句である。「軽い足」に今の生活の満足感がうかがえる。

訃報欄の齢を見ながら薬飲む

村中悦男

念入りに薬数えて朝の水

谷田多美子

自分と同じ歳或いはまだ現役で働けるような歳の方が亡くなっている。自分も決して元気とは言えないが、せいぜい医者からもらった薬を間違わないで飲むことにしよう。

熱燗でほろほろと過去へゆく

佐々木森哉

二合から三合にかけては酔い加減になる。段々首が不安定になり酔っていき様子が「ほろほろ」と三回繰り返したところに現実味を感じる。熱燗の好きな私も同様である。熱燗に乾杯。

八十の坂を越させた妻の杖

平井栄翁

この四月から男女雇用機会均等法が改正され、女性に対する接し方がセクハラにならないようにとの事。妻を杖に例えたのも均等法に抵触するかも知れないが、夫婦がつながり生きてきて、奥さんに感謝している様子が「坂を越させた」に凝縮されている。

振興券 孫も権利を主張する

清水金太郎

経済活性化のために採られた国の政策を的確に捕えた時事川柳。「孫も権利を主張する」に、僕が貰った振興券だから玩具を買つてよとおねだりしている様子が浮かんでくる。

新しい畳の上で深呼吸

武島ちよえ

新築をしたのか或いは畳替えをしただけなのかいずれにしても日本人であるがゆえに、畳の匂いは清々しく感じられる。

苗香のむ

西出楓楽選

余生まだ両手に種が余つて

喉元を過ぎると悔いになるお菓子

策略にまんまと乗った百円ショップ

吐き出してときどき確かめる心

握手する手が沢山の話する

塩加減 愛の加減にさも似たり

いい夢は羊が食べているらしい

女だからいろんな窓を持っている

追伸は心の中で書いている

鼻声の四月半ばを引き摺りぬ

振りすぎて瘦せた尻尾をなだめてる

しあわせの形 修正ばかりする

花の道おんなじ夢を見る人と

初恋の昔ばなしを聞く小川

一泊で妻のありがたさを教え

あわてないハートのエース持っている

黄昏れて花のところが読めてくる

性善説 見直す日々が多くなり

カーテンコール大変でした舞台裏

八尾市 高橋 夕花

富田林市 藤田 泰子

和歌山市 古久保和子

和歌山市 川上 富湖

和泉市 中川 楓

大和高田市 鍛原 千里

川崎市 和泉あかり

今治市 野村 京子

八王子市 播本 充子

西宮市 牧淵富喜子

羽曳野市 西村りつえ

寝屋川市 籠島 恵子

西宮市 門谷たず子

鳥取県 土橋 睦子

横浜市 山下 省子

羽曳野市 徳山みつこ

和歌山市 木本 朱夏

西宮市 奥田みつ子

鳥取市 坂田和歌子

聞き役になろう私の彩を消す
吊り橋の上で夫婦が試される

千羽鶴 千の仏に拾われる

たましいの瘦せないように読書する

こうなればりサイクルして長らえる

お互いの咳いたわって置く受話器

事なかれ主義でゆっくり流される

何はともあれ安心を買っておく

退屈な大人と遊ぶ砂時計

老いるほど妻が役者になってくる

金婚の旅へ中古車光らせる

エリーートのレール曲れば錆びてくる

さくらさくら大和ことが崩れかけ

自信喪失わたしを探す昨日今日

ひと彩を足してこの家の彩にする

これ位覚えておけと辞書が言う

どんと来いそんな深さに憧れる

リハビリへ生きる姿勢がうかがえる

春愁やかかったるそうに鳴る電話

はつきりとノを言えとは他人事

此の頃は脳がなまけるので困る

面白い話へ耳が寄ってゆく

春はパーティー花も小鳥も皆揃う

通りすぎた風はほんのり桜いろ

夢の中いつも私はもてている

帰宅する道で女は母になる

大阪市 稲本 凡子

横浜市 川島 良子

兵庫県 北川とみ子

米子市 林 瑞枝

米子市 白根 ふみ

富田林市 片岡智恵子

和歌山市 吉村さち子

吹田市 山本希久子

和歌山市 福井 桂香

大阪市 神夏磯典子

倉敷市 小野 克枝

和歌山市 上地 忍

熊本市 永田 俊子

大阪市 三浦千津子

鳥取県 さえきやえ

岡山県 富坂 志重

尼崎市 長浜 澄子

鳥取県 西川 和子

寝屋川市 森 茜

和歌山県 坂東 和代

西宮市 西口いわゑ

和歌山市 玉置 当代

芦屋市 黒田 能子

尼崎市 春城 年代

八尾市 宮崎シマ子

倉敷市 撰 喜子

智恵子抄 憧れていた夫婦像
 紫陽花寺 人のきずなを呼び戻す
 旅先の一期一会を胸奥に
 口少し重いお方で疲れない
 息子の家の厨は覗かずに帰る
 突然に話がそれるすきま風
 放心のままでははの骨拾う
 葉ざくらになってこの世を全うす
 追憶の幸せを編む花飾り
 やんわりと探りを入れる年の功
 新世紀を背負う薔を陽が包む
 馬耳東風だから今日まで来た夫婦
 春の雪 猫やるせなく顔洗う
 プランター土と対話の花が咲く
 寝たふりの枯木に電飾つけにくる
 虫干の家紋と語る昼の月
 残り火が時折風にさそわれる
 納骨の母へたくさんありがとう
 きついけど負けるものかと段登る
 人情にふれるとゆるむ涙壺
 指切りの指をかすめた春の風
 手鏡にふっと女を取り戻す
 緋ざくらに染まり多弁になる女
 ローン持つ城の主なり重い靴
 手放せぬメモにこの頃頼りきる
 喜と楽の裏に哀と怒ついてくる

貝塚市	吉道	時子
鳥取県	田村きみ子	
香川県	池内かおり	
堺市	志田 千代	
大阪市	渡部さと美	
倉吉市	山本 玲子	
兵庫県	倉垣 恵美	
出雲市	城 多喜	
横浜市	保田 絹子	
寝屋川市	井上すみれ	
鳥取市	録沢 風花	
和歌山市	上地登美代	
弘前市	佐治千加子	
米子市	光井 玲子	
大阪市	川久保睦子	
寝屋川市	太田とし子	
貝塚市	池田寿美子	
河内長野市	植村 喜代	
八尾市	生嶋ますみ	
八尾市	大内 朝子	
松江市	佐野木みえ	
寝屋川市	坂上 高栄	
富田林市	中井 アキ	
大阪市	松尾柳右子	
鳥取市	植田 一京	
交野市	山川日出子	

ごつつい手わたし握手が嫌いです
 エリートのかなに孤独と書いてある
 父よりも頼もしかった母の口
 仏様これが噂のだんごです
 時効です言える程度の罪ならば
 花吹雪へだてはしないゴミ置場
 出来そうてピエロの役はむづかしい
 日々好日 好きな時間に好きな本
 内緒ごと聴けぬ耳ですご安心
 小波には惑わされない座り胼胝
 来世紀ラクダお供の月旅行
 両親の眼鏡に叶う妻でよし
 老いたとて好きは好きですサイン会

米子市	森脇 麗
今治市	塩路よしみ
鳥取県	西原 艶子
藤井寺市	太田扶美代
和歌山市	榎原 公子
横浜市	清水 潮華
米子市	木村富美子
愛媛県	黒田 茂代
寝屋川市	平松かすみ
出雲市	園山多賀子
八尾市	井尻 民子
和歌山市	田中 みね
松江市	安食 友子

夕花さんの句―作者の来し方が彷彿と浮んでくる。若い間に蓄積した知識や経験は、老後の生き方を豊かにしてくれる。誰しもこうありたいと願ひ、なかなか真似が出来ない余生の姿だと思ふ。中七以降の表現に、作者の並々ならぬ技量がかがえる。泰子さんの句―もう何年も、数々の女性誌が瘦せる方法の記事を、繰り返し載せている。若い人は美容のため、中年以後は健康上の問題も生じてくるからであろう。理性と食欲がせめぎ合い、理性が負けてしまった口悔しさがユーモラスに詠まれている。和子さんの句―この不況に百円ショップが大繁盛なのだそう。何気ない日常生活の一コマをちよつと掘り下げて、読者に問題提起している時事吟。富潮さんの句―そう言えば心にもやもやしたり、自分自身に納得出来ない時など、このようにすれば自分がよく見えてくるかも知れない。教訓が前面に出ず、読めば何やらトクをした気分になせられ好感が持てる。

路 集

朝刊が休みで何も用がない
 仏滅という名で神の公休日
 生きてます五臓六腑に休暇なし
 休みたい時は休めず今無職
 お休みが多いパートに決めました
 妻の掌の広さで想う定年後
 遅刻とも書けず有給休暇とる
 病床で休む大事さ教えられ
 する休み上司と出会うゴルフ場
 今ここで休めば私軽くなる
 休耕田土の鳴咽を聞かされる
 不本意な休み社命に逆らえず
 ズル休みしても何にも当てがない
 週休が七日でとても忙しい
 淡墨にこころ休まる母の文字

佳

休んだが客も会社も恙なし
 狭くとも妻と休める家がある
 外出は少し憚るする休み
 母逝った実家は休む場所でない
 職ががす人に勿体なく休み

人

すこし休もう終着駅が見えてきた
 母さんが休む余程の事らしい

地

天

軸

休みの半ば会社を見に出かけ
 お休みがいるのは五臓かも知れぬ

平野あずま

しげお
 鉄治
 ツネ
 洞庵
 岳水
 妻
 悦男
 志洋
 めぐみ
 雄々
 白光子
 哲男
 あきら
 狸村

釘

牧淵富喜子選



釘一本打つにも父は母を呼ぶ
 おつとりと一本釘を刺しに来る
 受け付けで金釘流がうろたえる
 慎重な母スタートへ釘をさす
 よく弾むまりに先手の釘をさす
 古釘を抜くとしがらみ崩れゆく
 曲らない釘だご批判下さるな
 しがらみの釘抜いてから通る風
 不器用な釘それなりに効いている
 古釘の意地は妥協を許さない
 冗談のなかに打つて釘がある
 脱線の若さへ父の釘が効く
 釘打ったはずの話が裏返り
 さびた釘茄子が色よく漬かったよ
 三代を生きた簞笥の釘隠し
 釘一本打てぬ子供のキーボード
 大観を吊して釘が持つ誇り
 さようなら万感込めて釘を打つ
 新品の釘は生きている声を出し
 五寸釘憎いお方にまだ会えぬ
 美味そうに口から釘を出す大工
 有頂天の真ん中辺に出てた釘

父権まだ急所急所に父の釘
 父の釘だんだん効かなくなっている
 句読点確かに釘が効いている
 トップの座釘さすことが多すぎる
 早耳の急所へ釘を刺しておく
 さび釘も老人力に役に立ち
 釘付けにさせた真冬のしんきろう
 一本の釘を信じたツバメの巣
 折れ釘の意地になンクをさせられる
 抜けそうで抜けない釘をみぞおちに
 錆びついてとことん釘が主張する
 錆びついてもう抜かせない釘の意地
 釘なしの塔歳月に耐えている
 真直ぐに打つと素直な釘である
 古釘に堪忍袋吊ってある

佳

名工に打たれて釘はホツとする
 棟梁の口に魔法の釘がある
 黙秘権誰かに釘を刺されたな
 アリバイの釘効いてくる逃亡者
 俺よりも先に死ぬなと釘をさす

人

うしろ姿で父は無言の釘を打ち
 定位置にある風鈴を吊す釘

地

天

軸

釘という道具に感謝して置こう

土橋 螢

たもつ
 能子
 恭昌
 典子
 風花
 哲子
 めぐみ
 あずき
 吉之助
 勇太
 朝子
 さち子
 文
 ミツ子
 晴翠
 良知
 あずま
 次男
 青生
 正子
 正雄
 (高美代子)

寿美
 島
 多賀子
 千代
 愛論
 啓子
 ひかる
 善信
 満秋
 寿恵子
 彩子
 求芽
 (潮洋)
 岳水
 帆雀
 鉄治
 周信
 大輪
 たず子
 保州
 俊子
 しげお

初歩教室

題——迷惑

吐田公一

メモることですすめ。私達のような年配に

なるといま考えていたことや用事にきた内容までもすっかり忘れてしまふことが多くなる。

特に川柳などのように着想や表現が重要な文芸作品については、一度その思いつきや内容を忘れてしまふとなかなか思い出せないものであり、そんな時に限って確かあの句はよかつたはずなのにと臍を噛む思いをすることがある。俗にいう「逃けた魚は大きい」である。

そんなためにも常にメモを用意してメモる習慣をつけることである。これは作句に限らず新しい言葉や珍らしい現象を見つけた時にも大いに役立つ。そうした言葉を自分のものとして集積して置くことは決して無駄でない。

添削句

○迷惑なやつと寝た子に選挙戦

てる子

迷惑を使わずとも表現できるのでは

▽やつと寝た孫に選挙のスピーカー

○慢性肝炎知ってるくせに注ぎに来る 正雄
慢性が冗長。十七音字だけに言葉の節約を

▽肝炎へ好きなお酒を酌ぎにくる 志重
○妥協せぬ指に迷惑掛けるけど
「指に」がひっかかる。

▽妥協せぬ頑固握手をはねつける
○迷惑と知りつつ妥協できぬ老い 煩惱児
○迷惑を掛けたねとぞ逝った人 川柳はできるだけ口語体表現をすること

▽寝たきりが詫びを言いつつ逝った朝 美寿子
○迷惑をかけて建築大ホテル
迷惑を受けた方の心境を詠めば

▽迷惑をタオル一本ビル工事 宗明
○度の過ぎる世話の焼きすぎ迷惑だ
下五の技巧が欲しかった。川柳は余り技巧的でない方がよいのだが、直截すぎた。

▽度の過ぎた世話が重荷となつてくる
○朝寝して迷惑かかる勝手口 タツエ
ストレートに詠みすぎ。背景が必要

▽宅配に二度足踏ます朝寝坊 民子
○友の愚痴ベルにひやりとする私
中七の意味が難解

▽長電話うんざりさせる友の愚痴 栄翁
○飲め飲めと下戸は迷惑酔った客
下五が単純に流れている。

▽飲め飲めと下戸へ無体なからみ酒
○病人に迷惑だけの選挙カー 章司
着眼点は面白い。ただ中七を詠み込まなくともよかったのでは

▽病院の窓へもがなる選挙カー
○迷惑をしてもされると寝ておれず 輝夫
下五に難。原句を活かすと

▽迷惑を掛けてもされると腹が立ち
○迷惑のついでが酒の席となる トキ
ついでがにややひっかかりを感じる。

▽迷惑をかけぬつもりがつい長居
○食事中計ったように鳴る電話 省子
見付けはいい。長電話の迷惑を生かされる
とよかつたのでは――

▽食事中と知らぬが仏長電話 晩翠
○手伝うと迷惑そうな顔を見せ
老人のシャヤリ出る姿を想像すると

▽迷惑と知らず手を出す老いの性
○迷惑な隣の猫が持ち逃げる 政子
下五が説明句にしてしまっている。

▽お隣の猫が油断も隙もない
○人も散り迷惑のこす花の宴 宏
上五は不要

▽酔客の花の宴のあと始末
○迷惑と知りつつ甘える父のスネ ミツオ
訴求力に乏しい。具体性のある表現を

○ドジゆえに旅で迷惑かけまくり 美弥子

構えすぎの感がある。肩の力を抜いて

▽ドジ踏んでガイドに迷惑かけた旅

○迷惑をかけぬと頼む保証人 一 典

素直に詠まれていいのだが、切れに乏しい。

▽簡単に保証頼むと借用証

○家の前知らぬ車が駐車する

下五にスパイスが欲しかった。

▽門前の駐車が邪魔な来客日

○空缶が迷惑顔で草の中

今一つピントがずれている。

▽ポイ捨てのはた迷惑なハイキング

○迷惑な噂はいつも隣りから トヨ子

噂は概して迷惑なものが多い。迷惑を省い

て作句されてもよかったのでは

▽根も葉もない噂の種をまく隣

○迷惑と分つていても断れぬ 篤子

参考句も義理の味がはつきりすればなお

よいのだが

▽断わるに断り切れぬ義理があり

○迷惑が平気な嫁ほど情がわく 宏子

同じ内容だが

▽迷惑を気にせぬ嫁へ情がわき

○ご迷惑ピンポンと鳴り「祈り」売り 勝久

上五が冗長。ひとひねり欲しかった。

▽ピンポンで急いで出たらヤボな用

○迷惑をかけて平気な親子づれ よしこ

切り口をはつきりとさせること

▽若い母座席の土足叱らない

○下戸のひと無理じいされる祝い酒 純

下戸人。川柳は冗長な言葉省く。

▽無理じいを下戸にもされる祝い酒

○ぼろぼろと迷惑千万会議中

インパクト不足。なお上五は会議の声が聞

えてくる様子と思うが冗長

▽遠路来た苦情へ只今会議中

○どん底で迷惑承知の神だのみ 禮子

迷惑承知という用語が他にも目立った。

▽どん底で無神論者の神だのみ

○迷惑な携帯が鳴る葬の席 要子

葬の席とするより、一般化した方が句に広

がりが出るのではないでしょうが。

▽時どころかまわず携帯鳴りひびき

○肩書が迷惑がってる縄のれん 青生

着眼点がいいが、練り上げの不足

▽肩書が窮屈にする縄のれん

○迷惑をかけぬようにと生きる齡 羊子

下五にインパクト不足が感じられる

▽迷惑をかけぬ長寿へ竹を踏む

佳句

迷惑な話も聞けば放つとけず

たわいない噂話の元にされ

大声が邪魔をしているバス旅行 美也子

迷惑をすまぬと詫びぬ頑固者 三代子

独り者芋の煮付けを断われず 幸枝

声高に追えない猫の置土産 (三)八重子

迷惑は掛けぬと下駄をあずけられ てる代

クライマックス携帯電話邪魔をする ひさ乃

高いびきに肩を貸してる終電車 四三郎

思わくがあつて迷惑るしとく 美恵子

迷惑というに言えない義理一つ 賢

ご迷惑ですかそうですとも言えず つよし

迷惑と言えぬ上司の長祝辞 セツ子

(こんなよくある)

これだけは視たいテレビへ電話ベル よし子

(たいした用でもなかったのに)

懐が深くて許すことばかり 知華子

(こういう方ばかりだと…)

迷惑を気にしていびき部屋をかえ 泰雄

(擬人法が利いている)

保証人気やすく受けてあり地獄 方子

(怖いですね)

病状を根掘り葉掘り聞く他人 茂代

(こういうタイプは嫌われる)

ねこふんじった隣がピアノ買いました 春江

(久しぶりにユーモアのある句)

私の句

春眠を破る向かいの詩吟会

万感無量の句集

— 橘高薫風編

「師弟・五百句」鑑賞—

東野 大八

川柳塔創刊75周年を記念して出版された川柳句集「師弟・五百句」（平成11年3月葉文館出版刊）の「あとがき」に編者橘高薫風川柳塔主幹は次のように記している。（抄録）

「麻生路郎先生が『川柳雑誌』の創刊号を出されたのが大正十三年、この世を去られたのが昭和四十年だから、こちらも四十二年に亘る真摯な歳月であった。私はこの偶然の符合に大いに驚いた。

それで平成十一年三月二十日に開催する川柳塔社七十五周年記念川柳大会を機に急拠、句集『師弟』の出版を思い立ったのである。

先生と句を並べることの烏滸がましさに躊躇しながら、麻生アトさんに申し出たところ快くお許しを得ることが出来た。

まことに嬉しい限りで、大道をまっしぐらに進まれた先生と違って、私はというとふら

りふらりと多くの仲間の介添えて凌いで来た修業の道程ながらそれでも万感の思いが押し寄せてくる。世の中には文芸の世界に、師とか弟子というもののあらうはずがないと言う人も多いが、私は路郎先生から生きる上での魂のような、気骨ともいえるものを頂いた。これが師でなくて何であらう。ただ期日に追われての不備な句集なので、完璧主義の先生、あの苦虫を噛みつぶしたような顔を思い出さねばならないのが、この上なく辛い……」

川柳雑誌誌上における永年の常連寄稿家を自負する筆者は、万感無量の想いで、これまでお馴染深い野尻弘画伯装画のこの句集を撫でさすりながら果然無為の一刻を過した。

川柳雑誌No.460は「麻生路郎追悼号」である。それを机上に取り出しながら、眼を通して、諸家満堂の悼文の数々を読み耽った。

「路郎先生は、短詩文芸における詩人としての非凡な素質をもちながら、柳誌柳社経営のためわざわざいされて、作品の上にそれを充分に発揮することができず、あたら珠玉を抱いて市井に埋没されたのではないか」（石原青竜万）

「君も病院、僕も入院した、お互い早くなおるよう……と、はがきを出した。とたんに計報が届いた。全く胸を打たれた。路郎君と僕とは、明治四十三年夏の関西川柳家の句会か

ら交際がはじまった。（中略）そのころから君は一本気で、川柳の主義主張もすっかりしていた。川柳雑誌を興すまでは、新興川柳の旗をかかげて五、六年は誌上で議論も多かった。川柳になつてからは、同じ川柳（新興奥のない）傾向だったのでコンビになった」（岸本水府）

この二十歳台の頃の思い出を綴った水府先生のお見舞文は、この人の遺書となった。月余を出ずしてこの水府先生も死去されているからだ。

「薫風君かいな、あれはええ素質を持ってる。今に川雑を背負ってたつてくれるよ」

こう晩年の路郎先生は、青竜刀師同道で万代西五の先生宅を見舞った折、そうベッドの上で述べ懐かれた、機嫌のよい路郎先生のお言葉だった。今もその一言を忘れないのだが、いまその薫風君が、川雑を継承する川柳塔主幹としてこの「師弟・五百句」の句集を編まれ、世に出されたことは、筆者としても望外の本懐として誠に喜びに堪えないところである。麻生路郎作品の最後の遺詠である三句のうち、「いろはおくり」は、文楽の「菅原伝授手習鑑」の送り台詞からだし、「雲の峯」は、路郎先生が大好きだった夏目漱石の俳句「雲」からである。その末期の名句に今更ながら感無量の涙を催す筆者である。

■句集紹介

『しまなみ』

月原 宵明 著

小島 蘭 幸

川柳塔社の相談役であり、汐風川柳社顧問の月原宵明さんが、平成十一年三月二十八日の卒寿の誕生日に第二句集『しまなみ』を発売されました。タイトルルの四文字を見つめてみると、五月一日に開通した瀬戸内しまなみ海道の美しい風景と、汐風川柳社のあたたかさが鮮やかに浮かんできました。

初めて出席した愛媛川柳研究大会、そこには物静かでやさしい目をした今は亡き長野文庫さんと、テキパキと応対される若き日の宵明さんの姿がありました。その姿はまさに静と動の美しさでした。そのお二人のあたたかさに触れて、二十歳になったばかりの私は川柳という文芸がますます好きになったのです。汐風川柳社のある愛媛県は、全国屈指の川柳県であると思います。それは、仲川たけし(全日本川柳協会会長を中心とした県川柳連盟の団結力と、県柳連副会長の宵明さんの実行力に負うところが大きいのです。宵明さん

が現在指導されている柳社の一つに、大三島川柳会があります。今治から船で一時間程度の距離にあるこの島に、渡辺南春さんと一緒に毎月指導に通われています。その大三島川柳会が、順調に回を重ねられ今年六月に第五回の川柳大会を開催されるという……指導者としてとても嬉しいことだと思います。

指導者としても一流の宵明さんの作品は、決して派手さはないけれど、どの作品もいぶし銀の輝きを持っています。それは、柳歴六十余年に裏打ちされた厳しい眼と、慈愛に満ちたやさしい目なのです。

減反を笑うセイタカアワダチ草

満腹をもう幸せと思わない

ロボットに労働基準法が無い

終電車働き過ぎはみな眠る

花束贈呈孫と初めて握手する

りんどうよ少女はひとが好きになる

ぶらんこに乗ると子供の国が見え

昭和五十七年、汐風四〇〇号大会を終えて、

宵明さんは次のように書いておられます。

「……創刊四〇〇号と言えは三十三年余の歳月を終たことになります。昭和二十四年一月、今治、菊間、津倉の各吟社を一元化して『汐風』が発刊されたもので、その時代時代の先賢が、犠牲的精神と人の和によって今日に

至った功績の偉大さを認識すると共に、我々は何をすべきかを肝に銘じ、更に五〇〇号、六〇〇号に向い次代に継承する母体を護らねばならないと思います。我々は四〇〇号記念句集発刊と本大会を契機として、川柳の興隆と社会浸透に意を注ぎ、その社会性、人間性を大いに発揮して、短詩形文学の中核を確保せねばならないし、柳人相互のふれあいを大切にして、川柳の『道』を進んで行かねばならないと思います……」

平成十一年五月号で、川柳汐風は通巻六〇五号……。五月九日、多くの柳友を迎えて、しまなみ海道開通記念・汐風川柳社創立50周年記念・第45回愛媛県川柳研究大会が開催されました。

竹を踏みくるみを握り生きてゆく

しまなみの橋から二十一世紀

穏やかな瀬戸内海をはさんで向かい合う、汐風川柳社と竹原川柳会は友好という深い絆で結ばれているのです。しまなみ海道の開通によってその絆は更に深く太くなると確信していますし、卒寿を迎えられてなお、矍鑠として前向きな作品を発表される宵明さんのことが大好きで、大いに尊敬しています。

句集『しまなみ』の発刊を心からお慶び申し上げます。

奇蹟!!

十数年来の
ゼンソク退散

西田 柳宏子

いつからか思い出せぬ気管支喘息との闘いから解放されて、嬉しく毎日を歩いている昨今です。

まだ現役で会社勤めの頃、世間で花粉症なる症状や、原因と言われる杉花粉を耳にし、やがて私も目が痒い、鼻がムズムズするという体験をした当初は、喉の弱い、すぐ風邪をひく体質だから、また風邪だろう位でさほど気にもとめず、いつとはなしに治っている状態が数年続いていました。

永年私の喉の弱いことで、すぐ風邪をひく、すぐ声が嘎れる度に懇意にして頂いていた耳鼻咽喉科の阿部先生はすつと見守ってくださっていました。が、無頓着な私は平気でした。

その内定期的に出ていた花粉症の後遺症が次第に喘息的に呼吸の逼迫、息苦しく呼吸困難を覚え、先生から気管拡張剤としてブリカ

ニール剤を与えられ、発作時に一錠飲むとすぐケロッと平静になり安心したものでした。

日が経つにつれて、服用頻度も増し、発作微候が出るとすぐ服用して発作をおさえ、数年間何とはなしに、ブリカニールを常時携帯してしのいで来ました。その後呼吸器科・内科

の那須先生の許へご縁あり寄せて頂いて、矢張り気管拡張剤ではあるが、咽喉へスプレー式のアトロペントを頂き、発作の出そつな時、或は発作時に咽喉へ「シュツ」と吹きつけて鎮静させていました。いずれも気管拡張という作用で発作をやわらげる処置で、薬にはなるが治るということは望めず、一生ゼンソクと二人三脚と半ばあきらめの境地でした。

世間には案外、喘息患者も沢山居られるように、いずれも同じような気管拡張剤などで発作を押えて居られるようです。

降ってわいたような朗報!!

昨年末（平成十年末）那須先生から一度これを試して見て下さいと変ったフルタイド50という吸引剤を渡されたのです。「これは喘息の発作を速やかに鎮める薬剤ではありません」と患者の皆さんへのメッセージのトップに書いてありました。

米国で作られ十一月に日本に来て発売されたものとの事でした。先生は私に投与するの

が初めてだとの事でしたので「私はモルモットですな」と笑いながら使用法を聞いて帰りましたが、年内二度ほど吸引しただけで矢張り従来のスプレー式アトロペントに頼り正月を越しました。本年一月に先生に会った時

「どうですか」と聞かれ返答に窮し、今年から取組みますと答え、その日は夕方、翌日から朝夕二度と吸引をしたところ、欺されたみたいに全然発作も出ませんでした。歩道橋、地下鉄の階段、ビルの階段など今まで一気に登ったりしたらヒイヒイ言つてアトロペントのスプレーをして暫く休憩が必要でした。また地下鉄などの長い連絡通路など二・三遍立止まりアトロペントのスプレーをうけていました。従来一日に一・三度位の噴射していたのが、昨年末では一日三・八度位にまで頻度も進み、人と一緒に歩くと呼吸が忙しく発作につながるの、皆さんにはどうぞお先にと断つて、とほとばマイペースで歩いていました。

今一つアルコールアレギーと言うか、酒、ビールなど軽い食前酒でも一滴喉を通ると忽ち呼吸がせわしくなり、また料理に酒などが使われていたり、整髪料を頭につけた時なども、アルコール性の匂いにむせたり、ひどく苦しんだことも度々で、そのため外食も料理によって、店によって一口食べただけでグー

ツと呼吸に来て慌てて支払って外に出たことも再三です。

ところが、ビルの階段や、長い道を人と一緒に歩いても発作が起らず、アルコールアレルギーも治ったようなのです。今迄絶対駄目だった奈良漬、ウイスキーボンボン、粕漬などを口にしても何ともなくなつたのです。未だ自分で怖いので酒やビールを口にはしていませんが、これから先、また皆さんと飲める日もあろうかと楽しみにしています。

エッセー

花七日

井上照子

昨夜からの雨はつい先程から小雨になつてまだ降っている。私は柳誌に出す句のあと三句がどうしても出てこないの、小雨の中を外へ出た。いつも通る小さい池には今日も可愛い水鳥の夫婦だろうか仲よく浮いている。この池を過ぎて、ほんの少し歩いた所に古い木造の家の散髪屋さんがある。その家の垣根に梔子の花がとてもよく咲いて、甘い香を放っていたことを思い出したのである。艶やかな緑の葉の間に白い大きい花が、なだらかな坂を下りた所に咲いているのだ、

池の中程まで来たが、何故だろう甘い薫り

人により体質により私と同じようにはゆきませんでしょうが、私の体に合った「フルタイム」に感謝しつつ、ゼンソクの皆さん方も、夫々体質に適合した薬を見付けて下さい。そして私も近く皆さんと乾杯出来る日を愉しみにしています。同病の皆さんの元気付けにもと下手な文章にしました。参考になれば幸いです。

追記 三月の終りから朝晩二回の吸引が朝一回になり好調です。すっかり解放される日を楽しみにしています。

はしてこない。少々気になつて私は小走りに足を運んだ。「あれ」思わず口をついて出た驚き、垣根は緑の葉が雨に濡れて、つやつやとしているが、香も無く凜と誇らしげに咲いていた花は、何ということだ、花びらの先を茶色に染めて汚れ萎れている。花の残骸の数。せめて、一つや二つ、白い美しい顔を見せてくれないのに。私はがっかりしてしまった。あの甘い薫りはこの家の主人がみんな吸ってしまったのであろうか。ぼんやりと立ちつくして緑と汚れた花を見ると、主人がにこにこして家から出てこられた。

花の香を吸うて主の笑顔よし

池の半ばを歩いていても、こんな様子であるから、あの甘い香は来るはずもない。「あきまへんなあ、雨に打たれて汚うりました。ええ匂いもせえしまへん」主人も、がっかりしたような顔であつた。

つい四、五日前に通つたときの、あの清い白い大きい花、そして高い薫り、見事な垣根であつた。それなのに、今日のこの有りさまは、何ということだ。精一はい咲いた上に、冷たい雨が容赦なく花を叩いたのであろう。力尽きて花はくたびれていった。みすばらしい花。いつそ花が無い方が緑が美しい。「花の命は短くて」「花七日。花咲いて七日鶴見る麓哉（芭蕉）」など、造花でない限り、花ざかりは七日間に過ぎない。という盛りの短いことのたとえもある。

老いしよばくれた花、ふと自分を花の上に重ね合わせかけたが、慌てて打ち消した。花はまた来年、きつと美しく咲いて甘い香りを四辺に漂わせて、人々の心に、いろいろな感情を味わせてくれることであらう。

私は句を作ることなどすっかり忘れて踵を返した。池では楽しい会話でもしているのか並んで泳いでいる水鳥が私の心を癒してくれただ。雨はいつの間にか止んでいた。

川柳作品全国募集

主催 愛知県大山市観光協会
愛知県大山市文化協会

募集期間

平成11年5月1日～6月25日まで

応募方法

はがきに2句連記(一名二枚まで)

(住所・氏名・電話番号明記してください。)

応募費用

無料

テーマ

「城」二重投句は厳禁

審査員

難波 利三(直木賞作家・岩井 三恵(番傘)
橋高 薫風(川柳塔)／竹本瓢太郎(きやり)
佐藤 一粒(鶴かご)

賞

最優秀賞・優秀賞・奨励賞など沢山

投句先

〒464-1801

(お問い合わせ先)

愛知県大山市大字大山西三六

大山市教育委員会・生涯学習課内

お城川柳コンテスト係

☎(0568)6111800(内線307)

入賞者表彰式と川柳大会

表彰式

平成11年10月10日 午後12時30分より

ところ

大山市観光センター

川柳大会

表彰式後引き続き

課題

「響く」「実る」「佳境」

事前投句

平成11年8月1日～9月10日(締切)

投句方法

【欠席投句拝辞】

便箋に一題二句宛三題連記(席題なし)

(住所・氏名・電話番号 お忘れなく!!)

会費

無料

賞

三才・五客 呈賞

選者投句先

前項と同じです。

以上

柳都全国川柳大会

長谷川冬樹 エッセー集「男結び」出版祝賀

○期日／平成11年7月11日(日)10時～17時

○会場／新津市本町4・割烹「新森」大ホール

○会費／3000円(「男結び」贈呈・軽食)

祝辞／(社)全日本川柳協会会長 仲川たけし氏

宿題 各題2句

鳴る音

新潟・大野風太郎選

劇場

札幌・進藤 一車選

だるま

宮城・雲石 隆子選

隣

長野・石田 一郎選

包む

東京・松井 文子選

和食

岡山・西原 知里選

風貌

大阪・橘高 薫風選

特別宿題

男結び

主幹・大野 風柳選

川柳トーク

『ディスカバー川柳』(コーディネーター)長谷川冬樹

(パネリスト) 斎藤俊輔・橘高薫風・大野風柳

○席題／1題当日出題 2句

※大会終了後同会場で祝賀パーティーを開催します。(6000円)

※前夜祭を7月10日(土)18時から「ホテル美好」で。(予約制)

※宿泊ご希望の方は10月11日を明記して6月10日迄お申込みを。

二賞選考改定について

既発表通り、今年度から二賞の選考規定を
変更いたします。

左記の大筋の規定にてご協力ご支援のほど
お願いします。

詳細はその都度お知らせ致します。

① 8月15日締切り

路郎賞 川柳塔欄の入選句から8句

川柳塔賞 水煙抄欄の入選句から8句

毎年度9月号から翌年8月号までの一

年間の入選句を対象とする。

8月号に刷込みの用紙を使用の上、本

社宛郵送すること。

川柳塔、水煙抄各欄に入選外の句のあ

るとき、既発表の句に類する問題句のあ

るときは賞から外される。

② 8月15日—8月20日

第一次選

第一次選は、主幹・理事長・副主幹・

副理事長・編集長・世話役担当委員（高

須賀金太）の七名で行い、各賞20篇ずつ

選出し、第二次選者へ郵送する。

③ 8月28日まで

第二次選

第二次選者は折り返し、路郎賞、川柳

塔賞の各選考結果を本社宛通知する。

選考には順位をつけ、第一席、第二席

第三席、第四席、第五席の五篇の番号を

返信用ハガキ（予め本社で用意する）に

記入のこと。

④ 第二次選者

本社関係 第一次選者と同じ

地方関係

みちのく 横浜（関東） 富山（北陸）

京都 奈良 和歌山(2) 大阪(5)

兵庫(2) 岡山 広島 鳥取(3) 島根(2)

香川 愛媛(四国) 唐津 熊本

地方関係の選考メンバーは、年度毎に

交代制をとり、均衡をはかることにする

⑤ 川柳塔欄・水煙抄欄に六ヶ月以上出句した

人のみ応募資格を認める。

川柳塔社

天
踏切りの向うで春の顔を並ぶ

軸

初節句カブトの横のいい笑顔

兼題「扇子」

門谷 たず子 選

白扇を置いてめでたい膝を折る
泪をそっと隠す扇子はもう持たず
騙されたふりして見せる舞扇
セールの汗をなだめている扇子
不利になると扇子バタバタさせる父
言い訳は決してしない緋の扇子
扇子からハラリと落ちたのは昔
白檀の扇子やがて私も姑になる
間をつなぐ扇子の風も所在なげ
思案中扇子閉じたり開いたり
母の訃へ涙かくした舞扇
聞く耳を持たぬ扇子をバタつかせ
長老の羽生の扇子にある余裕
扇子からうちわにリストラの匂い
張り扇で打たれてみたいあなたなら
芳香の扇子の風がななめから
私の風が欲しくて持つ扇子
舞扇たたみこんでる女の炎
白扇の忍の一字は亡父の声
好きだとは言えず扇子の風送る
舞扇捨てて悔いない米を研ぐ
応援団頼もし骨太の扇子
美しい和服に似合う京扇子

照子 満津子 俊美代子 かりん 正一 義子 鹿太 澄子 茜 大輪 靖巳 あやめ 計光 森子 房子 いわゑ たもつ 一風 一風 寿美子 周信 希久子 狸村

一風

扇子の要はずれたような母の留守
出離子にでっかい夢を抱く扇子
芸の汗見せぬ華麗な舞扇

凶星指されて忙しくなる扇子

母の扇子は汗と涙の匂いする

口元に扇子をあてる内緒ごと

形勢不利扇子が忙しく動く

むらさきの溜息秘めている扇子

女の香たつぷり撒いている扇子

おきばりやすと贈る扇子に愛をこめ

京なまり添えて土産の舞扇

扇子から人間臭い父の風

佳

亡母の香の残る扇子と夏を越す

無学でも扇の要に居る母で

無心ことわる扇子あけたらたんまり

終の日も女でいたい舞扇

披露宴きれいな嘘を聞く扇子

人

変幻自在扇子も演技する舞台

残り火をあおる扇子は大き目に

地

持つひとが持てば扇子も華になる

天

老春を一さし舞うて置く扇子

軸

兼題「酔う」

前 たもつ 選

今夜だけ少し酔いたい理由がある

照子

洋

浴びる程酔って亡夫に逢いたい日
ありがとうを何度も貰う酔ってはる

酔ってきた僕に添うてる影法師

花を買う少し愚酔いたらし

真直ぐに歩けぬ酔うたなと思う

酔ってもいいですかと女念を押す

約束をさせた女が先に酔い

零困気酔うてさよなら言い出せぬ

無位無冠自腹の酒の酔いごこち

うれしくて酔う日のために酒がある

初孫のそばで嬉しい酒に酔う

ほろ酔いになると泣き出す癖がある

先生が口説いてなさる酔うてはる

酔うて候うで組む友がいてくれる

怖いものなんかあらへん酔うてます

そのうちに時計をみなくなった酔い

眺望の美事さに酔う瀬戸の橋

快勝に酔いしれている虎ファン

近松の人情に酔い仲直り

ふる里に人を酔わせる風があり

俵せに酔うて気付かぬ水たまり

川柳を考えすぎて風呂に酔う

ブランドにすこし酔うてるイヤリング

司馬遼に酔って古本屋に通う

美しい呪文に酔うた落椿

頂点の椅子で自分に酔っている

天皇貴馬はゲートの人に酔う
凡人で祭りの笛にすぐに酔う
勿体ない酔わない薬飲むなんて

アキ

恵子

典子

鹿太

笛生

石舟

勇太

みつ子

千代

弥生

まつお

しげお

哲夫

保子

保州

希久子

澄子

伽羅

金太

たず子

風云児

重人

夕花

洋

楓楽

雅文
瑠美子
度

リストラの無念の酒が酔わせない
ミサイルが飛ぶから酔うておれません
酔っぱらいは嫌いだと言う酔っ払い
上手に酔うて彼に介抱してもらう

佳

六甲おろし歌えば虎も酔うてくる
星条旗の魔力に酔うてはる

気持よく酔わせてくれる小さい店
花の種酔うてるふくに蒔けばよし
来世紀月から地球見て酔おう

人

どんな日も好日にして父は酔う

地

幸せにふたりを酔わす観覧車

天

酔うたふりしてウーロン茶のんでる

軸

まだこんな元気があった二日酔い

兼題「恋」

宮西弥生選

声聞いただけで満足これも恋

好きですと言わない恋が未だつづく

三度目にやつと返事をくれた恋

美しく老いたく花と恋をする

初鯉食べて熟女の恋終る

嫌いではないがほんとの恋でない

告白は恋という字を飲んでから

八十歳いまだ逢いたき人のあり
恋知らぬまんまで終った紙人形

遠野
ダン吉
大輪
英子

周信
ゲン吉
蘭美代子
瑠美子
楓楽

昭子

洋

天笑

みつ子
保子
紫香
しげお
月子
千代
章久
路児
千里

だってでも女の恋の遮断機よ
危ない恋しているらしい火の匂い
ふるりに残した恋の二三つ

カルチャーの死角で恋を嗅いでいる
千代紙の箱に十九の恋ごろこ
珈琲を飲みながら待つ恋もある

好きにだけです恋だとは言えません
口に出さぬ恋がグラスの中で炎え
一人芝居の恋だと気付く夜の冷え

夫とは別に恋する軽い恋
恋のうたその気になって唄ってる
恋多き女で花を絶やさない

出会いから恋の序曲が流れだす
プレゼントだけが淋しく残る恋
よく進む時計だ恋をしたらしい

恋冷めた頃は桜も散っていた
恋の目でわたしを見てるひとがいる
七十で恋の夢みていいですか

恋愛小説たくさん読んで見合いです
恋人のまんま結婚してからも
天も地も燃やしてみたいほどの恋

恋をするときみな優しいになれるんだ
風鈴が今日も人恋う無人駅
風を恋う無縁仏に手を合わす

佳

意地悪も恋もやんが好きやから
なんでやろ好きと言えない恋だから
友達のままが良かった恋もある
踏まないで下さい恋の芽が出そう

千代
楓楽
賢子
恵子
朝子
信子
金太
澄子
萬子
シマ子
伽羅
冬葉
隆盛
梨里
重人
寿美子
天笑
照子
義子
文秋
紫香
大輪
かすみ
一風

富湖
鹿太
東雲
笛生

適温でいつも貴方待ってます

一行詩に私の恋は埋められぬ

恋をするきれいな人でいたいから

素晴らしい恋がしたくて歯を磨く

逢いたくて逢いたくなくて夜明け待つ

兼題「座る」

板尾岳人選

助手席で右や左とやかましい

座らせておけば機嫌のいいお酒

座つたら飲む飲む食べる熟女たち

栓ぬきを座つた途端思い出す

仏さんの前に座ると気が休む

母の座に母が座っている安堵

先輩に座りこちを聞いておく

人は人我が道を行く座りだこ

溜息をつく税務署の固い椅子

座るなり拳固が飛んできたむかし

土壇場で心が座るカタツムリ

座る順へ一言居士が口はさむ

三部経座り直して耐えている

正座しておやつくださいといけさま

父さんの椅子が座れといっている

窓際に座るとききれいな花一輪
座つてもとても牡丹に見えません
ひと言がどつかと座る胃の底に

満寿蔵
夕花
とし子

たず子

文子
とし子
月子
千歩
しげお
いわゑ
アキ
澄子
正雄
房太
勇太
萬太
まつお
かすみ
舞夢
一歩
満州
富湖

父の座がいつかばやけてきた茶の間
胸底に片目のダルマ座らせる

見たくない影が脳裏に来て座る
石より重いメモが座って動かない

母の日は無理やり母を座らせる
まあ座れ話せばきつと解る筈

写経する時だけ正座しています
座りだこ洗えばそこに亡母がいる

新緑へ炎を抱いたまま座る
座らせてからのご意見長すぎる

青い目が正座崩さぬ大広間
遅刻した罰に上座を空けてある

佳 寒い日が続き正座が崩せない
座ぶとんを出すのはもつと後にする

お嬢さんをいただきたいという正座
結界の中には女座れない

花むしろ許せる人を座らせる
人 わたくしの横に私を座らせる

地 座つても立つても敵になる女
天 柿の木の上に少年期が座る

軸 大洋 座る

大洋 座る

大洋 座る

兼題「妻」 橋高薫風選

手乗り文鳥あの頃妻はハイと言う

達子 楓子 睦子 東雲 鹿太 石舟 保子 千秀 英子 楓子 朝子 落児 千里 諷云児 弥生 洋

回り寿司くらいではしゃぐ妻がいる
時どきは妻に屋台へ誘われる

血圧が低いひくいと起きてこず
とても静か妻が出かけてくれたので

貞淑な妻を演じた二三年
今になって おばはん頼りにしてまっせ

妻だけの抱き方があり孫泣かぬ
手入れする割には消えぬ妻の皺

木の芽どき妻は衝動買いをする
消費税とらない店を選ぶ妻

父方も母方も妻みな元氣
日日好日妻の陣地が広くなる

牽制球近頃多くなった妻
妻にだけ僕のジョークは通じない

手拍子のうまさ妻にはかなわない
だんまりの妻には勝てたことがない

神様と妻にはとてもかなわない
覚悟しや耐えるばかりの妻でない

世界一の妻と言われて浮気する
八十やそうな後妻もあるそつな

足どりの軽さを妻に見抜かれる
妻に虚を突かれてつぶす冷や奴

人妻と撮った写真は見て飽きず
土筆が済めばふきの葉を摘んでくる

妻の里義父が岩魚の釣り誘う
縁先で爪切る妻のふくらはぎ

古いふるい妻をめくると炎の鱗
人妻が綺麗に見える寂しい日

五十年添い遂げ欲のない妻で

アキ 紫香 満州 月子 倫子 章久 雅文 石舟 弥生 富湖 大輪 恵子 楓子 諷云児 房子 典子 しげお 勇太 千秀 度 正雄 利昭 森子 周信 笛生

金婚を越えと妻は風になる
恨みつらみ忘れた妻のでまり唄

佳 袖染みたいになくして妻
何時からか妻はおんなを忘れた

香を焚き雨の音さえ亡妻の声
猫の目がやっぱり妻の方を向く

妻の決めたガイドラインは守るべし
人 欠伸する妻には油断できません

地 妻の手の中で団子にされてます
天 最良の縁と易者も言うた妻

軸 貯金帳この妻にしてこの夫
（清記）希久子

北半球で一番美しい夕日を観る会
とき 6月22日（火・夏至）

14時投句締切・15時披露・18時—19時半
19時29分日没の夕陽を観ながら小宴

ところ 日御崎 国民宿舎「眺瀾荘」
会費 40000円（宿泊共85000円）

題と選者（欠席投句拝辞・各題2句）
美しい 未定 抱く 林 荒介

何処 恒松町紅 夏 長谷川博子
弾む 佐々木裕 やがて 尼れいじ

事務局 出雲市松寄下町284 吉岡きみえ

武庫坊 倫子

天笑 鬼遊

睦子 義子

ダン吉

グン吉

ますみ

文秋

文秋

文秋

老地神壇

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

川柳ねやがわ(前月分) 江口

度報

どの部屋も冷えびえしてる妻の留守
来んといへ骨まで冷えるストーカー
冷え切った心を友に救われる
冷える夜にチャルメラ遠く聞く炬燵
十年も若葉マークで走ってる
東奔西走とどのつまりは神頼み
サバンナに生きる弱者はひた走る
黄信号だけは走れる老いの秋
走る健康法も老化を追い越せぬ
ときどきは軽く走ってためす足
妻よもう走るまい子は巣立つたよ
困ったら走って来いと親ごころ
他人の札ばかり数えて今日も無事
銀行のカメラへポーズでもしよう
銀行を裁かぬままにする融資
銀行に恩も怨みもない軍手
流れ矢がきそう身軽に席はずす
災いになって戻った軽い口
お気軽に泊まれと女言うけれど

小路
とし子
ルイ子
朝子
日出子
光子
茜
一途
文秋
恵子
勇太朗
千恵子
吉之助
礫
雅文
仁清
英千子
博泉
波留吉

お茶碗とふとは軽い方がよい
チヨコレート軽い気持ちで上げたのに
朱を足して枯野を軽く春にする
花好きな母腰浮かす梅だより
少し安い石焼きいもが売れている
大ゴミは不況なんぞは知らん顔
徒手空拳ブライド捨ててから強し
面識がないのにニコリ笑われる
夫とは違う匂いになる息子
うなずいてくれた気もする阿弥陀さま
いいことがあつて空気を軽くする
南大阪川柳会(前月分) 吉川
すばる望遠宇宙の果ても把握する
文章の把握漢字がじゃまをする
一から十まで把握出来る斬られ役
情報の把握上手が生き残る
民衆の声把握せず事すむ
子の悩みの把握していた母の海
管長さんのお顔拝した花ぐもり
拝顔をすませクールな顔になる
初場所で陛下に逢えることができ
まだ拝顔したことがない福の神
古寺巡礼心に見えて来た如来
行幸へ小旗を持ってお出迎え
壱阪の寝釈迦のお顔見てこうか
配線一本切れて首都圏間にする
配線をプラス思考に切りかえる
配線をたどり事件を推理する

三千子
かすみ
睦子
庸佑
冬葉
一風
あやめ
亜成
弘一
佳風
度
東雲
道子
幸子
修
叔子
正博
信治
雅文
慶一
楓楽
千里
文秋
章久
たもつ
朝子
哲郎

舶来のカボチャも妻の味になり
ルイビトンのバックだけでは目立たない
野菜不足空輸でレタスまで届き
シャネルで飾る女がサロンパス
舶来に見せかけ横文字が並ぶ
外人のほしがるカメラ外国製
配線が判らず叩けば鳴るラジオ
お子様ランチの旗へ平和の風無色
機が熟す一気に攻める旗を掲げ
茶の間から御無礼ですが両陛下
拝顔をすればなんとなかなる無心
拝顔に来たといふ一升提げてゆく
配線をたどってゆけばネズミの巢
配線のミスで女がショートする
川柳会梨花
公文式点取虫になる勉強
うどん食べつるつる嘘を喋りだす
勉強がすぎて頭が左巻き
顔中マスクあれば端役の女優かな
大安吉日後に続けと酒を注ぐ
魅了するキリリぐつたりあな女優
昨日から続く女とかくれんぼ
バツイチになった女優が色っぽい
まだ仕度出来ない妻にへソ曲げる
母さんの後に続けと鴨の列
続編は寝物語に取っておく
漢方の媚薬続けて子ができた
女優業三羽鳥がひとり逝く

重人
度
萬的
ひさ乃
清水
直子
柳宏子
寿美
庸佑
志華子
柳伸
三男
悟郎
蛙
石花菜
一夫
明かつみ
玲子
睦子
和歌子
螢
完司
栄見
幸子
節子
蟹郎
輪多朗

勉強の鑄型にはまり子がキレル

（働）枝

勉強かゲームか灯だけはつき

美恵子

試写会は足だけだった女優です

（国）悦子

真っ黒な五輪マークが浮いている

忠良

まだ開かぬトイレの前で走ってる

行男

まだ姑に手が届かないちらし寿司

典子

よい事が余り続くと怖くなる

求芽

平凡で愚痴と笑いの続く夫婦

高栄

プロポーズまだうつすらと蒙古斑

ただし

まだつづく渡るに長い丸木橋

（働）枝

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

心のゴミ捨てる袋を探してる

シマ子

誕生日古い遺言書ごみにする

喜美子

暖衣飽食いつまで続くゴミの山

欣史子

フライバイ固くしばったゴミ袋

能子

逆襲かタイオキシンはごみのつけ

香住

あなたにはゴミでも私には宝

あずき

まだ食べれると鴉にゴミを叱られる

弘直

高槻川柳サークル卯の花

川島風云児報

鍵穴に秘めた女のフライバイ

芳子

なあ妻よ僕に謎などあるものか

重人

夢のある謎はどうぞ解かないで

千鶴子

大器の芽育てた母の握りめし

メ女

度胸ない犬がはげしく吠えたてる

白溪子

どーんと俺について来いと頼もしい

稲子

本物の度胸は妻が持っている

八斗蔵

度胸が取り柄女らしさに遠くいる

スミ子

度胸決め今日こそ妻と戦うぞ

波留吉

ひとりだけ反対をする手を挙げる

紫香

いやな世へ梅は度胸でほころびる

晴美

生活のスタイル決めてみださない

ルイ子

短足は短足なりの土踏まず

求芽

自分好みに花のスタイル矯めている

百合子

前向きに生きると決めたたね髪

澄子

都合よい方にしておく勘違い

柳宏子

勘違いしてたと言わぬ頑固です

吉之助

おめでたと勘違いした夏みかん

泰雄

勘違いされる女で隙だらけ

石舟

ぴたりでないから好きなドレス着る

あやめ

いとおしい貴方のルビにしてほしい

満寿蔵

帳尻が合わないままで逮捕され

秀夫

三寒四温朝から機嫌のいい夫

一笛

もしもしと呼ぶから見たら携帯や

治三郎

行間に恋慕の情が埋めである

靖巳

明日見る眼鏡の曇りそつと拭く

和子

この人の心に深い井戸がある

磯

同情はいらない俺の計算器

しげお

もう寒さ来ないでほしい梅の花

風云児

川柳塔みぞくち

雄々報

砂風コンタクトには大敵だ

弘子

孫婦り嵐も去った虚脱感

公美子

古里は平和そのものあらしこす

鈴枝

子の寝息あらしの後の静けさだ

静江

入国の旅券持たずに黄砂来る

和代

春風梅はころばせ去ってゆく

信敬

のり越えた嵐に度胸ついてくる

久子

友の計へ嵐が胸を吹き抜ける

豊枝

新しい予感を運ぶ花嵐

正光

ハリケーン人の幸せ持つてゆく

康女

あらし去り夢の残骸編むだろう

智恵子

風呼ぶ男の胸にある炎

雄々

川柳塔おっぱこ吟社

木村あきら報

帯になどなれぬタスキで恙なし

ひかり

フライドを捨てると足も軽くなる

いさむ

縁結びの神も時ときもの忘れ

治延

粗大ゴミ言われたくない停年後

放任

かろうじて父権を守っている給与

マツエ

例えはの中に自分が見え隠れ

よしみ

佳句地十選（5月号から）

西村 黙 光

へついを尊敬してる火吹き竹

弘一

物あふれ乏しくなった思いやり

（国）英子

余命ぐんぐん安心していてですか

みつこ

催促が出来ず長居をして帰る

恵美子

謝りに来たのに煙草ばかり吸う

しげお

迷うこといっぱいあった頃が花

（欠）千代

正義感だけは誰にも負けはせぬ

保州

捨て切れぬ欲が迷いを深くする

勇太

梅干しも夫もともに塩次第

ふじ子

温暖化変なところの水温む

次男

老鶯はもう鳴きもせず飛びもせず
先頭に立つて分つた敵の数

玉虫色でどっちに付くか考へる

セメントがホテルの棲まぬ川にする

米ビツがだんだん空になる不況

お金には縁ない私出すばかり

体力を付けバーゲンに駆けつける

当てられた事故が取り持つ縁となり

菜の花と鈴の音聞いて春を知る

薬用酒今年もとうとう出番なし

燃え盛る熱をさますか菜種梅雨

田舎味作る皺の手母ゆすり

洗いのたたむ女の個性見え

大地の夢地球が青い俤せだ

縁あつて未だに夫婦しています

岸和田川柳会

長谷川呂万報

うららかな陽にも憤怒の赤不動

興奮が冷めて怒つた空しさよ

氷山が溶ける怒りの形かも

怒るのはよそう血糖値があがる

怒るより撫でて育てた苗に花

呼びつけて怒るつもりが飲みに連れ

星条旗いつも怒ってばかりいる

美女だから怒り忘れるお人好し

十年の付合い掃除機唸ります

寝そべった老犬貫禄の唸り

古美術に唸る値がつく春の展

一度でよい持つて見たいは唸る金

吟笑

はつ恵

かおり

あきら

くに子

文仙

坊太郎

抱楽

寿々女

貞月

正雪

まさる

チカエ

なみ子

輝夫

みつ江

鹿太郎

蛙城

萬的

路子

一齋

ダン吉

狸村

富志子

苑子

美智子

辰郎

手の内を見せぬ女の片笑くば
魅力ある笑くばは神の贈り物

鼻声と笑くばに弱いのは男

かあちゃんのえくばに惚れて五十年

年金暮し持ち家修理重荷です

火遊びの過去が重荷で遠い縁

知事になり重荷を背負うノックさん

子育ての重荷がとれて太り出す

妻の愛少し重荷になってくる

重責の司会果したワンカップ

お互いに重荷にならぬと喜寿傘寿

隣は芝生うちは畑で稼いでる

美女アナを引抜いて稼ぐ視聴率

ノムさんの効果が稼ぐ安芸キャンブ

女房がへそくり貯める共稼ぎ

五七五意欲無くした昼の酒

まだ稼ぐつもりらしいよ厚化粧

川柳後楽吟社

從野

健一報

メダカのいない古里遠くなる

ピカピカにしておく変身願望の鏡

憎むのはよそうみにくい顔になる

咲き誇る庭で疑い深くなる

澄んだ水メダカが泳ぐ夢を見る

母恋いの一句を託す流れ星

どんぐりコロコロ思ふ山を恋しが

反逆をひそかに思う不発弾

捻子巻けばまだ舞う父の古時計

下戸は下戸同士出かける花便り

洋

甚一

松風

盛之

俣子

信博

昭二

さよ子

一弥

白光子

柳宏子

東雲

鱒二

東吉

基

文時

洞庵

道博

草風

幸子

美智子

哲郎

まさお

正秀

拓治

桃風

秋月

きれいな花で無うてよかった手折られず
居酒屋の話半分聞き流す

くされ縁切つて男は船出する

笛吹けど踊らぬボケル鳴り続け

戻り道引き返すには遠すぎる

呆けるの気になることをズバリ言う

賃上げもストも出来ない年金者

花冷えに肩がにがって来る余生

やる気になれば見えだす厚い壁

猫だけが妻と一緒に風邪を引く

一人ひとり揉まれて渡る丸木橋

なみなみと注いだお酒が笑つて

決断を下し一氣にコップ酒

弱虫の反抗涙が先に出る

東大阪川柳同好会

森下

愛論報

ゴキブリを叩いた妻の顔が鬼

極楽と思つ湯船の南無阿弥陀

五臓六腑すしんとひびく父の喝

辞書何回引いてもくどい事はない

くどいほど言うより芯を突く一語

あたたかい眼と眼が出会う山の駅

人情をひとつ捨てて駅に立つ

帰したくなくて駅まで付いて行く

傘寿の駅で鈍行に乗り換える

さいはての駅真つ直ぐに海の風

一杯のうどんに冷えをまぎらせる

人間が主役で地球冷えてい

男の手だんだん冷えて来た別れ

浄美

青銅

博友

邦季

柳五郎

佐加恵

照路

吉則

一夫

金吾

信善

忠成

鯨虎狼

晋吾

朝子

ばつは

たもつ

文秋

弥生

雅文

シマ子

度

萬的

柳宏子

正博

緑

三寒四温冷えた土からふきのとう
核抜きと言えども何かあるはずだ
路地裏の暮らしに風があたたかい
裏木戸でやさしい鬼を待っている
煩惱の裏を断ち切る独り酒

うぶみ川柳会

上田 宣子報

遅く来てもいつもサービス受けている
サービスはわたしの笑顔だちゅうの
真心の笑顔が無二のサービスよ
スクープへの気配ベン先殺気立つ
裕福になれる気配はトンとない
煩惱の数足しながら忌にこもる
融通がきかぬ冷凍庫の嘆き
凍る胸あなれ知っててくれますか
主役にはなれぬ影法師が凍る
凍てた日も漕ぎだす舟に惑いなし
凍てる道ばかりを選ぶ土踏ます
風邪を理由にしばらく籠もることにする
籠の鳥何時か翔ぶ日を夢に見る
愛籠もる土鍋一家でつつき合う
満潮の音に受胎をする気配
主婦業が板に付いたよ良く値切る
床の間のけやき板には芸がある
冷戦の嫁と姑の板挟み
かまぼこの板表札に仮住まい
三角に割れて殺意のガラス板
縦と横合わせた板の夫婦です
慈しむ杉の裂けめに背が凍る

頂留子 東雲 賢子 湖風 愛論
ユリ子 孝男 黙光 鬼桜
あづま 一枝 洋々 正和 ひろこ 天雀 雅女 葉士人 忠良 良雄 多哥由 健一 天人 雄人 静生 也恵

病院に籠もり一冊ものにする

三幸川柳教室

三宅

保州報

宣子

差し引きはゼロでものん気皆達者
動物園の河馬といっしょにする欠伸
二三枚お札抜いても知らぬらし
軒先で昼寝している青い鳥
のん気者へ残りの福が寄ってくる
神様をのん気にさせぬ絵馬の数
鍵穴を抜けて秘密が風に舞う
深窓の扉を開く鍵ひとつ
合鍵も錆びていつしか恋終る
門が時々ぬける口をもつ
ふるさとの温い障子に鍵はない
アメリカは日本の鍵を持っている
飽きもせず日記に憂さを閉じ込める
飽きっぽい手から生まれるゴミの山
善人の仮面に飽きてきた野心
飽きる程食べてはいるが米の飯
飽きる程嘘を聞いている千羽鶴
飽いてきたらエイエイオーと活入れる
少女期の飢えを知ってる雛祭り
年一度男雛に恋をする私
雛壇にピリオド打った武者飾り
雛祭り男無口な顔でいる
懷で温めすぎた無頼びな
五人雛子ロックもジャズも聞き慣れる
差し向い一度させたい内裏雛
雛壇に茶髪も並ぶ時が来る

和子 忍 満洲子 桂香 公子 鉄治 正一 初子 当代 百合子 町子 秀男 三千子 靖子 さち子 正匍 義男 保州 健三郎 かず子 マリ子 めぐみ 登美代 千秀 嘉平 章子

あの人へ出す絵手紙へけし雛
ウエディングドレス夢見て雛飾る
雛壇に飾りたいよなかわい娘
いろいろあるけど日本は平和ひな飾る

城北川柳会

神夏磯典子報

当ても当らなくとも無関係
官僚の何とお札に弱すぎる
札束を見向きもしない仏さま
ガラス張りの政治がいつも不透明
不器用な父はいつでもガラス張り
ひとり居にちぎり絵の雛とどく春
執念の捜査がホシに突き当たる
花は当り散らされても美しい
ずれているのは夫かな私かな
漱石の訪問待ってる新学期
遺言も嫁に頼んだガラス張り
ゆつくりと煩惱一つ陽に当てる
雲間から慈悲の日ざしが背に当る
お人好しガラスのように透きとおる
しあわせの尺度が違う三世代
札束を持つと歩幅が早くなり
堪えた日よ移植の鼓動聞かした
仲人が当たり障りの無いお世辞
小吉でほど良く当るみくじ運
しっかりと貯めた札束入院費
のひらに乗るのはよさう雑魚の意地
三寸の茶の間の雛が母に似て
深夜ふと地球の堪える音を聞く

和代 碧 敏子 春蘭 達子 典子 倫子 道子 義江 史風 千恵子 千歩 トヨ子 とし子 睦子 チサ子 久留美 白峰 一枝 高栄 はじめ 昭子 寿美子 朝子 あい子 求芽

妻ひとり堪えた重さの癌告知
花泥棒どんな顔したお人やら
せつかくの妥協へ割り込む風がある
陰悪な空気に補聴器はすす姑
当てられた図星へ二の矢続かない
修羅いくつ堪えて夫の忌を重ね
罰当り怒鳴った父の目に涙

サークル樟櫟

小林

一夫報

鵜の首の魚吐くたびに増す孤独
おほる月昨日のとけを包みこむ
動き回ってしよせん同心円を出す
どこから来てどこへ行くのだろうわたし
ほうれん草やわらかく誰のための君が代
首ひとつ売りこむ名刺ふところに
紅椿ボトリと落ちてからの闇
わたくしの首から上に難がある
賞罰なしこの首いまも使用中
人間の弱さで揺れる軽い首
ブチブチと家も老化の音がする
さびしいゆびさをみていた

あやめ 順三 千里 政子 だし 志華子 公一

押し花の余韻が夢をつれ戻す
十指みな愛のかたちで弾む手話
針持てばやっぱり女姑に似る
人生もここまで来れば味多し
きつと咲く花を夢見て種をまく
ばつばつと嫁の料理の味になる
三針縫う怪我ですんだと軽く言う
針供養縫うのをやめて縁が切れ
針箱に入れてあるのは診察券
春うらら花もガラスの部屋を出る
茶が酒になる誤診だという話
出て咲けぬ宿命私は水中花
花の風蝶もわたしも脱皮する
空腹の舌に転がる母の味

とみ子 つや子 ヒサ子 かほる すず子 かつ子 美紗子 泰子 房江 富美 芳郎 素水 可住 靖子

川柳塔わかやま吟社

牛尾

緑良報

明日逢う約束などはせぬ桜
努力した汗は明日を恐れない
麻痺の足それでも明日を踏んでやる
僕は蟻明日も同じ列にいる
夕焼け雲明日を信じる老い二人
この一票流れを変える明日がある
当確へはや政治家の顔になる
気取らない人柄が好き町議選
選挙すみ公約消えた有頂天
白い杖いたわりながら行く選挙
当選をすれば仮面を脱ぐ野望
張る乳房一粒種を身に宿す
子孫繁栄種は母なる大地から

いゝゑ 房子 靖已 義子 あすき 雅子 一夫

明日逢う約束などはせぬ桜
努力した汗は明日を恐れない
麻痺の足それでも明日を踏んでやる
僕は蟻明日も同じ列にいる
夕焼け雲明日を信じる老い二人
この一票流れを変える明日がある
当確へはや政治家の顔になる
気取らない人柄が好き町議選
選挙すみ公約消えた有頂天
白い杖いたわりながら行く選挙
当選をすれば仮面を脱ぐ野望
張る乳房一粒種を身に宿す
子孫繁栄種は母なる大地から

富湖 佐代子 寿子 大輪 紀美女 さち子 鉄治 三枝子 富美子 稚代 正博 高夫 克子

竹原川柳会

時伝

一路報

変化球ともかくずっと落ちました
平凡な暮しへ孫の変化球
地下足袋が花見の留守に干してある
美味い水山は静かに笑ってる
辛口の酒と心が通じ合う
梅一輪切なく痛む傷がある

川柳ささやま

酒井

靖子報

恵美 純子 美智子 多美子 末野 八重子

鏡は鏡少しキレイに映してよ
健康がいいね私もヨーグルト
記念写真の真ん中にいるありがとう
つたない本御立派な皆様ありがとう
お互いの交わす感謝に平和呼ぶ
またしても感謝感謝にしてやられ
感謝しきれない宝そつと持ち
ありがとう大きく大きくなりました
噛み締める感謝渚は春である
老いてなお女が匂う鏡掛け

輝子 和重 千寿子 美子 めぐみ 射月芳 良一 裕美 豊太 ふみえ 利治 柳宏子 保子 英子 泰子 三男

淋しさは喧嘩の種のない夫婦
まだ燃える火種を胸に抱いている
母さんの種袋から春がくる
品種改良元の姿が消えてゆく
忘れるとそつと芽を出す徳の種
落ちた場所信じて種は根を下ろす
雑草の種も夢見る赤いバラ
種のないスイカ言いたいことがある
こぼれ種ばくは勉強嫌いです
どの種も大地の温み恋つて
話の種どつさり抱いて逢いに行く
エリート指定席かも絞首台
エリートは式まで死にたい影法師
エリートは方程式の中で生き
どんぐりの中でエリート村八分
エリートが日々削ってゆく生命
エリートと人間性で勝負する

史子 千枝 蘭幸 喜久恵 千年枝 笹舟 美佐雄 品美 笑子 喜美子

生きている鏡に朝のことばかけ
無理をすな鏡が意見してくれる
心の映る鏡が欲しくないですか
喝采を忘れた鏡拭いてます

合わせ鏡うなじはやつと十八歳
母の生き方が鏡で恙無し

気まぐれな私に菜の花まぶしくて
植物園孫が知ってる花もある

手抜きした花それなりに咲いている
ガーデンの花と話して気がなごむ

くちなしの真白き花よ亡母といふ
黄昏をしばし忘れる花の市

押し花にたたむ二十歳の恋ころ
花一輪その空間のやわらかさ

天上天下釈迦すぶぬれの花祭り
にんげん臭い顔をしている向日葵だ

花はお喋り賑やかなのが好きらしい
川柳塔唐津支部

春彼岸手造りおはぎあげようか
刎頸も竹馬も忘れがたき友

馬齢とは失礼なりと馬の言う
一歩ずつ励むボキヤ貧亀の足

裕次郎が化けて出馬の都知事選
運動会部長の息子抜いてゆく

陽光に涙で重い枕干す
電話口応待よくてついほろり

父上が内緒にしている還付金
一服の味忘れ得ぬ万歩計

一枝

夏喜

節夫

貞子

菁居

淑子

規代

年子

房子

栄恵

正宏

力

比呂子

不朽

静風

一路

松濤庵正劍報

實

久仁於

水笑

勝視

虹汀

大ニュース干支などがまわっておれません
新弟子に女が居ない均等法

川柳塔まつえ吟社

恒松

新人は上目遣いで疲れてる
小春日に老人大学新入生

新社員今日は花見の真産を持ち
酒注いで気を遣っている新人

新人が居眠りをする研修会
新人もセクハラだけは知っていた

また一つ地球ふくらむ呱呱の声
地球儀をまわして僕の旅終える

太陽の慈光に自転する地球
地球儀を回して探す現在地

夢でもいい地球一周してみたい
一粒の種が地球へ根を下ろす

影法師不安になると呼びに来る
呼び声でつられて買った海の幸

母を呼ぶ声弾んでる花畑
まだ早いあなたと呼んで眠られぬ

遠くから呼ぶのは明日の風だろう
公園へ兄ちゃん呼びに行つたまま

相性がよかつたはずの夫婦仲
相性が合わず終つた片思い

相性に容赦はしない向かい風
おでん屋でいつも気の合う友がいる

相性は胸襟開く憂さばらし
突つ込みとボケで相性いい夫婦

茶柱はたつが縁談決まらない

四郎

正剣

友子

米子

茂美

きみえ

たけし

きみ子

房子

小鹿

螢

多賀子

静江

静恵

雄々

登美子

邦代

蘭水

桂子

昌枝

秀子

知恵子

太泡

注湖

義良

与根一

午朗

叮紅報

茶柱がやたらに太い宝くじ
茶柱が立つて喜ぶ妻いとし
茶柱が立つた花見に行こうかな
火種抱く頃の茶柱よく立つた
茶漉して茶柱などに縁がない

川柳塔ふくべ

橋本多哥由報

立春の水平線がもりあがる
さらさらと言えない過去に傷がある

四面楚歌明日のぼる陽待つてます
大役をはたす扇を帯に挿す

立春と聞いて大地が動きだす
サラサラと春の小川が唄い出す

立春の声に雀がよくしゃべる
さらさらと流れる川に見る慕情

迂闊にも明日を信じていた仏
立春に梅の花泣くみぞれ降る

品種改良挿木重ねて試作する
紅梅にさらさら落ちる牡丹雪

さらさらと程よく冷えた流しそば
砂丘は魔物さらさら砂の姿変え

年明けも立春もない葬式だ

京都塔の会

松川

杜的報

消費税わたしの後をついてくる
酒部門きつと高額納税者

いつの間か妻にばれてた還付金
消費税還元セールに乗る主婦

おでんコトコトとても優しい顔になる

消費

哲雄 煩悩児 芳枝 叮紅 螢 かつみ つね 宣恵 昭恵 春恵 信子 きみ子 節子 一枝 睦子 恒子 なつ江 多哥由 葉子 克治 百合子 柳宏子 女

大根炊きフーバー厄をふつとばす
ひとり炊くめしにも慣れた赴任先
忌が明けて男ひとりの飯を炊く
ひとりなら一人の御飯炊けばよい
炊き出しの湯気温かいボランティ
こげうまし山の男の炊いた飯
炊きたてのご飯が生きる鯛茶漬
飯盒で炊くと軍歌が出るキャン
柔らかに炊いて命日の亡母に盛る
世渡りの地図迷路にはまり込み
未来図を書き続けよう冥土まで
地図にない道を探して今日も生き
目で合図だけで総てが判る神
図に当たる読みがわたしを振り回す
人生の縮図山あり谷ありき
図に乗ってべらべら喋り恥を掻き
心電図心のうちは明かさな
彼岸明け冬がどうぞと春をよぶ
陽は西にどうぞと淋しき置いてゆく
あなたならどうぞ裏木戸あけてある
本心と裏腹どうぞこゆつくり
一枚きりの座布団どうぞと言われても
高い高い子をかざしてた貴方の背
ぐい呑み並べ昔話をする夜寒
頼られて嬉しつらしの今日終る

ローズ川柳会(前月分) 山崎 君子報

選別の雛にも春の陽はやさし
反抗期抱いて育てた日もあった

満子 紫香 正坊 典子 高栄 福子 高子 飛鳥 求芽 吉之助 諷云児 英一 巨詩 欣之 白溪子 芳子 宏子 睦子 庸佑 杜的 武庫坊 美穂

一ダース育てた伯母の心意気
流し雛ゆらゆら亡母の港まで
そこここに匂う釘煮で春を知る
あどけなき昔を雛と語り合う
生きてゆく厳しさ思ふ戻り寒
子育ての悩みもあった若かった
過去棄てた女が祈る流し雛
雛壇に旅のこけしも入れてあげ
島育ち都会の風にのりきれず
人間賛歌老いには老いの知恵育て
白酒も供えて一人のひな祭り
両親に夢を見させて子は育つ

南大阪川柳会

吉川

寿美報

藍 哲子 トミエ 貴代子 澄子 いわゑ 武庫坊 年代 君子 義子 笑女 雅子

インターネット命うりかいする悲運
バブルはじけてとことん落ちて行く悲運
老犬の悲運はつながれたままで死ぬ
昭和史の同じ悲運を持つ世代
引き出しに鍵かけてから他人めき
引き出しから出たいとハーモニカ
即興詩人が幾つも持つてる小引き出し
引き出しに宝を詰めた少年期
修業十年積んでようやく知る秘伝
秘伝などないがダンゴがよく売れる
エプロンの下にかくしてある秘伝
ここからは秘伝とカメラ断られ
慢心の秘伝が今を読み切れず
千円で一山当てる気の馬券

千里 萬的 信治 たもつ 重人 ばっは 寿美 ひさ乃 慶一 文秋 度 正博 柳宏子 哲郎 道子

川柳塔鹿野みか月

土橋

螢報

やっとこさ一山越えた決算期
東京サ行くべ一山当てるべカ
出稼ぎで一山当てる子の笑顔
お父さんの成果を一夜千にする
朝市で上手に干物買わされる
さめてゆく愛へ干物になるころ
目刺し焼いて一人の昼にしています
大の字になつて干物になつてみる
楽なんてなかった父の癌告知
子の机やがて引出しから狼煙
一山の風紋変える波の音
二匹目のドジョウ狙つて眠られず
一山を越えたら少しだけ明り
退院して来たらリストラされました
一山を越えたら苦の山がつづき

久峰 柳伸 東雲 幸子 庸佑 朝子 太郎 直子 志華子 雅文 章久 澄子 ダン吉 頂留子 久子

節子 汲香 武子 弘子 くに子 みさ子 実満 幸枝 野草 富久江 初子 智恵子

わくわくと天地無用の荷をあける
 温い過去いろりを囲み餅焼いた
 自分の天地に天があり妻があり
 腹減った猫にしたわれ囲まれる
 天神地祇だれも原爆大嫌いな
 方舟に乗って天地を創りだす
 天地人詠みも読んだり選んだり
 天地をひっくり返し股のぞき
 天と地がひっくり返る事ばかり
 新天地でも胡坐はかけぬ春辞令
 提灯に吊り鐘天地ほど違つ
 胸すこし開けて余罪を捨てている
 けもの達ばかり餌づけをして聞つ
 草笛を吹いて対話にかけている
 チロリン村の草分けをしたお爺さん
 草取つて今日も静かに黄昏れる
 幸せを探す草刈り鎌を研ぐ

川柳大阪

坊農 柳弘報

かつ乃 久枝 保子 孔美子 喜与志 小鹿 きみゑ 公子 和子 きみ子 隆風 睦子 諷人 明美 はるお 八重子 螢

法犯す大臣辞めなあきまへん
 嘘泣きにはまった男泣いている
 世直しやいっちゃ思いきり暴れたろ
 本当の涙を知っている上司
 喪服ぬいで座ると涙どつと出る
 学級に暴れて目立つのが一人
 成功の陰の涙がいておしい
 気配から悪女になれぬ茶碗蒸し
 二十五時帰る気配もないグラス
 暴れたた虎が朝には猫となり
 熱いお茶一歩後退二歩前進
 世紀末地球が暴れ出す異変
 沖繩の涙にあぐらかいている
 君が代は校長一人で守られず
 暴れん坊だった記憶の傷痕だ
 若者よ泣けば花散る胸をはれ
 母騙す涙と母は知っている
 忠告を素直に受けている涙
 春がもつそこまで来てる椿落つ
 齒の衣を外し仏の顔になる

川柳塔なら

坊農

柳弘報

川童 青道 敏 比呂志 一風 雅巢 柳昌 希久志 まつお 鉄心 洛醉 一步 ダン吉 三十四 金太 すがお 柳宏子 笑風 重人 柳弘 柳弘 幸代 孝子 志華子 悟郎 李世恵

我慢する手段数える大家族
 親友といえど恋までゆずれない
 折角の手立てに裏目の不況風
 親友なればこそこの忠告身に沁みる
 千式百四拾八回目の水を取る
 脳死移植未来を開く一里塚
 元夫婦味わい深い友となる
 人情がからむと狂い出す手立て
 親友の見舞い毒舌持つてゆく
 親友であるから反対してくれる
 一つだけ残る手立てに金が要る
 逢えるまで逢える手立てを考へる
 それなりに開く個性の息づかい
 高齢化手立てが見えぬ世紀末
 櫛山へ錦を飾る旗がない
 日の丸の旗に生涯持つ疼き
 つまなした石に手立てを教えられ
 爺ちゃん旗をたたんだ尊厳死
 歴代の涙見えた優勝旗
 駅頭で日の丸振つて泣いたひと
 汗かかぬ人が後ろで旗を振る
 再就職のボタン親友一人減る
 裏の手を使えばもうい鬼の首

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

高栄 春蘭 雅巢 美和子 天狗 良一 真理子 昇 とし子 茂雄 さと美 ますみ 道子 絹子 常念 洋子 和夫 秋雄 直子 あやめ 眞生夫 睦朗 美千子 隆盛 朝子 弥生 一風

悲喜交々入試合格掲示板

にんげんのドラマ見ている掲示板

掲示板はまだ残照の雪を抱く

赤銅の肌に塩吹く炎天下

うす塩をふろう過保護にならぬよう

母さんのおにぎり旨い塩加減

友の葬清めの塩などは撒かぬ

地図を頼りに昔歩いた塩の道

返り咲く日まで残しておく笑顔

清い小川を返してくれというメダカ

一応は返し大口借りる腹

バレットで牡丹の彩になやんでる

牡丹散る往生ぎわを心得て

一本で充分に魅了する牡丹

主無き魔家に牡丹凜然と

おおらかに寺の一隅白牡丹

五十余年敗戦知らず咲く牡丹

蝶蝶をしばし虜にする牡丹

点火したら燃え上がるジェラシー

花の余生へ割り込んでくるジェラシー

満帆へ嫉妬の風の矢すりすぎ

愛してる故にジェラシー一二三

川柳塔打吹

米田 幸子報

ずかずかと猫も天下の居場所とる

だんご鼻つまんでみてもだんご鼻

宴会を粋な踊りで盛り上げる

結局は窓際の席あてがわれ

あてがった貝殻海の話する

柳宏子

年人

元紀

勝美

森子

たもつ

シマ子

三男

とみを

度

柳伸

東雲

夕花

千里

弘一

春蘭

信博

剛治

欣之

扶美代

洋弘

柳弘

逸子

節子

京子

玲坊

芳光

粹がつているけど靴は汚れてる

ボチボチと余生あてがう棒さがす

世の習いおんな一人をあてがわれ

取引の裏に女をあてがわれ

粹の意味わからぬままに五七五

自画像を粹に書きすぎ敵が増え

ずかずかと風呂敷ひろげラッパ吹く

鼻つまみされたやんちゃが大出世

根回しをしてつまんどく後ろ盾

ピンセットの先でつまんだ受精卵

とつりやんせ悪魔が袖のはしつまむ

悲しみへずかずか入るリポーター

悪友がずかずか知恵を売りにくる

わたくしの胸にずかずか君が棲み

川柳も菓子をつまめば浮かび出る

金もなく力もないが粋な彼

亡夫だけが神につままれ逝つたきり

お姉さんずかずか来てはかきまわす

辛口の酒をあてがいが通じ合う

傷口にずかずか入る恋仇

粹だった老母は米寿の顔になり

老骨の粹な計らいそつがない

すつきりと髭を剃つたらしい男

知事の椅子あてがう票を持っている

あてがった額でおしゃれができますか

尼崎尾浜川柳会

田辺 鹿太報

一日のスタート靴は元氣だが

温かい仲間で脱出など出来ぬ

よしえ

和歌子

勝見

一枝

雄々

かつみ

孝恵

玲子

螢

一夫

セツ子

睦子

一京

貴恵

順子

康子

松盛

多哥由

たけの

玲泉

喬水

楨元

博丈

幸子

鹿太報

哲嗣

江美

スタートで転び芽が出ぬ半世紀

秒針がすべっているよ掛時計

胎動はスタートまでの足慣らし

人生のスタートドレスに映える艶

キーボードから脱出せまる花吹雪

寺に寄付してから寿命考える

一隅を照らす灯になることは

春の芽に負けず私も湧いてくる

広辞苑見れば句想の泉湧く

スタートへ肘が邪魔する徒歩競技

沖縄が勝つてウエーブ湧きあがる

再職のスタートは腰弁当て

明日咲く夢ふくらますランドセル

脱出に十月十日の夢を抱く

期待と不安かかえきれない始発駅

スタートに並ぶランナー迷いなし

アイデアがつきつぎ湧いて来る若さ

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

踏まれてもタンポポけなげに咲いている

人妻ときのう別れた花曇り

花は散り青葉生き生き鯉のぼり

たんぼと昔話がたしくなる

自分史のページに花の咲く出会

ひそひそと人事異動が漏れる春

大根の花の白にもある主張

さくらさくらラストダンスは風に舞う

軽やかなステップこころ明かさない

求愛のダンス丹頂の春返し

まさ

一閑

鹿太

モトコ

亀子

イサミ

幸子

百合子

勇次郎

向西

弘治

夢之助

正治

満寿蔵

澄子

十四郎

紫香

トミエ

しげお

哲嗣

正坊

涼子

メ女

嘉代子

諷云児

澄子

代

花吹雪ラストダンスを見る如し

隠し味少しジョークを混ぜておく

自画像に白の混じりが増えてくる

善悪を混ぜ凡人として生きる

混ぜものなしわたしの彩を見てもらう

原色に白やわらかく混ざり合う

虚勢も少し混ぜて余生のベダル踏む

あなた色わたしに混ざり澄んでくる

出会いから別れへ全一景の幕

峠みちメジロと出会いなごむ足

あの出会い二人とも年とりました

吊り橋で出会ったような恋でした

幸不幸分ける出会いになる事も

運命の出会いがわたしを変えさせた

躓いて出会うた石にもあるえにし

うつ向いて歩けば雑草との出会い

横向く子後ろ向く子が入学す

小心な犬もわたしもじきに吠え

長生きをして他人様の計報きく

国境を苦もなく越える渡り鳥

はまゆう川柳会

中後 清史報

終章は静かに潮が引くように

尻込みを口八丁が乗せに来る

傷ついた心をいやす趣味がある

潮風を味方につける一夜干し

趣味一つ持たず働き粗大ゴミ

混浴をいざ土壇場で後すさり

人生の余白を満たす趣味一つ

いわゑ

周 信

松 煙

武庫坊

みつ子

能 子

比ろ志

文

絹 子

義 子

ルイ子

てる

キク子

江 美

たず子

富喜子

春 蘭

石 舟

房 子

鹿 太

おねだりへ孫も潮時心得る

趣味のない男支える酒がある

心にもない尻込みをして見せる

手に取れば値札の0の読み違い

趣味の輪が老後の暮らし元気づけ

流派にはこだわらないで趣味の花

尻込みの振り見せ野望たざらせる

潮知らず他国のゴミを乗せてくる

潮干狩り袋の中はうに一個

趣味通じ堅く結んだ紅の糸

ひき潮に声かけ老後のりをつむ

尻込みも切羽詰まれば受けて出る

華燭いま明日への潮が満ちて来る

はたる川柳同好会

田辺正三郎報

同じとこばかり掃いてる物想い

うっかりと嘘にはまった四月馬鹿

私は嘘ついたことありません

逝く人に大きな嘘をつきとおし

カラ出張訪問先の誤字ではれ

嘘言うと分かっていても聞く女房

嘘ばれて泣く子詫びる子居直る子

軽い嘘引つ込みつかぬ四月馬鹿

真面目さが役に立ちましたまの嘘

嘘すこしまぜると活動きたす

停年後妻から学ぶ処世術

晩学に社会科だけは良く出来る

学ぶのがとても楽しいメダカの子

夏空に神秘を学ぶ星座群

すみれ

修 也

国 彰

利ぼん

公 治

平和

恵美子

華 水

サト美

雄 造

さだ代

生米子

清 史

雪 子

馬 洗

博 史

敞 子

祥 風

善 守

正三郎

勝

見 清

千里志

吉太郎

保 子

桂 子

竹 二

手抜きするツボも学んだ煙草の輪

レトロブーム母の学んだ知恵を借り

学ぶうち未来の暮し怖くなる

勇ましい声が俄かに多数決

声を出して言ったら愛が毀れそう

女房のおっしゃる事は天の声

声出した這った立ったと親のバカ

うわすった声からそれと知る危急

長唄の艶は昔を物語る

うぐいすの声猫八にほど遠い

負けそうな方が大声あげている

横浜あおば川柳会

菱田

満秋報

すんなりと無職書くまで小半年

優しくてきれいな眼にもうそがある

今日だけは無垢を装う綿帽子

監督の苦悩しみる野球帽

ブライドに触れないようにおむつ替え

うちの子に限ってと道誤らせ

ベレー帽僕をピカソにさせました

ブライドを忘れてからの好々爺

二人して描いた老後夢と消え

職安にブライド捨ててる箱がある

張り込みのねばりへ帽子深くなる

病歴を語り合ってる待ち時間

因習を棄てるチャンスが嫁が待つ

人事課の噂におれの名も上がり

客人に出前の寿司がまだ来ない

ビルラッシュ睨む老舗の鬼瓦

ただし

昭 子

まみ子

直 次

螢 柳

正 安

よしろう

久 子

セツ子

柳 童

肋 骨

雅 子

かず枝

絹 子

笑 子

省 子

純 子

良 子

達 也

のぶ子

句多留

八重子

和 可

ふ み

広 和

サト子

あかり

待つことに慣らされ長くなるつらら
ブライドも一緒に脱いで露天風呂
ペンダコの固きワープロ寄せつけず
泳力へ帽子の線が増えてゆく
民族の誇り国境譲れない

まさかとも思われている棺の中
雪解けを待たず無念の登山帽
外来を救急患者に先越され
断つた人がまさかの二人連れ

ブライドを外せばドミノ倒れそう

早朝の電話が友の計報とは
ブライドも梱包されて行く左遷

倉吉川柳会

松本よしえ報

伝統の祭り二世へ引き継がれ
不況でも祭りの夢の灯は消せぬ
発つ前に身体検査して貰う
花見から帰りリストラ辞令見る
イベントの祭りへ雨が降り止まぬ
一寸先は闇とわかっていても発つ
城山の花見の頃に恋をした
繚乱の花よりだんご三兄弟
発つ仕草ばかり見せるいらぬ客
発つ孫に親にないしょの小遣いを
知恵の輪で人を集める村まつり
錦着て帰るつもりをの駅を発つ
飲み会で先発隊がくも隠れ
お花見が済んで淋しく出発す
精一はい咲いて下さい明日は雨

道子 街湖 徳三 充子 早智 満秋 潮華 政勝 鈴木 裕美 裕峰 ただお 小生 菊枝 陸子 喬水 雄々 季芳 賀寿恵 十三男 久子 玲子 節子 一夫 和歌 秋草

発たせたい止めたい母のふた心
爺さまと花見に行ったおばあさん
テレビから絶景はめっている花見
一人旅ホームの桜に見送られ
輝いて女神輿が町を練る
発つ前に腹痛おこし中止する
過疎の村選挙の時だけにぎにぎし
花の下真座一枚の小宇宙
披露宴二人が発つてまた騒ぐ
いつからか清き一票死語になる
鬱病にとっても良く効く花見酒
祭りとは縁が切れない寄附集め
ピーツと嘆いて霊柩車が發つた
村祭りみこしかつぐ子借りて来る
出陣の光秀の目が光り出す

川柳ねやがわ

江口

喜美子 喜美子 康子 紀美子 喜美子 民枝 ちよ子 和枝 智子 ゆり子 完司 かつみ 石花菜 悠子 次男 度報 英千子 洋 度 日出国 博泉 文秋 とし子 睦子 時弘 茜 光子

ドクターの自信に命預けます
足腰に自信無いのが口達者
自信家の息子に一本釘をさす
自信過剰のパラにもあろう泣きどころ
自信などないけど老母を見る覚悟
ひとつずつハードル越えてゆく自信
自信などないけど尽しますあな
控えぬ言葉に自信忍ばせる
優秀をつけぬジョギングだから好き
私流のジョギングと血糖値
ジョギングにもう難念は去っていた
母子手帳受けてジョギングやめました
コーヒーに誘われて聞く愚痴の数
雪解けに俺も水車も活気つく
散髪屋腹の立つ日はしゃべらない
海に出るまでの支流は語るまい
老いてもまだおだてられると踊り出す

岩美川柳会

石谷美恵子報

高栄 小路 吉之助 恵子 ルイ子 朝子 庸佑 勇太郎 一笑 冬葉 亜成 かずみ あやめ 波留吉 重三 弘一 一風 単車 大漁 季芳 是るお 圭一郎 きみ子 雅女 一京

名薬も欲が絡めば毒になる

煩惱を超越したら平家蟹

考古学化石の私語を盗み聞く

化石にはならぬプラスチックの骨

蔵の中化石が語る裏ばなし

反面は涙にもういピエロです

強情な反面すぐに泣く脆さ

反面は鬼子母神にもなるわたし

鏡には今日を輝く顔がある

何もかも忘れて今日は花の下

勝気だが反面情にもうい妻

語り部を化石などにはさせられぬ

富柳会

森子報

池

人生のゲーム終りに勝てばよい

絡み合う絆春風消してゆく

添え状は秘密の内に破られる

いつまでもピアノでいたい大和撫子

七彩の風を熨している熟女

沈黙が右脳左脳を泳いでる

青汁を飲んだ顔だけ撮らないで

古里の母の消息のせて風

春の戯画こころの涯を覗かれる

秘書室の差し金らしい風あたり

ゲームとは知らずに止める痴話喧嘩

ゲームですそんなに肩を張らないで

シックレットを包んで揺れる赤い花

風光り窓に生活の彩溢る

ひたすらに噛んだら味が出る男

孝男

蟹郎

静生

和歌子

睦子

忠良

芳江

一瑤

公乃

節子

裕子

美恵子

美恵子

治恵

文子

和歌子

ひろこ

アキ

登子

東雲

信博

勇太

秋雄

三和子

幹夫

信子

春蘭

欣之

赴任地へ春一番の吹いた日に

秘密の箱ときどき酸素入れかえる

春の奴俺を置いてけぼりにする

春風に誘われ女旅に出る

風向きが今日はよろしい社長席

自叙伝にさらけ出そうか思案中

追い風が吹くまで待っている余裕

暗い画廊で匂い袋とすれ違っ

ひな人形亡母の匂いが残ってる

人生のゲームに負けた男の譜

古い二人ゲームセンターで迷い子に

風向きが変って句読点を打つ

時々抱いてやりたい影法師

本心がびびいて氷点が解ける

このゲーム涙を見せた妻の勝ち

はびきの市民柳会

安芸田泰子報

いい趣味と言われるほどは楽でなし

暖かさ行きつ戻りつ定まらず

先人の工夫が光る千枚田

三寒四温春じらされて千鳥足

ちぎれ雲風の心を読みかねる

まん中の団子がいつも怒られる

結局は好きと言えないまま別れ

近隣の人情を知る帰路の靴

握った手汗ばんで来る通り抜け

通り抜け桜を守る人の汗

大阪の桜はやっぱり通り抜け

何故見ない母なる海のエネルギー

夕子

冬虹

たかし

けい子

尽呂久

和子

義清

美代子

昭水

紅紫朗

勇

花梢

夕花

森子

宏

辰子

昭平

絢子

昇

一壺

ダン吉

志洋

吐来

晋

重人

敏

光宏

無尽蔵ですか地球のエネルギー

震度七地球の見せるエネルギー

エネルギー不足してます黒い星

エネルギー使い果たして五月病

激流に歓声呼び込む竿さばき

赤とんぼ待ち続けてる竿の先

手応えはクジラが釣れたかも知れん

手話覚え喧嘩も手話でやってます

啓蟄に汚職の虫が動き出す

ブライドを捨てた父さんよく動く

勝負気儘に動き出すのが焼跡派

動く物みんな壊して子は育つ

楽させてあげたい母がよく動く

心地よい椅子に嵌って動けない

水面下でとうに動いていた人事

監督にひらめくものがあつて動く

クローバー咲いて私に風動く

誉め言葉上手にボクを動かせる

豊中もくせい川柳会

田中

出世したらしい煙草もやめたとか

煮凝りが好きで出世に遠くいる

井戸を出た蛙に世間広すぎる

女房の広い心に甘えてる

出世など考えないで撃ぶらう

出世には遠く咲いてる月見草

蛸焼きの蛸本性を出したまま

本性は口が耳まで裂けていた

桂子

猿沓

利武

かつみ

満寿蔵

りつえ

美代子

美喜

俊男

敦子

専平

たけし

聡

四三郎

洞庵

庸佑

みつこ

扶美代

正坊報

求芽

正坊

柳宏子

博史

露児

周信

紫香

寿美子

一笛

窮するといふ本性があらわれる
苦境に立ち本性あらわにした女
本性を知っているで慌てない
本性は亥年生れのむこう見ず
一本気本性で書く辞表なり
口よりも態度示せと諭される
ママにだけ分かる赤児の意思表示
愛情を示すと訝える猫の鈴
げんこつで示してくれた男道
せせらぎも春のよこさび口さむ
広い趣味歩き家事は人まかせ
塾帰りの子ら駆けてゆく月おぼろ
土筆伸び日の丸談義果てしなし
冷え込みが続き長持ちする桜
矢印のそれから遠い春の山
夫婦仲バランス取れて日が楽し

かわはら川柳会

上田

俊路報

年の功面も上手に使い分け
押し売りに面と向かえば断われず
面倒見よいおじさんで人気者
面倒な事起きること妻出番
うす闇に翁の面の薪能
ながかった仮面素顔がもどらない
雪道でスピードゆるむ出勤時
孫の顔見れば財布の紐ゆるむ
律儀者申告終えてはほゆるむ
人生は張りつめるのさじ加減
気のゆるみ遠くでしめる母のねじ

肋骨 吉太郎 重人 博史 慶子 庸佑 正三郎 ただし しげお 女 知香子 きく子 英子 杜的 悟郎

川柳クラブわたの花

吉村

一風報

振興券ぐらいて財布ゆるめない
おかえしを目当ての子からプレゼント
名木の桜を夫が追うカメラ
箸やすめ春の香りの若こぼろ
全身で笑いたくなる花の下
太陽の香りいっぱい子の伴走
春愁の葉を食べつくすくら餅
剣が峰超えた手立ては父の汗
人の欲あれもこれとときがない
とりあえずこの場を忘れたことに
あの女を桜便りで誘い出す
梯子酒夜風を連れて戸をたたく
夜桜の雨はふたりを深くする
数十羽誘って鶴の北帰行
さくらさくら私に元氣くれる花
定年のさくらさくらと万歩計
半分は自棄で踊っている花見
磯の香が一足早く春を告げ
席ゆずり喜ぶ人とおこる人
返答に困ってしまふ孫の問い
不揃いのコップで暮らす老いふたり
もの言わず過ごせる日々の多くなり
口笛を吹いて小鳥と対話する
うれしいね枯木にさくら振興券
葉ざくらになつて誰もが見むかない
咲いてはめ散つてもはめているさくら
花の咲くまでを愉しむさくらたち

俊路 ミツ子 道子 君江 春子 一風 幸枝 隆盛 寿代 信子 友甫 朝子 一道 ますみ トシエ まさと いつみ 春江 知佐子 美代子 民子 明 八寿子 宏 剛治 鬼遊

川柳岩出

小倉 アサ報

本心に怒りたいのが外にいる
浮かれたい時は否定をしかかる
浮かれすぎ心の鍵も全開に
肩書きに浮かれエリート羽目はすず
美しい嘘なげ合つて外は春
席外し酔いさましてる下戸の宴
春来れば人の心も浮かれてる
猫までも外に出たがる木の芽どき
宇宙から見れば肩身の広さなど
これからの芽へ支え合う掌が温い
外面を張つての集い疲れます
あれも旅これも旅だという自覚

川柳藤井寺

高田美代子報

先輩と鉢合せした上司宅
先輩の叱咤挫折に灯がともる
先輩といわれてもただ古いだけ
先輩に釘をさされて寝つかれず
先輩のしごきで今日がある自分
先輩を肴にしてる縄のれん
先輩を踏み台にした出世魚
お悔みはうやむやのまま用が足り
うやむやになつてしまった片思い
割り勘がうやむやになる三次会
うやむやを嫌つて輪から外される
うやむやを溜めてどつぷり霧の中
クレオパトラも小町もわたしにはとても

愛子 悦男 保子 良一 春子 正義 正直 英子 和子 精子 重徳 アサ 志洋 大八 昌子 敦子 史郎 鐘造 六点 昭利 武 かつみ アキ 美代子

謙遜がととてもとの繰返し

この年でとても言えない夢を見る

男にはとても見えない美女踊る

女とはとても思えぬダンブカー

とても好きとても嫌いと愛してる

空気までとても重い義理の席

これ以上はともといつてからの酒

とても好きとても好きと追いまわす

とてもいい法話だったと目をさます

火の言葉今ではとても掴めない

花冷えにととても脱げない冬衣

正常よと笑顔がとてもいいナース

とても上手に人を励ますチューリップ

一本でとても不安なゆりの花

つばみ雷もつすく春と唄い出す

翠洋会

兎玉

北の旅迎えてくれた鶴の舞い

さくら散る欠伸している暇がない

閑古鳥景気回復折るのみ

待ち合わせ一番好きな服で行く

先頭を信じ海山越える鳥

千鳥足酔うていないと言われ

文鳥に心の中をのぞかれる

花好きの老母が遺した花の種

医療ミス鴉が群舞する恐怖

好きやけど財布は別にしています

不況風新鋭機械欠伸する

しまなみの騒音文句ある千鳥

春蘭

正一

愛子

花梢

重人

勇太

ゆき

宗一

和樹

終一

葉

琢玉

扶美代

瑠美子

悦子

蛙報

絹子

千歩

綾子

舞夢

照子

宣司

真砂

志華子

恭昌

義

東雲

さと美

仕事好きリスク恐れぬ新プラン

騒がしい大阪女にみるハート

甲高い九官鳥に迎えられ

幕切れへ騒いだ事がうそのよう

夫婦また二人になった食器棚

洋画好きそれも字幕がよいと言

美しい人美しくする欠伸

一枚のハガキで好きになった人

北新地人も鳥も減りました

本棚にとでも返せぬ恩がある

人生の騒ぎが止んだ定年後

出たアクビ飛びこんできた白羽の矢

思いきり大欠伸して目をさます

写経する心が足らぬ大欠伸

天国はあくびが止まらないだろう

鳥の巣を見つけた庭師ひと休み

先生になりたいやかましい車

川柳塔みちのく

小寺

減びゆく髪に薬を振り掛ける

気休めに飲んだ薬が効いてくる

下駄はいて昔話がやってくる

家計簿が振興券で息をつく

気休めの世辞で間に合う他人様

女房が才女でなくてよかったな

授業攪乱ノーションに助けられ

不整脈古い時計の捻子を巻く

玉葱はいつも苦手で泣く才女

ひまわりのような才女が輪の中に

久峰

蕉子

春

千梢

澄子

叙子

みつ子

蛙

周信

希久子

靖巳

日の出

伽羅

凡子

楓楽

正雄

鬼遊

花叢報

力誠

敏人

五葉庵

大吾

北歩

隼人

順風

慕情

銀波

ふさる

風向きを読んでうそぶく古狸

爪の色ときどき変えて才女です

日めくりに自己満足酒を酌ぐ

会計はまだ渡さない五ツ玉

落武者の胸に念書がひとつある

ポケットに古い未完の歌がある

散りぎわの男に少し水あげよう

電子レンジ使いこなしている才女

古傷を公開しない玉手箱

堺川柳会

河内

月子報

爪楊枝一本凄武器になる

老人力の凄さを君は知らないか

温室の嘘に真つ赤な花が咲く

どたん場で女の凄いいエネルギー

臓器移植凄いと怖いとも

考え事して螺旋階段すべり落ち

はみ出した気骨が凄く愛される

絡んではライバル意識すぐ燃やし

ここで嘘言わねばならぬ崖つ淵

真正面の嘘のひとつは抱いてやる

人よりも一つ多目の嘘がある

億光年凄距離だとだけ解る

この橋を渡り切らねば子に会えぬ

きっかけはマンガの本が橋渡し

綱渡り上手になって軽い人

堅い人ラスベガスではすって来た

物凄人にてにぎわう五割引き

たった一度母の啖呵は凄かった

花匠

愁女

ツネ

井蛙

黙人

千加子

和香子

花峯

一花

勇太

楓

泰子

りつこ

みつこ

春蘭

アキ

梓

文

森子

扶美代

伽羅

舞夢

日の出

半銭

東雲

金三郎

千代

尼崎川柳大会

と き 7月20日(祝日)
午前11時半開場
ところ 園田学園女子大学
図書館2階

(阪急神戸線塚口駅下車南西徒歩10分)

会 費 2000円(昼食・大会報呈)

課 題 (各題2句・欠席投句拝辞)

活 気 田 中 新 一 選
鏡 井上 あや路 選
揺れる 中 川 一 選
風 河 瀬 芳 子 選
馬 橘 高 薫 風 選
雑 詠 森 田 栄 一 選

出句締切 午後1時

表 彰 尼崎市長賞ほか

懇親宴 3000円

主 催 尼崎川柳会

連絡先 尼崎川柳協会事務局

〒661-0001 尼崎市塚口本町2-26-19

田中 薫方 ☎06-6422-3886

西宮川柳同好会 創立50周年 記念川柳大会

と き 6月27日(日)
正午より受付・締切1時

ところ 西宮市民会館
1階大会議室

阪神西宮駅北出口2分

J R西宮駅南西へ15分

会 費 1000円(記念品・作品集呈)

宿 題 (各題2句・席題なし)

不細工 石 井 冬 魚 選
今 更 奥 田 みつ子 選
夢 中 田 頭 良 子 選
含 む 大 森 一 甲 選
肩 泉 比 呂 史 選
謎 福 島 直 球 選

懇親会 4000円(当日受付)

連絡先 〒662-0023 西宮市
城山12-8 水無瀬富久恵宛

罪のない嘘で夫婦がするゲーム
肝臓に薬をさせない好きな酒
おんなって凄いの宿し生み育て
缶ビール楽な所ですきに飲み
勘違い乱暴をして済みません
勝ち虎にラッパ轟くスタジアム
恰好いい裸体画妻がすぐはずす
綱わたりしながらいつも楽天家
花壇には蘭より楽なスターチス
細胞を培養臓器つくります
嘘うそウソと女うれしい顔である
枯葉いちまい落丁のごと捨てられる

ローズ川柳会

山崎

君子報

五 月
朋 月
つづや
磯 子
柳 宏 子
靖 雄
健 吾
かりん
小 雪
哲 平
昭 子
美 代 子

自分から壁を作って春愁い
始まりはどうあれ戦わなくて
初出勤後ろ姿に母は付つ
はじめとは大分違ってきた話
凜然と春雷耐えた桜散る
前略と書くペン先に思慕つる
初対面角をかくしていたらしい
世界一の壁の厚さを知るイレブン
白壁の美学が生きる酒の町
つち壁が本家の重み継いでいる
ちははの壁飛び出してから嵐
結婚した孫も変りはないかしら
平和だなチャンネルどれも唄ってる

川柳塔きやらぼく

林

荒介報

食へ頃の松露は砂を盛り上げる
一心に彫られて石も仏様

みつ子
哲 子
トミエ
貴代子
まさお
澄 子
いわゑ
武庫坊
年 代
君 子
義 子
笑 女
雅 子
花 子
千 春

ものの芽の命揺さぶる春の雨
更年期日替わりのわが心模様
深追いにわからなくなる抽象画
最善を尽くして神の裁きをまつ
喜寿すぎてからはピンクの彩を着る
切りぬけて嬉しい彩と握手する
倒れかけ補修しながら生きている
焦りかなー山の椿が散りいそぎ
咲く桜散る事も知り美しく
仏敵は日頃のわたしかも知れぬ
今の名は知らず勲章草萌える
川は流れてなき人の声つれてくる
エイエイエイつつましやかに地鎮祭
南無大師行き交う杖はみな仏
俸せな予感で出会う湯のけむり
爽やかな別れに草木染を着る
さざ波と渡った月を見届けた

恵 子
麗 子
ふ み
玲 子
晶 子
富美子
八重子
春 枝
千 代
寿々子
や え
天 雀
スミエ
瑞 枝
てい子
荒 介

柳界展望

新同人紹介

神庭詩郎
雄々・由多香推薦

★5月1日、第10回時の川

柳交歓川柳大会が兵庫県民
会館で一八九名の出席を得
て行われ、兵庫県川柳協会
賞を河内天笑理事長が受賞

▽人事往來△

■4月18日、兵庫県民会館
で行われた「ふあうすと」
70周年記念川柳大会には、
橘高薫風主幹が選者として
河内天笑理事長ほか、同人
多数が参加した。

■4月25日、堺市の多治速
比売神社で開催の堺番傘句
碑まつり・小西幹斉句碑除
幕記念川柳大会に、天笑理
事長ほか同人数が参加。

■4月29日、豊中市のホテ
ル・アイボリーで行われた
番傘みどり川柳会創立35周
年記念川柳大会に薫風主幹

柳宏子相談役他同人が参加

■5月1日、兵庫県民会館
で行われた第10回時の川柳
交歓川柳大会に天笑理事長
はじめ同人数が参加

▽出版△

■橘高薫風主幹が昭和58年
に朝日カルチャーセンター
から発刊した『なにわ川柳・
この一句』が、日新印刷から
復刻された。1000円。

▽雅号変更△

■鶴田哲郎氏(同人・大阪
市)は鶴田遠野に改名。

▼訂正とお詫び▲

■4月号P15(川柳塔)
上段15行目見覚えれば↓目
覚えれば

■P20(川柳塔)下段8行
目疑惑追求↓疑惑追及

■5月号P93(茴香の花)
下段9行目上地登美子↓上
地登美代

▼計報▲

■茂見雅俊氏(同人茂見よ
志子さん夫君・吹田市)は
4月15日、病気のため死去。
享年76歳。

■吉岡美房氏(常任理事・
藤井寺市)は5月7日、病
気のため死去。70歳。5月
9日、道明寺会館の葬儀に
は同人数がお見送りした

NHK会長賞に藤田泰子さん

第五回全日本川柳誌上大会で本社同人の藤田泰子
さんの「自分史の原点にある藁半紙」がNHK会長
賞に輝いた。なお、秀作に同じく藤田泰子さんの「勇
気ある目にはつきりと黒は黒」、同人の安平次弘道
氏の「定年になってB面光りだす」が選ばれた。

オール川柳賞準賞に川上大輪氏

オール川柳賞記念大会'99は、3月27日午後1時か
ら東京・JABビル8階国際会議室で開かれ、各受賞
者を表彰した。本社同人の川上大輪さんが準賞に輝
き、昨年の富湖さんの大賞に続いて夫婦揃っての快
挙となる。佳作に同人の岩本笑子さんが入選。当日
の記念大会に川上大輪氏は特選にも入賞した。

第二回 鳥取県川柳文芸大会

とき 7月4日(日) 午前10時開場

ところ 鳥取共済ビル5F(鳥取駅南口徒歩3分)

題と選者(席題なし・各題2句・出句締切11時半)

やがて 藤原 鬼桜 両 稲村 遊子

鮎 倉益 一瑤 いらいら 石谷美恵子

帆 門脇かずお 裂く 但見石花菜

読む 西口いわゑ カーテン 天根 夢草

会費 2000円(軽食・大会誌呈)

懇親会 2500円(大会終了後同会場にて)

主催 鳥取県川柳作家連盟

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 みちのく	5日(土)午後4時から ダンス・ささやく・にぶい	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ二階「川柳道場」 〒036-8202 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
川 柳 塔 わかやま	13日(日)午後1時から 奥・時計・住む・「根こそぎ」	近鉄カルチャーセンター 2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
川 柳 ねやがわ	20日(日) 正 午 から 代表・コピー・流行・自由吟	寝屋川市立総合センター 4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川 柳 ふうもん 吟 社	27日(日)午後1時から いま一度・バラバラ・手	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
高槻川柳 サークル 卯 の 花	17日(木) 正 午 から 一生・ストレス・危ない・ いらいら・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児
西宮北口 川 柳 会	14日(月)午後1時から 手帳・回収・ゆっくり・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
はびきの 市 民 会 川 柳 会	27日(日)午後1時から 坂・願う・セット・「覚悟」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
東大阪市 川 柳 会 同 好 会	26日(土)午後6時から だんだん・振る・客・ペン	東大阪市立社会教育センター2F 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
富 柳 会	5日(土)午後1時から 欠・少子化・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
ほたる 川 柳 同 好 会	8日(火)午後1時から 頓智・傾く・ソフト	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール蛭池駅西へ150米 〒560-0864 豊中市夕日丘1-7-5 田辺正三郎
岬川柳会	20日(日)午後1時半から 互選「都会」・口・疲れ	岬町淡輪公民館 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
南 大 阪 川 柳 会	23日(水)午後6時から 法案・牧草・ほくろ・没頭	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
もくせい 川 柳 会	21日(月)午後1時から 野菜・凶星・含む・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
八尾市民 川 柳 会	10日(木)午後6時から 螢・括る・菖蒲・ナイフ	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅東へすぐ 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

6 月 各 地 句 会 案 内

(50音順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	4 日(金)午後 1 時から 川・本・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	8 日(火)午後 1 時から うっかり・頑固・自由吟	尼崎市尾浜公民館 阪急武庫之荘南口から 市バス49番尾浜 2 丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江 5-2-47 田辺鹿太
岸 和 田 川 柳 会	19 日(土)午後 1 時半から 売る・演歌・大穴・輝く	市立福祉総合センター 2F 南海線岸和田駅東歩 3 分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
京 都 塔 の 会	23 日(水)午後 1 時から 巻く・服・やたら	ハートピア京都 地下鉄九太町駅南改札東出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
堺川柳会	10 日(木)午後 1 時から きつい(折句)・ 怪しい(共選)・値段	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町 2-16-3 河内天笑
城 北 川 柳 会	19 日(土) 正 午 か ら 違う・濁る・秘・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮 2 号出口徒歩 8 分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
川 柳 会 梨 花	19 日(土)午後 1 時から カーテン・写真・二度・雑詠	鳥取勤労者総合福祉センター 1F会議室 (鳥取駅南) 〒680-0044 鳥取市御弓町40-3宮木方 坂田和歌子
川柳クラブ わたの花	25 日(金)午前 10 時から 味・朝顔・プール	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
川 柳 塔 打 吹	12 日(土)午後 1 時から さらさら・肌・念入り	倉吉市上灘町上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子
川 柳 塔 唐津支部	6 日(日)午後 1 時半から 雲・許す・敵・雑詠	唐津市栄町公民館 〒847-0082 唐津市和多田天満町1-2-13 仁部四郎
川 柳 塔 な ら	3 日(木)午後 2 時から 切手・鳥・笑う	船橋フロムワン(船橋商店街内) 近鉄奈良駅西・JR奈良駅北歩10分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
川 柳 塔 ふ く べ	26 日(土)午後 1 時から 無傷・助ける・口・ 笛・「じゅんじゅん」	福部村中央公民館 2 F 研修室 〒689-0115 鳥取県岩美郡福部村細川16-3 村上信子
川 柳 塔 ま つ え	12 日(土)午後 1 時半から 王様・得意・まな板	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0859 松江市国屋町381 竹内すみこ
川 柳 塔 みぞくち	28 日(月)午後 8 時から やがて・鳥	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々

編集後記

★久しぶりに邦画を見た。

「時雨の記」の券を戴いたので、急に思い立って友人を誘って見て来た。中里恒子の原作を読んだのは昭和五十三年のことである。

★青のクロス張りに身返しは赤。理性と情熱といった感じの装幀の本を改めて開いてみた。大磯の山沿いの屋敷に佗住居する四十代の寡婦と会社の社長をしている五十代の男とのひそかな恋の物語である。夢を紡いでいる男と、その夢を抱きとる女。心と心のつながりが美しく描かれていて、深い溜息と共に読み終えたことを覚えている。

★映画になると、時代も十年ほどずれて、昭和天皇崩御の頃になっている。大磯が鎌倉になったり、細部は

いろいろ変っているが、大筋は原作に添っている。しかし、渡哲也と吉永小百合の配役で、かなり甘い感じに仕立てられている。本と映像との違いで止むを得ないのであろう。

★前年、本を読んだだけで映画は見えていないが、『失楽園』と対照的のような気がする。両方の映画の製作年などは知らないが……。

★今年は川端康成の生誕百年にあたり、話題になっているが、もう一度『雪国』や、『山の音』など読んでみたら、若い時とは違ったものを感ずるかも知れない。

川柳でも、年を経ってから読むと思いがけない発見をすることがある。

★あじさいが咲き始めると小出智子さんの忌が巡ってくる。今年は三回忌。

★一〇一頁の二賞選考に關する記事に御注意！（み）

「そぞ」の香り
だんだん汚れていく海でも、ふる里の海にはまだ「そぞ」がつく。荒磯にしかつかないものといわれる海草で、香り豊かで独特のぬめりが何とも言えぬおいしさである。今年は大雪のおかげで一月早々、何年ぶりの「そぞ」をいただき、みそ汁にした。

ひとこと

人情も味もまろやかそぞの汁
本当の正月らしい気分させる

物をつけては気の毒なので、坊酒の系譜から分かれた日本酒の原点、諸白^{もろしろ}というもので、平たく言えば「どぶろく」である。

「そぞ」、「そぞ」でまちがいないのか、との御指摘をいただき、早速方ほうへ当たってみる。
古老の方も「そぞ」、漁業会の方も「そぞ」で、別の名は知っておられなかった。此の際だからと、今、新聞社の方に調べてもらっているところである。
もし本名あっても
味は変らない
さえき やえ

▼三月のある日、奈良に住んでおられる、古い同人のCさんから突然の電話。何事ならんと緊張する私に、

受話器の向こうから「あんた酒好きやろ、春日さんの（春日大社）酒はいらんか？」とおっしゃった。

▼戸惑っている私に、さらに続けて「今から持つて行ったげるけど、あんたどこで降いたらええのんや？」とおっしゃる。重い荷

世に寺院でつくられた、僧

▼調べてみるとこの酒、中

口で有名である。（金）

▼春鹿^{はるか}で、辛

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「発表（8月号）」

地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

作品募集

8月号発表(6月15日締切)

川柳塔(8句)	橋高薫風選
水煙抄(8句)	河内天笑選
渺湖抄(3句)	八木千代選
茴香の花(3句)	西出楓楽選
課題吟(3句)	小出熊江美選
「許雲」	榊原秀子選
「敵す」	青枝鉄治選
「姿」(3句)	吐田公一担当

9月号
課題吟「X(エックス)」「茄子」
「楽しい」
初歩教室「地」

本社6月句会

とき 6月7日(月) 午後5時半
ところ アウィーナ大阪 4階
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分

兼題 「すんなり」
「虹」
「怒り」
「口」
「運」

橋高薫風選 福本英子選 玉置重人選 高山隆盛選 羽山隆盛選

席題 1題 当日発表(各題2句以内)
会費 500円 投句料 400円

本社7月句会 7日(水) 予定
兼題 「叱る」「人形」「酒」
「天才」「こころ」

夜市川柳募集

第1回「雨」新家完司選
ハガキに3句 6月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
 - (2) 渺湖抄・茴香の花欄・一路集(課題吟)および初歩教室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使用してください。ただし茴香の花欄は女性だけ。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 六百元(送料76円)

半年分 四千元(送料共)

一年分 七千九百元(同)

平成十一年六月一日発行

編集兼 橋高薫

発行人 橋高薫

印刷所 美研アクト

大阪市阿倍野区三好町一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

〒545-0005

発行所 川柳塔社

電話(06)691-1436

振替〇〇九八〇一五二三六八番

月原 宵明 川柳句集

しまなみ

序 仲川 たけし
橘 高 薫 風・黒 川 紫 香
B 6判・252頁・布装上製本
定 価 2000円(送料別)

日向ぼこ銃を担いだ顔でなし
山売った話花街あったころ
平手打ち叩いた方が泣いている
平穩の伊予で育った事勿れ
年金へ困る命が余りそう
締め切りがないので遺書はまだ書かぬ
しまなみの橋から二十一世紀

◎川柳塔社事務所でも取扱います

発行所

葉文館出版

〒556-0003

大阪市浪速区恵美須西二一八一
TEL 〇六・六六三四・五五四八

森井 菁居 川柳句集

愛すはば

小 島 蘭 幸 序 文
B 6判・204頁・美装
定 価 2000円(送料別)

愛すればこそこの冬をこの坂を
生き方の違いを敵のように言う
頂上に佇ってもついて来る昔
無視された一人が正論かも知れぬ
いのちある証拠にレール昼は伸び
八月の六日レジャーに汗をかき
口数の少ない妻にリードされ
これからが人生シナリオ妻と描く

◎川柳塔社事務所でも取扱います

発行所

葉文館出版

〒556-0003

大阪市浪速区恵美須西二一八一
TEL 〇六・六六三四・五五四八